



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	ギヤマン考 On Giyaman [from a Portuguese Diamante and/or a Dutch Diamante]- Changing Aspects of its Meaning -
Author(s)	棚橋 淳二 (Junji Tanahashi)
Citation	研究紀要 (SHOIN REVIEW), 第 20 号 : 23-138
Issue Date	1978
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

### < 第 20 号正誤表 >

五〇頁 四行目  
七七頁 二行目  
一〇三頁 二行目  
一一六頁 第一七図  
一二〇頁 第二二図  
一二三頁 第二四図  
一三二頁 一一行目

### 誤

宝暦十三年 (一七六三)  
江戸時以  
「嗚乎矣草」  
浜松市立美術館蔵  
左 (A) 27.9cm、右 (B) 27.6cm  
「瑠璃色」  
「嗚乎矣草」

### 正

宝暦十二年 (一七六二)  
江戸時代  
「嗚呼矣草」  
浜松市美術館蔵  
左 (A) 17.9cm、右 (B) 17.6cm  
「瑠璃」  
「嗚乎矣草」

# ギヤマン考

棚橋淳 二

## 一 緒 論

ギヤマンという語が第一にダイヤモンドを、第二にガラスを意味することは多くの辞書にみられるところである（第一表参照）。しかしながら第一義に限っても、ギヤマンが江戸時代を通じて常にダイヤモンドを表す語として用いられていたのか、なお検討を要する問題であるし、更にギヤマンがガラスを表す語となった経緯についても、『広辞苑』に記されているように「ガラスを切るに金剛石を用いたことから、切って細工したものを、ギヤマン細工と呼び、さらにガラスそのものをいうようになった」として差支えないのか考え直してみる必要があると思われる。『広辞苑』所載のこの説は現在では通説というよりむしろ定説であるとの見解もみられるが、<sup>(1)</sup>諸書の記述を検討すると未だ異説を唱える予地が残されているかにもえる。更にギヤマンの訳語に当てられた金剛石の語義として、諸辞書にはほとんどダイヤモンドのみが記されているが（第二表参照）、江戸時代には必ずしもダイヤモンドだけを指していたわけではなかったという事情もあり、ギヤマンの語義変化は単なる思いつきや当推量で片付けられる問題ではないように思われる。本稿ではまず金剛石・金剛砂・ダイヤモンドの関係を明らかにした上で、ギヤマンの語義変化について資料に基づいて論及してみたいと思う。なお用語の混乱を避けるため、等軸晶系に属する硬度一〇の炭素の結晶をダイヤモンドという語だけで表すことにする。また近代以降の諸書からの引用文を除き、稿中の「硝子」はすべて「びいどろ」と読まれることを前提としている。（本稿で

は人名・書名および引用文中の旧字体を新字体に改め、振仮名も適宜省略した。）

第一表 近代以降の諸辞書所載の「ギヤマン」の語義一覧。

編者	書名	初刷刊年	語	義	註
大槻文彦	『言海』	明治二十二年	①であまんノ訛、金剛石ニ同シ。	②誤テ、びいどろ。	(3)
大槻文彦	『大言海』	昭和七年	①であまんでノ訛。	②硝子ノ異名。(現今ノがらす)	(4)
物集高見	『日本大辞林』	明治二十七年		硝子。すゐしやうのごときやきもの	(5)
落合直文	『ことばの泉』	明治三十一年	①こんがうせきにおなじ。	②誤りて、がらすにおなじ。	(6)
金沢庄三郎	『辞林』	明治四十年	①金剛石。	②「ガラス」の異称。	(7)
金沢庄三郎	『新訂広辞林』	昭和九年	①金剛石。	②ガラス。	(8)
上田万年・他	『大日本国語辞典』	大正四年	①こんがうせき(金剛石)に同じ。ぎやまんで。ぎやまん石。	②転じて、がらす(硝子)の異名。	(9)
下中弥三郎	『大辞典』	昭和十年	オランダ語のヂアマン diamond の転伝。	誤用してガラス及びガラス製品をいった。	(10)
新村出	『辞苑』	昭和十年	①金剛石。	②硝子。	(11)
新村出	『広辞苑』	昭和三十年	①ダイヤモンド。金剛石。	②ガラスの旧称。	(12)
金田一京助	『明解国語辞典』	昭和十八年	①(ガラス切断用の)石。金剛。	②ガラス。	(13)
金田一京助	『辞海』	昭和二十七年	元来はダイヤモンドのついたガラス切りの道具の称であったという	江戸時代、ガラスやガラス製品の	(14)
大曲駒村	『川柳大辞典』	昭和三十七年		硝子の異称。	(15)
西尾実・他	『岩波国語辞典』	昭和三十八年	原語は金剛石の意。	ガラス。	(16)
榎垣実	『外来語辞典』	昭和四十一年	①金剛石、ダイヤモンド。	②ギヤマン細工。ガラス器。	(17)
荒川惣兵衛	『角川外来語辞典』	昭和四十二年	①ダイヤモンド。	②吹き玉、玻璃、ビードロ、ガラス。	(18)

新外来語研究会	「外来語辞典」	昭和四十三年	金剛石	ビードロ、ガラス。	(19)
鈴木勝忠	「雑俳語辞典」	昭和四十三年		硝子。	(20)
金田一春彦・他	「新明解古語辞典」	昭和四十七年	①ダイヤモンド。	②ガラスのこと。	(21)
時枝誠記・他	「角川国語中辞典」	昭和四十八年		①ガラス。②ガラスの容器。ガラス細工。	(22)
日本大辞典刊行会	「日本国語大辞典」	昭和四十八年	①江戸時代、ダイヤモンドを呼んだことば。	②ガラス製品一般をさす。ビードロ。玻璃(はり)。	(23)
大野晋・他	「岩波古語辞典」	昭和四十九年		近世、ガラス、またはガラス製品の称。	(24)
三省堂編修所	「コンサイス外来語辞典」	昭和五十一年	②ダイヤモンド。	①ガラス器、ギヤマン細工、吹き玉、玻璃(はり)、ビードロ。	(25)
久松潜一・他	「角川古語辞典」	昭和五十一年	①ダイヤモンド。	②ガラス。ビードロ。	(26)
久松潜一・他	「角川国語辞典」	昭和五十一年		ガラス器。	(27)
岡美千雄	「常用外来語新辞典」	昭和五十三年		ガラス。また、ガラス製の容器。	(28)
金田一春彦・他	「学研国語大辞典」	昭和五十三年			(29)

\* 主要な辞書は別として、他は手近にあつて利用し得たものに限った。

\* 配列は原則として刊行年順としたが、同一編者の辞書は一処にまとめた。

\* 初刷刊年の欄には当該版の初刷の刊年を記したが、版を刷の義に使用していると思われる書籍については初版の刊年を示した。  
\* 語義の欄には必要な箇所だけを抄録した。

第二表 近代以降の諸辞書所載の「金剛石」の語義一覧。

編者	書名	初刷刊年	語	義	註
大槻文彦	「言海」	明治二十二年	磁物ノ名、……(中略)……。金剛鑽。		(30)

大槻 文彦	【大言海】	昭和八年	鉱物ノ名。破折羅。デアマンテ。ギャマン。ダイヤモンド。金剛鑽。……(略)……	(31)
物集 高見	【日本大辞林】	明治二十七年	玉の名。水晶に似たる玉にて、形まろくながく、色あをくろし。また、赤ばみたるもあり。きはめてかたくして、よく、硝子をも切るといふ。	(32)
落合 直文	【ことばの泉】	明治三十一年	礦物。(ダイヤモンドについての説明)。	(33)
金沢 庄三郎	【辞林】	明治四十年	純粹なる炭素の結晶物、……(中略)……。「ダイヤモンド」。	(34)
金沢 庄三郎	【新訂広辞林】	昭和九年	純粹なる炭素の結晶物、……(中略)……。ダイヤモンド。	(35)
上田 万年・他	【大日本国語辞典】	大正五年	(ダイヤモンドについての説明)。夜光石。	(36)
下中 弥三郎	【大辞典】	昭和十年	ダイヤモンド。金剛鑽。破折羅。	(37)
新村 出	【辞苑】	昭和十年	【鉱】(Diamond) 宝石の。……(略)……	(38)
新村 出	【広辞苑】	昭和三十年	宝石の一。……(中略)……。金剛。ダイヤモンド。	(39)
金田一 京助	【明解国語辞典】	昭和十八年	宝石の一。(ダイヤモンドについての説明)。	(40)
金田一 京助	【辞海】	昭和二十七年	最も珍重される宝石。……(中略)……。ダイヤモンド。	(41)
諸橋 徹次	【大漢和辞典】	昭和三十四年	宝石の名。……(中略)……。ダイヤモンド。金剛。	(42)
西尾 実・他	【岩波国語辞典】	昭和三十八年	ダイヤモンド。	(43)
金田一 春彦・他	【新明解古語辞典】	昭和四十七年	ダイヤモンド。	(44)
時枝 誠記・他	【角川国語中辞典】	昭和四十八年	「ダイヤモンド」の別称。	(45)
大野 晋・他	【岩波古語辞典】	昭和四十九年	宝石の一。ダイヤモンド。	(46)
日本大辞典刊行会	【日本国語大辞典】	昭和四十九年	「ダイヤモンド」をいう。	(47)
久松 潜一・他	【角川古語辞典】	昭和五十一年	宝石の名。ダイヤモンド。	(48)
久松 潜一・他	【角川国語辞典】	昭和五十一年	ダイヤモンド。	(49)

\*第一表の註記に準ずる。

## 註

- (1) 新村出『広辞苑』(岩波書店、昭和四十二年、第一版第二十五刷)、五三三頁。第二版では「金剛石」の代りに「ダイヤモンド」と記されている(昭和五十年、第二版第九刷、五五三頁)。
- (2) 石綿敏雄「ぎやまんとびいどろ」△語源をたずねて——外来語(1)▽(日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』附録、『ことばのまど』1、小学館、昭和四十七年十二月、四頁)。
- (3) 大槻文彦『言海』(吉川半七、明治二十九年、第十版)、二六一頁。
- (4) 大槻文彦『大言海』第一卷(富山房、昭和十五年、百一版)、八二六頁。
- (5) 物集高見『日本大辞林』(宮内省、明治二十七年)、四七六頁。大阪府立中之島図書館朝日新聞文庫蔵〔書目276-6〕。
- (6) 落合直文『ことばの泉』きよりしまて(大倉書店、明治三十一年)、四三一頁。大阪府立中之島図書館朝日新聞文庫蔵〔書目276-2〕。
- (7) 金沢庄三郎『辞林』(三省堂書店、明治四十四年、四版)、三七〇頁。国立国会図書館蔵〔31-319-7〕。
- (8) 金沢庄三郎『新訂広辞林』(三省堂、昭和九年、新訂百六十版)、四三八頁。大阪府立中之島図書館蔵〔276-107⑨〕。
- (9) 上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』第一卷(富山房・金港堂書籍、大正四年)、一一六六頁。神戸市立中央図書館蔵〔813-61〕。
- (10) 下中弥三郎『大辞典』第七・八卷(平凡社、昭和二十八年、縮刷第一刷)、第八卷、一六頁。
- (11) 新村出『辞苑』(博文館、昭和十年)、四八五頁。国立国会図書館蔵〔617-264〕。
- (12) 新村出、前掲『広辞苑』五三三頁。
- (13) 金田一京助『明解国語辞典』(三省堂、昭和十九年、五版)、二一七頁。
- (14) 金田一京助『辞海』(三省堂、昭和四十九年、新装版)、四五八頁。

- (15) 大曲駒村『川柳大辞典』上巻（高橋書店、昭和四十八年、四十八版、四九〇頁。
- (16) 西尾実・岩淵悦太郎『岩波国語辞典』（岩波書店、一九六三年）、二二八頁。
- (17) 榎垣実『外来語辞典』（東京堂出版、昭和四十一年、再版）、一二五頁。
- (18) 荒川惣兵衛『角川外来語辞典』（角川書店、昭和四十三年、二十二版）、三二八頁。
- (19) 新外来語研究会（二階堂哲雄）『改訂増補外来語辞典』一九六八年序（日東書院、昭和五十二年）、一〇四頁。日東書院の説明では、改訂は誤字に関してのことであり、増補は巻末にまとめられているので、この版を初版に準ずるものとして扱った。
- (20) 鈴木勝忠『雑俳語辞典』（東京堂出版、昭和四十三年）、二九六頁。
- (21) 金田一春彦・三省堂編修所『新明解古語辞典』（三省堂、昭和四十七年）、三〇三頁。
- (22) 時枝誠記・吉田精一『角川国語中辞典』（角川書店、昭和四十八年）、五二一頁。
- (23) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第六卷（小学館、昭和四十八年）、七一頁。
- (24) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎『岩波古語辞典』（岩波書店、一九七四年）、三七八頁。
- (25) 三省堂編修所『コンサイス外来語辞典』（三省堂、昭和五十一年、第二版第三刷）、一七五頁。
- (26) 久松潜一・佐藤謙三『角川古語辞典』（角川書店、昭和五十一年）、三五六頁。
- (27) 久松潜一・佐藤謙三『角川国語辞典』（角川書店、昭和五十一年）、二四六頁。
- (28) 岡美千雄『常用外来語新辞典』（梧桐書院、昭和五十三年）、一〇五頁。
- (29) 金田一春彦・池田弥三郎『学研国語大辞典』（学習研究社、昭和五十三年）、四六五頁。
- (30) 大槻文彦、前掲『言海』三六六頁。
- (31) 大槻文彦、前掲『大言海』第二卷（昭和十五年、九十三版）、三六五頁。
- (32) 物集高見、前掲書、六〇六頁。
- (33) 落合直文、前掲書、きよりしまて、五六八頁。
- (34) 金沢庄三郎、前掲『辞林』五六八頁。

- (35) 金沢庄三郎、前掲「新訂広辞林」七三四頁。
- (36) 上田万年・松井簡治、前掲書、第二卷（大正五年、再版）、六一六頁。
- (37) 下中弥三郎、前掲書、第十一・十二卷（昭和二十八年、縮刷第一刷）、第十一卷、三九四―三九五頁。
- (38) 新村出、前掲「辞苑」七六八頁。
- (39) 新村出、前掲「広辞苑」八一四頁。
- (40) 金田一京助、前掲「明解国語辞典」三七三頁。
- (41) 金田一京助、前掲「辞海」七一〇頁。
- (42) 諸橋轍次「大漢和辞典」卷十一（大修館書店、昭和四十三年、縮写版第一刷）、四四九頁。
- (43) 西尾実・岩淵悦太郎、前掲書、三六二頁。
- (44) 金田一春彦・三省堂編修所、前掲書、四二七頁。
- (45) 時枝誠記・吉田精一、前掲書、七八八頁。
- (46) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎、前掲書、五二七頁。
- (47) 日本大辞典刊行会、前掲書、第八卷（昭和四十九年）、四八八頁。
- (48) 久松潜一・佐藤謙三、前掲「角川古語辞典」四九九頁。
- (49) 久松潜一・佐藤謙三、前掲「角川国語辞典」三七九頁。
- (50) 金田一春彦・池田弥三郎、前掲書、七二五頁。

## 二 金剛石と金剛砂

金剛という語は梵語 *vajra* の訳語で、金中最剛の意をもつ語であるという。<sup>(1)</sup>したがって金剛石という語も、やはり原義に近い金属中最も剛なる物に匹敵する堅硬な石の義として用いられた語であろうと思われる。また金剛砂の原義は砂状の

金剛石と推定するのが順当であろう。<sup>(2)</sup>

さて古代のわが国では玉石を研磨・穿孔するのに大坂沙が用いられていたようであり、「続日本記」や「延喜式」<sup>(3)</sup>にその名がみられる。例えば「続日本記」の天平十五年（七四三）九月十三日の条には、官奴・斐太が始めて大坂沙で玉石を加工した者であることが記されている。<sup>(4)</sup>ここに大坂沙とはその名称より推して大坂、即ち大和国北葛城郡二上村と河内国南河内郡国分村とを結ぶ、俗に穴虫越えと呼ばれる山道近辺から産する砂であろう。<sup>(5)</sup>

一方、金剛砂という語は天養（一一四四—一一四五）より長寛（一一六三—一一六五）乃至養和（一一八一—一一八二）頃に成ったといわれる『伊呂波字類抄』二、三巻本にみえるが、それぞれ「コムカウサ」<sup>シヤ</sup>「コムカウシヤ」とその音が記されているのみで何の註記もなく、この時代この語がどのような砂に当てられていたのか明らかにされていない。<sup>(7)</sup>

また金剛石という語は『源平盛衰記』〔鎌倉時代（一一九二—一三三三）成〕にみいだされるが、そこでは長光寺の縁起に関連して語られている。<sup>(8)</sup>即ち仏威の証として近江国蒲生郡武作村に出現した青・黄・赤・白・紫の五色の、光輝く方三尺の石のことを聖徳太子が聞かれ、その石は補陀洛山（観音の住むインド南端の山）では宝石または金剛石といい、唐では瑪瑙と名付けていると言うたという件である。したがってここでは金剛石は堅硬な石というより、美しいしかもむしろ超現実的な石を意味しているように思われる。

ところで『伊呂波字類抄』十巻本では金剛砂は大坂砂のことであると註記されている。<sup>(9)</sup>因に十巻本の成立は少くとも寿永二年（一一八三）以後であり、洞院実熙（一一四〇—一一四五）の増補との説もあるが確証はなく、詳細は未だ不明とのことである。<sup>(10)</sup>したがって大坂沙に対して何時頃から金剛砂という語が用いられるようになったかは容易に明らかにし難いと思われるが、金剛砂という語が中国より伝えられたとき、何よりもまずその原義に最も適合する砂、即ち玉石をも研磨・

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

穿孔し得る堅硬なる大坂沙にこの語が当てられたものと思われる。時代は下るが「続日本紀考証」(嘉永二年(一八四九)成)は大坂沙が大和の逢坂村上方および蒸穴村に産する金剛鑽であるとしている。<sup>(11)</sup>因に逢坂は現在奈良県北葛城郡香芝町に属し、二上山の北東約三杆の辺りに位置している。<sup>(12)</sup>また逢坂に隣接して穴虫、近畿電鉄南大阪線<sup>(じやうちん)</sup>二上山駅がある。ところで二上山(約五〇〇米)、金剛山(一一二五米)などのある金剛山地は大阪府と奈良県の境を南北に走る山地で、この山を形成する岩体(黒雲母安山岩)には柘榴石が含有され、<sup>(13)</sup>これが母岩の風化に際して流出・淘汰されて隨所に柘榴石の漂砂鉄床を形成している。それ故大坂沙・金剛砂、逢坂村の金剛鑽はいずれもこの砂状柘榴石に他ならぬことが推定でき

第一圖 二上山産柘榴石 Almandite の偏菱形二十四面体の結晶。最大のものの径 5 mm。清水照夫氏採集。横山英俊氏撮影。

るであろう。第一圖は日本地科学社社長・清水照夫氏採集の二上山産柘榴石 Almandite の良好な結晶で、同氏よりこの度特に恵与されたものである。

江戸時代に至るまでの金剛砂・金剛石に関する用例は少なく結論的なことはいい難いが、一応要約すると金剛山地山麓より産する柘榴石は天平頃には大坂沙と称され、玉石の研磨・穿孔に用いられていた。その後天養から寿永頃までには金剛砂とも称されるようになったと思われる。なお「源平盛衰記」にみられる金剛石は空想的なものであり、瑪瑙と同一視されているとしても堅硬であることには触れられておらず、美しさが強調されている点は注目に値するといえよう。

江戸時代になると物産書・辞書などに金剛石・金剛砂についての記述

が多くみられるようになる。玉石を研磨・穿孔するという限定された用途により特徴づけられていた金剛砂という語が終始、石榴石に当てられていたのに対し、相矛盾する性質が同時に示され、しかも本来わが国に産出しないダイヤモンドを表す語であった金剛石は、時代により、また人により異なる石に当てられてきた。それに伴い金剛砂との関係にも各様の考えがみられるのである。以下諸説に言及するに先立ち『本草綱目』所載の金剛石についての記述内容に触れておきたい。

『本草綱目』は万曆十八年（一五九〇）、明の李時珍によって著された五十二巻の書であり、寛永十四年（一六三七）以降、再三和刻本もだされ、江戸時代の本草学・博物学に多大な影響を与えた書であった。問題の金剛石の条下には六朝・東晋・宋など各時代に記された金剛石についての風説をまじえた諸説が収録されているので、それらを第三表にまとめておく。<sup>(14)</sup>この表の性質の欄をみても金剛石の実体は漠然としており、『抱朴子』『玄中記』『十洲記』に共通して記されている玉を刻み、割き得る程硬いという性質を除けば、むしろ混乱を招くような情報が多く、いわんやダイヤモンド特有の性質を示しているといえる記述はほとんどないといえよう（尤もダイヤモンド特有の性質を日常語で示すということはかなり困難なことではあるが）。恐らく時珍は金剛石についても文献的な考究だけをなしたにとどまり、その実物はみていなかったのではないかと思われる。<sup>(15)</sup>金剛石についての中国におけるこのような混乱した知識が『本草綱目』を介して江戸時代のわが国にそのまま持ち込まれたため、わが国における金剛石についての知識も中国におけると同様混乱したものとなったのであろう。

さて林道春（羅山）は『改正増補多識編』（寛永七年（一六三〇）以降刊）において、金剛石は多分「玉きり石」で、「金剛しやうの類」かとしており、<sup>(16)</sup>結果的には金剛石は石榴石と同類らしいと考えたことになる。

第三表 『本草綱目』所載の金剛石についての諸説一覽。

別称	産地	産状	性質・用途	出典
金剛鑽	西番・天竺		①金剛石の砂は玉を鑽り、 ②銚を補う（このため鑽という）。	明の李時珍
金剛	扶南	鍾乳状をなして 水底の石上に生ずる。	①紫石英（紫水晶）に似る。 ②玉を刻み得る。 ③鉄錐で打っても傷つかない。但し羚羊の角で叩くと 漼然として氷のように割れる。	東晋の葛洪「抱朴子」
			①紫背鉛（？）は金剛鑽を砕く。	独孤滔「丹房鑑源」
			①玉を細工するのに恒河の砂と金剛鑽で彫り込む。 ②形は鼠糞に似る。 ③青黒色の石・鉄のようなもの。	宋の周密「齊東野語」
金剛・削玉刀	大秦国		①大きいものは一尺ほど、小さいものは稻・黍ほど。 ②指環につけて玉を刻む。	「玄中記」
仏牙			①赤く焼いて醋に浸し砕せぬものは真物である。 ②鑽が鈍くなったならば、赤熱後冷定すれば鋭くなる。	
昆吾石	西海流砂		①鍛錬して剣を作れば鉄の如く、 ②光明は水晶の如く、 ③玉を割けば泥のように割ける。	六朝時代、「十洲記」

次いで黒川道祐はその著『雍州府志』（天和二年（一六八二）成）に、京都御幸町三条の北には玉屋が多くいて、大和国金剛山から産する金剛砂で水晶・珍石を磨いて種々の器物を作っていると記している。同じく金剛砂で水晶を磨き眼鏡・

数珠・舍利塔を作ることは『所作人由來人倫訓蒙図彙』（元禄三年（一六九〇）刊）にも記されている。<sup>(16)</sup>

さきに触れた『本草綱目』の金剛石の条には、金剛石の砂は玉を鑽り瓷（質堅くきめ細かい陶器）を修理するので鑽（穴を穿つ器）、即ち金剛鑽というたと述べられており（第三表）、また『大和本草』（宝永六年（一七〇九）刊）所引の『典籍便覧』にも金剛砂と金剛鑽が同物であるかのように記されている。<sup>(17)</sup> なお『大和本草』には金剛砂のことを世間では誤って「コンガウシャウ」と呼んでいるとも記されている。『多識編』『所作人由來人倫訓蒙図彙』には、この誤っているといわれた呼び方がみられる。因に『塩尻』所載の金剛鑽・金剛砂の記述はほぼ『大和本草』に拠っていると見えよう。<sup>(20)</sup>

寺島良安の編著に係る『和漢三才図会』（正徳二年（一七二二）序）は江戸時代中期以降、代表的な百科辞典としてひろく利用されたものであり、また一般の人々の知識の基礎となったものであった。この書の金剛石の条には『本草綱目』にみられる記述（第三表に要約）がやや簡略化して列挙され、続いて以下のような良安の所説が記されている。<sup>(21)</sup>

① 金剛石は河内の二上山の谷（山田村領内）より産出する。

② 粒の細粗は一定していない。

③ 金剛石を用いて水晶・硝子・諸玉石を鑽る（穴を穿つ）。

④ 磁器に孔を穿つときは金剛砂を置き、杉木を錐のように揉んで孔を穿つ。

⑤ 金剛石を水中に浸してから取出しても滯滴がない（水滴がつかない）。

河内の二上山の谷より産するのは前述のように柘榴石であり、良安が金剛石という語を柘榴石に当てていることは疑う余地がないであろう。なお磁器に孔を穿つのは『本草綱目』にいう「瓷を補う」ためであり、即ちその孔に針金を通し割れた磁器を継合せるためであろう。

木内重暁(石亭)は二千余の石を収集・研究し、また同好の友人の集めた石、当時盛んに行われた物産会に出品された石を多数観察し、その上、内外の典籍にみられる石についての記録にも明るい人であった。石亭の著した『諸国石話雲根志』三編〔享和元年(一八〇一)刊〕の十九「金剛石」の条下には凡そ次のようなことが記されている。<sup>(22)</sup>

①大和国下市の内田氏は同好の友で、かつて数百種の奇石を持って訪ねて来たことがある。その中に金剛石というものがあり、これは掌を合せたような形の石に、胡桃大で六角・八角の形をした銅のような鉄のような物、五、六粒が含まれていた。色は青黒く質は極めて堅く、木理が鮮かで光沢があり、同国の金剛山で拾ったとのことであった。

②自分もこれと同じ物を持っており、漢産であるとのことであるが明らかでない。信州の八方タガネと同じ形であるがやや異なる。

③京都百万遍屋敷の福島氏から贈られた金剛石は指頭大で、形状・光彩は内田氏のものと同じである。これは讃州丸亀海辺の松崎<sup>(23)</sup>の産という。

④美濃国赤坂山に金剛石というものがあって、形は鉄糞(金屎カ)のようで、方形でも円形でもなく極めて堅硬なものである。

以上のうち①は色が青黒いという点を除けば、ほとんど石榴石と考えてよいものと思われる。②もほぼ同様とみてよいであろう。信州の八方タガネについては、同じく三編の十三「八方多賀根」の条に信州伊那郡和田村に産し、銅の八稜の玉で、自然に削ったようであり、大きさ胡桃ほどあり、外側は薄黒く内部は金銅色であると述べられている。<sup>(24)</sup>因に和田峠は石榴石を産することで著名な所である。従って今井功氏も指摘しておられる如く、石亭記載の金剛石は石榴石であるといよえう。ところで『雲根志』後編〔安永八年(一七七九)成〕には二十七「石榴石」<sup>(25)</sup>の条があり、そこでは石榴石(一)柘

榴石)は和漢には産せず、蛮夷の国に産し、豆粒大、深紅紫色透明で、石中に核があるように見え、自分も数箇所持して  
いと述べられている。<sup>(27)</sup>これは柘榴石の中でも寶石として用いられる良質の鉄礬柘榴石 Almandite と推定される。<sup>(28)</sup>石亭  
はこのように石榴石、即ち柘榴石という語を知っていたにも拘らず、金剛山地・和田峠の柘榴石にこの語を当てなかつた  
のは何故であろうか。『本草綱目』の「寶石」の条下には紅色の刺子(Ruby)・碧色の靛子(Sapphire)・翠色の馬廬珠  
(Sapphire)・黄色の木難珠(Topaz・Golden Beryl)・紫色の蠟子(G)・鴉鵲石(G)・猫精石(Cat's eye)・紅扁豆  
(G)などと同種のものとして石榴石(Garnet)即ち柘榴石が挙げられている。<sup>(29)</sup>したがって石榴石という語には紅色透明  
な種皮をもつ柘榴の種子にも匹敵する美麗な石としての語感が強くあつたといえよう。『雲根志』所載の蛮産の石榴石が  
示す深紅紫色透明という性質もこの語のもつていたはずの語感によく一致すると思われるが、金剛山地産の柘榴石は赤褐  
色半透明、<sup>(30)</sup>和田峠産の柘榴石は紅黒色不透明で、<sup>(31)</sup>いずれも一致するとはいえない。一方金剛石という語には既に述べたよ  
うに玉石をも刻み、割き得るほど堅硬な石としての語感が強くあり、したがってこの語が、古来玉石の研磨・穿孔材とし  
て用いられ極めて堅硬なことから既に金剛砂と称されていた金剛山地産の柘榴石に当てるにふさわしい語として考えられ  
たのであろう。石亭の金剛石についてのこうした見解は、石亭が会員数百人よりなる奇石会の指導的立場にあつたといわ  
れる人だけに、<sup>(32)</sup>その影響も大きいものであつたと思われる。

ところが当時既に盛んになっていた蘭学の影響で、本草・物産諸家はダイヤモンドに関する当時の西欧の知識を得るこ  
ととなり、その結果、金剛石に対する認識に変化が現れ始めた。例えば安永五年(一七七六)に刊行された松平秀雲(君  
山)の『本草正譌』は『本草綱目』『大和本草』などの所説につき、その正譌を志した書といわれる。その「金剛石」の  
条には、<sup>(33)</sup>

① 金剛石は金剛鑽である。

② 貝原益軒は金剛鑽に金剛砂を当てているが誤りである。

③ 『斉東野語』の説から考えると、金剛鑽はオランダ人が持来るギヤマンであり、恒河の砂はコンガウシヤウ、即ち金剛山から出る砂である。

と述べられている。したがって君山は金剛石と金剛砂は別物とし、金剛石・金剛鑽はギヤマン、金剛砂・コンガウシヤウは恒河の砂に相当するものと考えていた。また小野職傳（蘭山）は『本草綱目啓蒙』〔享和三年—文化三年（一八〇三—一八〇六）刊〕の「金剛石」の条下で『典籍便覧』の金剛砂は金剛石と同様のものとし、玉工が用いる金剛シヤウは合玉石のことで金剛石とは別物とし、その「合玉石」の条下では、

① 合玉石は赤黒色・黄赤色の砂で稜角がある。

② 玉石を切り、磨くに用いる。

③ 河州金剛山・和州生駒山・丹後・土州・讃州に産する。讃州のものには四、五分のものがある。

④ 『天工開物』の解玉、「通雅」の那砂と同物である。

と述べている。即ち蘭山は金剛砂と金剛シヤウを別物とし、金剛砂は金剛石に、金剛シヤウは合玉石に対応させている。なお合玉石は上記の性質・産地より柘榴石と推定される。

一方山本世儒（亡羊）〔安政六年（一八五九）歿・八二才〕は『本草綱目釈義』の「金剛石」の条で、『典籍便覧』所載の金剛砂に関連して次のように述べている。<sup>86)</sup> 和名に「金剛」という語があり、これを「コンゴウセウ」と読む。漢名は合玉石である。和名で金剛砂と（も）いう。そのために昔は金剛石のことだとする説があったが誤りである。また「合玉石」

の条下では<sup>37)</sup>

- ① コンガウシヤウ・コンゴウシヤという。
- ② 金剛山の麓から産する。
- ③ 玉を切る場合は、この砂と水とを合せ、刃のない鋸で引く。
- ④ 茶色で光沢がある。
- ⑤ 讃岐産のものは大きく一分ほどあり、河内産のものは細かい。

と『本草綱目啓蒙』に類することが述べられている。但し亡羊は金剛石と金剛砂を別物とし、金剛砂には金剛シヤウ・合玉石を対応させている。

以上述べた諸説を含め金剛石・金剛砂などの諸石名の関係を第四表にまとめておく。

第四表 諸書にみられる金剛石・金剛鑽・金剛砂・コンガウシヤウ・合玉石等の関係一覧。

出典	成・刊・著者歿年	諸石名の関係	註
『本草綱目』	万曆十八年刊	金剛石⇨金剛鑽	
『多識編』	寛永七年以降刊	金剛石 <sup>玉</sup> ⇨タマキリイシ⇨ <sup>コング</sup> 金剛シヤウノタクイ⇨ <sup>コングウシヤ</sup> 金剛鑽	
同	同	合玉石 <sup>カクキョウ</sup> ⇨ <sup>コング</sup> タマスライシ	
『毛吹草』	寛永十五年成	金剛砂 <sup>コングサ</sup> ⇨『柘榴石』	
『雍州府志』	天和二年成	金剛砂⇨『柘榴石』	
『人倫訓蒙図彙』	元禄三年刊	金剛砂 <sup>コングサ</sup> ⇨『柘榴石』	
『大和本草』	宝永六年刊	金剛鑽⇨金剛砂⇨コンガウシヤウ⇨『柘榴石』	

〔渡辺幸庵対話〕	宝永八年歿	金剛寶石	(39)
〔和漢三才図会〕	正徳二年序	金剛石〓金剛砂〔〓柘榴石〕	
〔塩尻〕	享保十八年歿	金剛鑽〓金剛砂〓金剛しやう	
〔本草正譌〕	安永五年刊	金剛石〓金剛鑽〓ギヤマン石恒河ノ砂〓コンガウシヤウ〔〓柘榴石〕	
〔雲根志〕三編	享和元年刊	金剛石〔〓柘榴石〕	
〔本草綱目啓蒙〕	享和三年刊	金剛石〓金剛砂〓デヤマン石金剛シヤウ〓合玉石〓解玉砂〓那砂〔〓柘榴石〕	
〔蘭語訳撰〕	文化七年刊	金剛石〓Diamond 石金剛鑽〓Amaril	(40)
〔厚生新編〕	文化八年	金剛石〓チアマント石金剛砂〓アマリル〓スミルゲル	(41)
同	文化十一年成	合玉砂〓テリベル・アールデ〓テリベル・ステーン	(42)
〔紀伊統風土記〕	天保十年成	合玉石	(43)
〔本草綱目釈義〕	安政六年歿	金剛石〓ギヤマン石〓〔金剛砂〕	
		石金剛〓合玉石〓金剛砂	

註

- (1) 日本大辞典刊行会「日本語大辞典」第八卷（小学館、昭和四十九年）、四八六頁。
- (2) 諸橋轍次「大漢和辞典」卷十一（大修館書店、昭和四十三年、縮写版第一刷）、四四九頁。同書には金剛砂の語義として「金剛石の粉末。又、石榴石の細末」とある。
- (3) 「延喜式」卷十七「内匠寮」の内、「馬瑠御腰帯」の条（『新訂増補国史大系』第二十六卷、吉川弘文館、昭和四十年）、四五二頁。以下原文。

切石料大坂沙一石。

- (4) 「続日本紀」卷十五（前掲『新訂増補国史大系』第二卷、昭和四十一年）、一七五頁。以下原文。

〇己酉。免<sup>十三</sup>官奴斐太<sup>シテ</sup>從<sup>レ</sup>良<sup>シ</sup>。賜<sup>ニ</sup>大友<sup>ノ</sup>史<sup>ノ</sup>性<sup>ヲ</sup>。斐太<sup>ハ</sup>始<sup>メ</sup>以<sup>テ</sup>大坂<sup>ヲ</sup>治<sup>シ</sup>。玉石<sup>ノ</sup>之人<sup>ナリ</sup>也。

- (5) 丸山林平「上代語辞典」(明治書院、昭和四十二年)、二二三頁。
- (6) 山田孝雄「伊呂波字類抄 解題」(正宗敦夫編「伊呂波字類抄」第一、日本古典全集刊行会、昭和三年)、二一三頁。
- (7) 中田祝夫・峯岸明「色葉字類抄研究並びに索引」本文・索引編、影印版(風間書房、昭和三十九年)、二四七頁(前田本・下七オ、黒川本・下六オ)。
- (8) 「源平盛衰記」遊巻第三十九、三浦理編(有朋堂書店、大正三年、再版)、下巻、四七三頁。以下原文。  
命を承つて尋行て是を見れば、西南に去事三十余町を阻て、一の山の麓に方三尺の石あり、青黄赤白紫の五色にて、眼を合するに目まぎれせり。傍に八尺余の香薰の木あり、匂人間に類なし。此由妃に奏すれば、妃又太子に奏せらる。太子宣て曰、石は補陀洛山にしては寶石と名、或は金剛石と云、大唐には瑪瑙と名たり、
- (9) 正宗敦夫編、前掲「伊呂波字類抄」第七(昭和四年)、影印版、四十二オ。
- (10) 山田孝雄、前掲「解題」、五頁。なお実熙の生年、出家の年は「日本歴史大辞典」第七巻(河出書房新社、昭和五十年、増補改訂版十一刷)、一四二頁によった。
- (11) 下中弥三郎「大辞典」第三・四巻(平凡社、昭和二十八年、縮刷第一刷)、第四巻、三二八頁。
- (12) 村尾元融「続日本紀考証」版本(明治三年刊)は全十二巻中第三巻までで、その中に天平十五年九月の条はみられず、「大辞典」所載の引用文を校合し得なかった。
- (12) 「1:50,000地形図 NI-53-15-5 大阪東南部(和歌山5号)」(国土地理院、昭和五十一年)。
- (13) 福地信世「日本鉱物誌」(丸善、大正五年)、二二七頁。
- 神津俣祐・河野義礼「穴虫産柘榴石の化学成分に就て」(「岩石鉱物磁床学」第二十一巻、昭和十四年)、八〇―八一頁。
- 大森啓一「二上山産柘榴石の研究」(1) (「岩石鉱物磁床学会誌」第二十七巻、昭和十七年)、三九―四二頁。
- (14) 李時珍「校正本草綱目」貝原益軒校訂、版本、寛文十二年刊、第十巻、三五ウ―三六オ。以下原文。

金剛石綱目

〔釈名〕金剛鑽〔時珍曰〕其砂可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>鑽<sub>レ</sub>玉ヲ補<sub>レ</sub>。蓋<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>鑽<sub>一</sub>

〔集解〕〔時珍曰〕金剛石出<sub>レ</sub>西番天竺諸國。葛洪抱朴子云、扶南出<sub>レ</sub>金剛。生水底石上。如<sub>レ</sub>錘乳狀。体似

紫石英。不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>刻<sub>レ</sub>玉。人没<sub>レ</sub>水取<sub>レ</sub>之。雖<sub>レ</sub>鉄推<sub>レ</sub>擊<sub>レ</sub>之。亦不能<sub>レ</sub>傷。事惟<sub>レ</sub>羚羊角。扣<sub>レ</sub>之。則漚然。水如<sub>レ</sub>泮丹。

房鑑源云、紫背鉛能<sub>レ</sub>碎<sub>レ</sub>金剛鑽。周密齊東野語云、玉人攻<sub>レ</sub>玉。以<sub>レ</sub>恒河之砂。以<sub>レ</sub>金剛鑽<sub>レ</sub>鏤<sub>レ</sub>之。其形如<sub>レ</sub>

鼠矢。青黑<sub>レ</sub>色。如<sub>レ</sub>石。如<sub>レ</sub>鉄。相伝<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>西域。及<sub>レ</sub>回紇高山頂上。鷹隼粘帶<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>腹中。遺<sub>レ</sub>糞。糞中<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>刻

未<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>然否。玄中<sub>レ</sub>記云、大秦國<sub>レ</sub>一名削玉刀大<sub>レ</sub>者。長<sub>レ</sub>尺許。小<sub>レ</sub>口<sub>レ</sub>者。如<sub>レ</sub>稻黍<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>環中。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>刻

玉。玉<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>之。則金剛有<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>者。番僧<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>充<sub>レ</sub>仏牙<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>也。欲<sub>レ</sub>ハ弁<sub>レ</sub>真偽<sub>レ</sub>。但<sub>レ</sub>燒<sub>レ</sub>赤<sub>レ</sub>淬<sub>レ</sub>醋<sub>レ</sub>中。如<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>酥<sub>レ</sub>碎

一者<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>真<sub>レ</sub>。若<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>鈍<sub>レ</sub>。則煅<sub>レ</sub>赤<sub>レ</sub>冷<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>銳<sub>レ</sub>也。……〔中略〕……十洲記載<sub>レ</sub>西海流<sub>レ</sub>砂<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>昆吾<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>ス。劍

ト如<sub>レ</sub>鉄<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>精<sub>レ</sub>割<sub>レ</sub>玉<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>泥<sub>レ</sub>。此<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>金剛<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。

李時珍「新註校定國訳本草綱目」木村康「新註校定代表、第三冊（春陽堂書店、昭和四十九年、新註増補版）、五六二―五六四頁。

(15) 名古屋市教育局「名古屋叢書」第十三卷（同委員会、昭和三十八年）、解説五頁。

(16) 林道春（羅山）「改正増補多識編」版本、刊年不詳、卷之一、二十九オ。大阪府立中之島図書館蔵〔299-48〕。以下原文。

金剛石〔和名〕今按<sub>スルニ</sub>多末<sub>タマキ</sub>幾里<sub>キリイ</sub>伊志<sub>イシ</sub>蓋<sub>カシ</sub>金剛<sub>コングウ</sub>志<sub>シ</sub>也<sub>ヤ</sub>。字<sub>ウノ</sub>乃<sub>ノ</sub>多<sub>タ</sub>久<sub>ク</sub>伊<sub>イ</sub>敷<sub>カ</sub>〔増補異名〕金剛鑽<sub>コングウザン</sub>

なお卷之一、二十オに以下の記述がある。

合玉石〔和名〕多末須利伊志<sub>タマキリイシ</sub>

(17) 黒川道祐「雍州府志」影印版（新修京都叢書刊行会「新修京都叢書」第十卷、臨川書店、昭和四十三年）、四八〇頁（卷六、土産門

上、三十八ウ）。以下原文。

玉石ノ具 御幸<sub>レ</sub>町<sub>三</sub>条<sub>ノ</sub>北<sub>多</sub>シ<sub>玉</sub>人<sub>一</sub>水<sub>精</sub>并<sub>珍</sub>石<sub>以</sub>ニ<sub>金</sub>剛<sub>砂</sub>ヲ<sub>磨</sub>ニ<sub>琢</sub>ス<sub>之</sub>ヲ<sub>作</sub>ニ<sub>雜</sub>品<sub>物</sub>ニ<sub>是</sub>ヲ<sub>謂</sub>ニ<sub>玉</sub>屋<sub>ト</sub>金<sub>剛</sub>砂<sub>ハ</sub>出<sub>ル</sub>

自<sub>リ</sub>太<sub>和</sub>ノ<sub>国</sub>金<sub>剛</sub>山<sub>一</sub>

(18) 蒔絵師源三郎画『所作入由來人人倫訓蒙図彙』版本、元禄三年刊、五、二ウ。京都大学附属図書館蔵〔3-47、シ、坪：M03281〕。以下

原文。

〔珠摺〕眼鏡珠数粒舍利塔皆水晶をもつて造る其外諸の石緒占是をつくる金剛砂に水を酒て鉄の桶にあて、是をするなり

(19) 貝原益軒「大和本草」版本、宝永六年、卷之三、二十オ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔462-1〕。以下原文。

金剛鑽 典籍便覧「日一名金剛砂出西番深山之高頂人不可到云今人以之刻玉補盜故曰鑽○河内国金剛山下ヨリ出

金剛砂俗ニアヤマリテコンガウシヤウト云同国飛鳥川ニモアリ未聞他土之所産大和ニモ飛鳥川アリソレニハ非ス是用テ玉ヲスリ石ヲミガク

(20) 天野信景「塩尻」(日本随筆大成編輯部「日本随筆大成」第三期第九卷、日本随筆大成刊行会、昭和五年、六九二頁。

(21) 寺島良安「和漢三才図会」版本、正徳二年序、卷第六十一、二十七オー二十七ウ。びいどろ史料庫蔵。以下原文。

△校金剛石出ミツ河州ニ上岳之谷即山田村ノ嶺内粗細不一用之鑽水精硝子及諸玉石凡磁器欲穿孔者先以金剛砂一撮在ニ其処ニ以杉木錐一穿其処屢々シテ而為孔一異也

又金剛石漬水中ニ取之出之更ニ濡一滴一亦奇也

(22) 木内重暁(石亭)「諸國石話雲根志」三編、版本、享和元年刊、卷之四、九ウー十オ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-10〕。以下原文。

大和国下市内田氏ハ同癖の友なり過し頃奇石數百種を携へはじめて予が亭を訪ハる其中に金剛石といふものあり掌を合すがとき  
の雜石に銅のごとく鉄の如き胡桃の大きな六角八角の物を五六孕めり其色青黒く質至つて硬く木理鮮にして光あり同国金剛山に  
て拾ひ得たりと尤賞美すべき奇品なり予もこれを一粒所持す漢産なりといひ伝ふれど可否をしらず信州の八方タガ子と同形の物に  
て又異なり洛百万遍屋敷福島氏より恵まる、金剛石ハ大き指頭のごとく形状光彩内田氏の珍蔵に同じ讚州丸龜海辺松崎の産なりと  
又美濃国赤坂山に金剛石といふもの有形鉄藁のごとくにして方ならず円ならず堅硬なる事ハたくひなし

(23) 「1:50,000地形図 NT-53-27-7 仁尾(岡山及丸龜7号)」(国土地理院、昭和四十三年)。高瀬川川口東岸。

(24) 木内重暁(石亭)、前掲書、三編、卷之四、六オー六ウ。以下原文。

信州伊奈郡遠山和田村の内万古村に八方タガ子といふものあり全体白き雜石にて小米石といふ物なりこれを破砕けば石中に銅の八

稜の玉あり自然にして削るが如く大き胡桃ばかりなる玉にて外皮ハ薄黒く玉中ハ金銅の色なり拳ばかりなる石を砕けば彼玉三四五  
孕めりかくのごときもの他産ある事をしらず漢産また詳ならず最奇品にして愛すべきものなり尾州津島氷室氏恵まる

木内石亭『雲根志』今井功訳注解説(築地書館、一九六九年、四六〇頁、注一一参照。

(25) 福地信世、前掲書、二二六頁。

(26) 木内石亭(今井功訳注解説)、前掲書、四六一頁、注一六。

(27) 木内重暁(石亭)『雲根志』後編、版本、安永九年刊、卷之一、十五オ―十五ウ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔45010〕。以下原文。

石榴石ハ和漢ともに産所あることをきかす多くハ蛮夷の国より産するよし云伝ふ何れの頃渡しや其故をしらず形状豆粒の大きにし  
て深紅紫色明白に透徹石中に核あるがごとし真に石榴の核に似たり予数粒を蔵す今尋る人あり売物稀にあり本草綱目宝石の条に出  
たり

(28) 鈴木敏『宝石誌』大正五年(思文閣、昭和四十九年、復刻版)、二二二―二二三頁。

(29) 李時珍(貝原益軒校訂)、前掲書、第八卷、五十二オ―五十二ウ。

括弧内の英名は李時珍(木村康一新註校定代表)、前掲書、第三冊、二六六頁。益富寿之助氏による新註(3)によった。

(30) 福地信世、前掲書、二二三頁・二二七頁。

(31) 福地信世、前掲書、二二三頁・二二六頁。

(32) 斎藤忠『木内石亭』(人物叢書97、吉川弘文館、昭和三十七年)、三三頁・八二頁。

(33) 松平秀雲(君山)『本草正論』七(名古屋市教育委員会、前掲書、第十三卷)、一六〇―一六一頁。以下原文。

金剛石。一名金剛鑽、貝原氏はヲ金剛砂トス、大ニ誤レリ。時珍曰、齊東野語云、玉人攻レ玉以三恒河之砂、以三金剛鑽ニ鑲レ之、  
…(中略)…。是ヲ以テ考ルニ、紅毛人将来ス蛮名ギアマント云物、是ナリ。其恒河ノ砂ハ俗ニ云コンガウシヤウナリ、金剛  
山ニ出ル物、是ナリ。

(34) 杉本つとむ『小野蘭山本草綱目啓蒙』——本文・研究・索引——影印版(早稲田大学出版部、昭和四十九年)、七三頁(巻之六、十四オ)。  
以下原文。

金剛石……(中略)……「一名」金剛砂典籍便覧……(中略)……又今玉工用ユルトコロノ金剛シヤウト呼フモノハ合玉石青玉附録シテ本条トハ別ナリ

③⑤ 杉本つとむ、前掲書、四五―四六頁(巻之四、三十一―三十二オ)。以下原文。

合玉石 コンゴウセウ色赤黒キ砂ナリ又黄赤色ナルモアリ形多ク稜角アリテ玉石ヲ切り或ハ磨クニ用ル砂ナリ河州ノ金剛山和州ノ生駒山等ヨリ出ス又丹後土州及諸州ニアリ讃州ニハ大塊四五分ナルモノアリ又天工開物ニ解玉砂ト云ヒ通雅ニ那砂ト云モ皆此物ナリ

③⑥ 「古事類苑」50「植物部二・金石部」(吉川弘文館、昭和四十六年)、金石部、三二三頁。以下原文。

金剛石……(中略)……一名 金剛砂(以下割註) 典籍便覧、和名ニ金剛ト云モノアリ、コレハコンゴウセウト説テ、漢名ハ合玉石ト云モノナリ、和名金剛砂ト云、故ニ昔ハ本条ノコトニスル説アリ、非ナリ

山本世儒(亡羊)「本草綱目釈義」は財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に蔵されているが、貴重書扱いで閲覧が禁じられているため「古事類苑」所載の引用文を校合し得なかった。なお現在マイクロフィルムによる複写が企画されているとのことである。

③⑦ 前掲「古事類苑」50、金石部、三二三―三二四頁。以下原文。

コンガウシヤウト云、又コンゴウシヤトモ云、俗名ナリ、金剛山ノフモトヨリ出ヅ、玉ヲ切ルニ此沙ト水トヲ合ワシテ、ハノナキ鋸ニテ引ク時ハ、切レルナリ、此沙ハ茶色ニシテ光リアリ、讃岐ヨリ出ルハ大ニシテ、一分ホドアリ、河内ヨリ出ルハ細カシ、

③⑧ 松江重頼「初印本毛吹草」影印篇、加藤定彦編(ゆまに書房、昭和五十三年)、一四六頁(巻四(第三冊下)十三オ)。

松江重頼「毛吹草」竹内若校訂(岩波書店、昭和十八年)、一六三頁。

③⑨ 渡辺幸庵「渡辺幸庵対話」(『改定史籍集覧』第十六冊、近藤出版部、明治三十九年、再版)、二五三頁。幸庵の歿年などは同書、二五五頁による。

④① 奥平昌高「蘭語訳撰」鈴木博解題・索引、影印版(臨川書店、昭和四十三年)、四五二頁(五ノ十三オ)・三七二頁(四ノ二十九ウ)。

④② ショメル「厚生新編」馬場貞由・大槻茂質(玄沢)・他訳、1、影印版(恒和出版、昭和五十三年)、一〇七一―一〇八頁。「金剛砂」の条のみられる第三巻には上呈の年が記されていないが、「訳編初稿大意」が文化八年、第五巻が文化十一年の上呈故、この間の成

立と見えたり。以下原文。

○金剛砂オニキ和語「マヤリル」「ン各」「スマルザル」「羅純」「スマリス」

金剛砂ハ一つの硬き石にして其色鉄の如し伊イ斯ス把バ尼ニ亜ア。諸イ厄キ里リ亜ア。及ハひ蘇ス亦キ齊シ亜ア。の銅山金山等より出デて  
M. Noel Chomel: Algemeen Huishoudelijk, Natuur-, Zedekundig-, en Konst- Woordenboek, Tweede Druk geheel  
verbetert, en meer als de halve vermeerdert door J. A. de Chalmot, enz., Leyden en Leeuwarden, 1778, 1te Deel,  
blad. 67. 国立国会図書館蔵〔蘭・65〕。以下右の原文。

AMARIL: *Smirgel*, in 't latijn *Smiris*: is een zeer harde steen, of steenagtige *Marcasit*, heeft een ijzerverwige  
kleur, wordende in *Spanjen, Engeland en Zueden* uit de Koper- en andere mijnen gegraven:

Amaril 亞答羅の Emery と相似し (K. Ten Bruggenate: *Engelsch Woordenboek*, Tweede Deel, *Nederlandsch-Engelsch*,  
Haag, 1918, blad. 38) 黒色または灰色の粒状鑛玉で、磁鉄鉱または赤鉄鉱を密に混合した状態の含有物 (E. S. Dana:  
*The System of Mineralogy of James Dwight Dana*, 6th Ed., John Wiley & Sons, Inc., 1920, p. 212)。

④ ショメル、前掲「厚生新編」一、一三三頁。以下原文。

合玉砂ハ質軽く色淺葱にして脆き石なり石なり…… (中略) ……此石玉工金銀工等其材を琢磨して白色を出たし且光沢を益すの料  
とす一種下品の物あり只厨下シユウカの銅鉄諸具を研くのみ

⑤ 仁井田好古「紀伊統風土記」卷之九十三、和歌山県神職取締所編、第三輯(帝國地方行政学会出版部、明治四十三年)三二一頁。

### 三 キヤマン(石)

キヤマンの語源については古くはオランダ語 *Diamant* となすシンベルグ C. P. Thunberg の説があり、<sup>(1)</sup> の説を含め  
て近代以降次に示すような諸説が提唱された。

- ① オランダ語 *diamant* よりとなす説<sup>(2)</sup>
- ② フランス語 *diamant* よりとなす説<sup>(3)</sup>
- ③ ポルトガル語 *diamante* よりではないとなす説<sup>(4)</sup>
- ④ ポルトガル語 *diamante* よりとなす説<sup>(5)</sup>
- ⑤ ポルトガル語 *diamante* よりか、ポルトガル語中のフランス語 *diamant* よりかとなす説<sup>(6)</sup>
- ⑥ フランス語 *ディアマン diamant* がオランダを経てとなす説<sup>(7)</sup>
- ⑦ ポルトガル語 *diamão* よりとなす説<sup>(8)</sup>

しかし近年はポルトガル語 *diamante* とオランダ語 *diamant* を語源として併記している辞書がかなりみられる。ただ、こうした語源の問題、さらにはジアマン (テ)・デヤマン・ギヤマン (テ) などの音韻変化の問題は本稿の目的を超えるので、これ以上触れないことにする。

さて慶長四年 (一五九九) に長崎コレジョにおいて刊行された『きやとへかとる』*Guia do Pecador* には「ちやまんで」について、<sup>(9)</sup>

① どれほど硬い物でも、それく和らかにする方法がある。

② 金・銀・銅・鉄の場合は火で和らかにする。

③ ちやまんでという玉は他にこれ程硬いものはないということだが、或る獣の血で和らかにしておいて磨くのである。と述べられている。ちやまんでが至高の硬さをもつ玉であることから金剛石 (砂) に相当するものではないかと考える者もあつたかも知れぬが、仮りに宣教師が金剛砂 (＝柘榴石) を一見したとすれば直ちにそれがちやまんででないことを指摘

したであろうし、相当する和名がないまま音訳の形をとったのではないかと思われる。因にドミニコ修道会 Dominicans の宣教師コリヤード Diego Collado 編の『羅西日辞典』(一六三二年刊)の diamante の項には、<sup>(10)</sup> 訳語として「あるたまもの(ある玉物)とあり、玉の類であることが示されているだけで、やはりジアマンテに相当する和名は当時なかったように思われる。なお南蛮人渡来当時のわが国の人々の宝石に対する評価はイエズス会の巡察師ヴァリニャーノ A. Valignano の『日本諸事要録』(一五八三)第二章にもみられるように決して高いものではなく、<sup>(11)</sup> それだけに宝石についての関心も知識も乏しかったと推定される。ついでながら Diamante が例えば大友宗麟秘蔵の茶壺のような宝物を表す言葉としても、一五八五年当時、ポルトガルのイエズス会のバーデレ、フロイス Luis Frois によって用いられていたことにも留意すべきであろう。<sup>(12)</sup>

時代は下るが西川正休は『増補華夷通商考』(宝永五年(一七〇八)刊)巻之四「阿蘭陀」において「ギヤマンテ」について<sup>(13)</sup>

① デヤマンともいう。

② 色は紫赤が多い。

③ 鉄錠でたたいても砕けない。

④ 金剛石・菩薩石の類という。

と述べている。③は金剛石の性質として『本草綱目』所載の諸書の記述にもみられるように古くから取上げられてきた性質であるが、金属としての金剛ならばともかく、石の場合は無意味な叙述であろう。とすれば結局ここには色についての記述以外、何の特性も示されていないことになる。ダイヤモンドには黄・赤・橙・緑・青・茶などの色を帯びたものがあ

るとはいうものの、無色のものが一般であるし、また「其色紫赤多シ」という表現より推して、このギヤマンテの色はわずかに紫赤を帯びているという程度のものではなく、かなり濃色であるかのように思われる。したがってこのギヤマンテをダイヤモンドと考えるにはやや疑問が残るといえよう。それ故この記述は正体が風説によって記したか、或はルビー・石榴石などの類をギヤマンテと偽り教えられて記したか、いずれにせよ信憑性の少ないものと考えられる。因に「菩薩石」という語は『本草綱目』『和漢三才図会』『本草綱目啓蒙』などにみえ、砂金石 Avantine、轉のはいた水晶などに充てられたこともあったが、益富寿之助氏はこれを水晶の一種、Herkimer diamond (無色透明、四周完全、多数の空晶・気泡を含む水晶) に充てておられる。<sup>(15)</sup>

寺島良安は『和漢三才図会』の「金剛石」の条の末尾において「ギヤマンの玉」につき、<sup>(16)</sup>

①金剛石の一種に伽曼玉(ギヤマンの玉)がある。但しギヤマンの正しい表記の仕方は未詳である。

②ギヤマンの玉は黒く、燧石に似て稜むすがあり、極めて硬く、玉石・磁器を泥でもあるかのように彫り鑿つことができる。

③オランダからもたらされるもので、恐らくオランダの金剛石の類と思われる。

と述べ、ギヤマンの玉を金剛石の類ではないかと考えている。このギヤマンの玉は事に依ると加工用具に用いられる黒色ダイヤモンド Carbonado、もしくは黒色鋼玉 Emery であったかも知れない。<sup>(17)</sup>しかし先にも述べたように『和漢三才図会』にみられる金剛石は多くの場合石榴石を指していたと推定され、したがってギヤマンの玉も結果的には石榴石の類と考えられたことになるであろう。

享保九年(一七二四)に佐藤信景(不昧軒)が著し、後年佐藤信淵つとむらが増補したという『実字流理土性弁』には、<sup>(18)</sup>

①合玉石は俗に金剛砂といい、玉石類を磨く砂である。

②稜角みしかどがあつて極めて硬く、黄赤色・赭黒色などのものがある。

③大きいものは玉器・硝子に彫画（彫りものの絵）を行うに適しているので、ギヤマン石と呼ぶ。

④河内の金剛山、和州の伊駒山、丹波・丹後・伊予・土佐などから産する。讃岐の香川郡には五、六分（一・五―一・八糶）以上のものがある。

と述べられている。①の用途、②の性質、④の産地よりこの石（砂）が柘榴石であることは多言を要さぬことであろう。

またその大きいものが玉器・硝子に面を彫り込むのに適していたこと、そのためギヤマン石と呼ばれたことが明らかにされている点は注目に価する。

宝暦十三年（一七六三）に著された青木敦書あつがみ（昆陽）の「昆陽漫録」の「石罫」の条には、<sup>(19)</sup>

①羽州・佐州（出羽・佐渡）の海辺にある矢根石は硝子・伊万里の茶碗を彫むことができるから、デヤマンの類と思われる。

②デヤマンをギヤマンと称しているのは誤りである。

と述べられている。ところで矢の根石、即ち石鏃は通常黒燐石 Obsidian・燧石 Flint・チャート Chert などで作られて

いる。このうち黒燐石はアルカリ・アルミナ・珪酸を主成分とする天然ガラスで、硬度も五―五・五と低く、ガラスを刻<sup>(20)</sup>

むのには適していないが、燧石およびチャートはそれぞれ珪酸を主成分とする鉱物および岩石で、硬度は七に近くガラス

を刻むことができる。因に『理斎隨筆』〔文政六年（一八二五）序〕には火打石（燧石）の角でガラスを摺り切ることが記

されている。<sup>(21)</sup> なお伊万里の茶碗はいうまでもなく磁器であり、昆陽は恐らく『和漢三才図会』の「ギヤマンの玉」につい

ての記述②を参考として上記のように考えたのであろう。

平賀国倫(源内)は「物類品隲」〔宝暦十三年(一七六三)刊〕において「金剛石」につき先ず「翻訳名義集」に拠ってその原語を明らかにし、「抱朴子」「玄中記」(第三表参照)などを引いてダイヤモンドに金剛石を当て、更に「華夷通商考」を引いて当時渡るダイヤモンドが紫赤色であったが今では白色が多いことを指摘した上で、宝暦十三年(一七六三)に行われた薬品会に田村元雄(藍水)が出陳したという蚕産のダイヤモンドに関連して以下のように述べている。

①二分(六耗、約〇・九カラット相当)<sup>(23)</sup>程の大ききで指輪に着いている。

②質は水晶・白石英のようである。

③明るく、透きとおっている。

④遠近左右の物すべてが映る。

⑤偽造品が多い。

⑥鉄錐で打って傷つかないもの、赤熱後酸に浸して酥碎そさいしないものが真物である。

⑦価が数十金乃至百金(百両)もするので真偽を試み難い。

この時薬品会に出されたというダイヤモンドを藍水が直接・間接かはともかくオランダ人からダイヤモンド(ダイヤモンド)として入手したのだとすれば、偽られた場合は別として価格の点からも、それがダイヤモンドであったであろうことは略間違いないであろう。本来の語義の上からはダイヤモンドを意味する筈であった金剛石という語に相当する物が、わが国に存在していなかった場合と、それに相当するものが眼前に現れた場合とは、自ずから考え方に変化が生ずるのは当然であり、源内はダイヤモンドと称されたその石(ダイヤモンド)に恐らく躊躇することなく、良安・不昧軒・石亭等によって柘

石名	英石名	硬度	屈折率	E.S.Dana: op.cit.
水晶	Quartz	7	$\omega=1.54\sim1.55$ , $\epsilon=1.55\sim1.56$	p.186
金剛石	Diamond	10	$n=2.41\sim2.43$	p.4
鋼玉	Corundum	9	$\omega=1.77$ , $\epsilon=1.76$	pp.211f
尖晶石	Spinel	8	$n=1.71\sim1.73$	p.221
緑柱石	Beryl	7.5-8	$\omega=1.58\sim1.59$ , $\epsilon=1.57\sim1.58$	p.406
フェナサイト	Phenacite	7.5-8	$\omega=1.65\sim1.66$ , $\epsilon=1.67$	p.463
ジルコン	Zircon	7.5	$\omega=1.92\sim1.93$ , $\epsilon=1.97\sim1.99$	p.484
ダンブリ石	Danburite	7-7.25	$\alpha=1.63\sim1.64$ , $\beta=1.63\sim1.64$ , $\gamma=1.63\sim1.64$	p.491
黄玉	Topaz	8	$\alpha=1.61\sim1.63$ , $\beta=1.61\sim1.63$ , $\gamma=1.62\sim1.64$	p.494
紅柱石	Andalusite	7.5	$\alpha=1.63$ , $\beta=1.64$ , $\gamma=1.64$	pp.496f
ユークレーズ	Euclase	7.5	$\alpha=1.65$ , $\beta=1.66$ , $\gamma=1.67$	pp.508f
電気石	Tourmaline	7-7.5	$\omega=1.64\sim1.69$ , $\epsilon=1.62\sim1.64$	p.553
ハンパーナイト	Hamburgite	7.5	$\alpha=1.55\sim1.57$ , $\beta=1.59$ , $\gamma=1.63$	p.878

第五表 無色透明で硬度7.25以上の宝石用鉱物の硬度・屈折率一覧。水晶は他と比較のため加えた。なお屈折率は反射能と関係し、ひいては光沢に關係するので記入しておいた。屈折率は光学的等方体の鉱物についてはn, 光学的異方体のうち一軸性の鉱物については $\omega, \epsilon$ , 二軸性の鉱物については $\alpha, \beta, \gamma$ で表した。但し屈折率は測定者・産地・色・測定光により異なるので概数で示した。光学的異方体の屈折率の表し方については物理学・鉱物学などの専門書を参照されたい。

榴石に当てられていた金剛石という語を当てたものと思われる。

後藤梨春は『紅毛談』（昭和二年（一七六五）刊）において「ギヤマン」について、<sup>26)</sup>

①水晶に似て甚だかたい。

②水晶の印章、びいどろの器物に画模様を彫ることができぬ。

③人乳に一夜つけておくと少し軟かくなる。

④六角・八角・兜巾とぎんがしらに磨き指輪に嵌め、これを蛮人は常に携行する。

⑤山川の景色、人目の及ばぬ処を映しだす。

と述べている。梨春は藍水に師事していたから源内同様にダイヤモンドをみていたと推測され、①②④のようにダイヤモンドの特徴・用途と一致する叙述をしている。しかしながらダイヤモンド以外にも、こうした条件を満たす石が多少あり、例えば第五表に示すものがこれに該当する。<sup>27)</sup> さて第五表の石のうち水晶は別とし

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

て、少なくとも黄玉だけは江戸時代にも我が国で産出し、人々の目に触れる可能性があったと思われる。即ち当時近江国田上から良質の黄玉が産出していたことは、石山寺に所蔵される尊賢僧正（文政十二年（一八二九）入寂）の奇石コレクションの中にそれが見出されることによっても明らかであろう（第二図参照）。なお益富寿之助氏は同コレクションの黄玉を『雲根志』の「頗黎」に相当するものとしておられる。<sup>(29)</sup> 因に『雲根志』によれば「頗黎」は「放光石」<sup>(30)</sup> と共に近江国田上で「水晶の花」と呼ばれていたことが知られる。したがって石亭および田上近在の人々にとっては黄玉がギヤマンと結びつけられて考えられることはなかったようである。しかしながら当時は黄玉をギヤマンと考える人々が現れても決して不

思議でない状態にあったことも事実であろう。

石亭は「金剛石」の条下では既述のように柘榴石に相当する石についてだけ述べ、ギヤマンのことには触れておらず、逆に「ギヤマン」の条下では金剛石のことに言及していない。石亭は『湖上右語雲根志』前編（安永二年（一七七三））において、ギヤマンにつき以下のように述べている。<sup>(32)</sup>

- ① 外国の物でわが国には産しない。
- ② 石・鉄・焼物などは泥ででもあるかのようにギヤマンで彫ることができる。

③ 是までギヤマンと称するものを数百みたが、まだ真物をみたことがない。明和三年（一七六六）の会にも出品された

が、真物か偽物かわからない。

④オランダの八方目鏡は指輪につけて後方を写す鏡で、これとギヤマンとを混同している者がいるが、両者は別物だとする説もある。

⑤ギヤマンは石の名ではなく、鉄・石・焼物などに細く彫るのをギヤマン彫りというとの説がある。この説が正しいのか、硬い物を彫り得る石をギヤマンというのか明らかでない。

要するに石亭もまた当時の物産家諸氏同様ギヤマンを石・鉄・焼物などを彫刻し得る硬さをもった石として特徴づけていたように思われる。しかしながら真のギヤマン、即ちダイヤモンドについての知見に欠けていたためか、数百のギヤマンを前にして、常に真偽の判定に苦しんだように見受けられる。但しギヤマンと金剛石とはあくまで別物として扱っていたようである。もし、石亭が石について単に文献的な探究に終止していたならば、この二者に共通な玉石・磁器をも刻みうる硬さをもつという特徴だけから、二者を同物と考えたかも知れぬが、石亭にとって「金剛石」という名に対応する石としては既に色・形・産状なども含めて柘榴石に相当するものが念頭にあったわけで、風説に聞くギヤマン、また好事家・物産家が所蔵する柘榴石とは異質であったと思われる種々のギヤマンをも金剛石と同物とは到底考えられなかったであろう。ところでここで注意すべきは⑤に述べられている「ギヤマンほり」である。ここでは「ギヤマンほり」という語が鉄・石・焼物に関して用いられているが、勿論ガラスに関して用いられても一向差えないであろう。というより多くの文献においては「キヤマンほり」という語が主としてガラスに関して用いられていたように見受けられる。

江戸時代の代表的辞書の一つである『倭訓栞』の編者、谷川士清〔安永五年（一七七六）歿〕は石亭とも交際のあった人で、「ぎやまん」についての記述には『雲根志』の記載と重複する箇所がみられる。

①近世に渡来した寶石の名である。

②水晶に似て甚だ堅く、玉石・金鉄をたやすく切ることができる〔紅毛談〕。

③色は紫赤であるが、近世オランダからくるものは一般に白い〔華夷通商考〕「物類品隲」。

④金剛石・削玉石・でやまんともいう。

⑤硬い金・玉・陶器に細かい彫刻があるものをぎやまん彫りといい、これは物の名で石の名ではないとの説もある〔雲根志〕。

⑥オランダ人の説では人乳に一夜つけて柔らかくし、六角・八角・兜巾頭とんかかしらに磨き親指にはめて後方を見る鏡にする物であるという〔紅毛談〕「雲根志」。

⑦「本草綱目」の「婆々石」〔婆娑石〕―棚橋訂〕の条よりの引用（略）。

⑧山川の風景、人目のおよばぬ処を写しだすという〔紅毛談〕。

士清は④にみられるようにぎやまんと金剛石とを同物と考え、またダイヤモンドとしての性質をかなりよく記録しているが、これらの知識だけからは「紅毛談」の場合と同じくダイヤモンドを類似の石から識別することはできないであろう。なお婆娑石が現在のどの石に相当する名称であるのかは明らかでなく、また「本草綱目」について該当する条下を調べてもダイヤモンドと一致するような性質は記されていない。<sup>84</sup>

大槻茂質しげたか（玄沢）は「蘭説弁惑」〔天明八年（一七八八）序〕においてぎやまんについて、<sup>85</sup>

①「ぎやまん」は「ぢあまんと」である。

②ガラス類を彫るのにこの石を用いる。

③透明で曇りのない石である。

と述べている。ここでこの石の性質としてとりあげることのできることは、ガラスより硬い、透明であるの二点で、『紅毛談』の場合と同様、この二つの条件を満足する石はかなりあり、玄沢はダイヤモンドの性質を記しているつもりであろうが、読者にとっては特定の石の性質を記したことにはなっていない。

小野職博(蘭山)が、金剛シャウは金剛石・金剛砂とは別物で、合玉石即ち柘榴石と同じ物であると考えていたことについては既に述べた。一方金剛石について蘭山は同じく『本草綱目啓蒙』において以下のように記している。<sup>86)</sup>

①金剛石はデヤマン・ギヤマンデ、誤ってギヤマン石という。

②蛮人が将来し、指輪の飾としている。

③形状は水晶のようで、透明である。

④硝子で偽造したものが多い。すかして気泡が見えるものは偽品である。

⑤真物は玉を泥でもあるかのように切ることができる。

以上の諸点より蘭山が金剛石をギヤマンと同物と考えていたことは明らかであるが、ダイヤモンドとしてのギヤマンについての記述はやはり当を得たものとはいえないようである。

『厚生新編』は文化八年(一八一二)以降少なくとも三十有余年に亘って馬場貞由・大槻茂質(玄沢)等によって行われた「ショメル」の辞書」の抄訳である。その第三十五巻の内「寶石」の条〔文政四十年(一八二二—一八二七)成〕には、<sup>87)</sup>

①チアマントは俗にキアマントといい、金剛石のことである。

②ロベインは紅色の金剛石のことである。

音 訳 名	蘭 名	和 名 ・ 他
チアマン	Diamant	金剛石・ダイヤモンド
ロベイン	Robijn	紅玉・ルビー（鋼玉の一種）
サヒール	Saphir	青玉・サファイヤ（鋼玉の一種）
トパーズ	Topaas	黄玉・トパーズ
エメラウト	Emeraud	翠玉・エメラルド（緑柱石の一種）
ケレイソリト	Chrijsolit	橄欖石（黄色）・オリヴィン〔クリソライト〕
アメチスト	Amethyst	紫水晶・アメシスト
ヘイアシント	Hijacinth	風信子鉞・ヒアシンス（ジルコンの一種）
ペンドット	Pendot	橄欖石（緑色）・オリヴィン〔ペリドット〕
ガラナート	Granaat	柘榴石・ガーネット
ベリルリユス	Berillus	緑柱石・ベリル〔アクワマリン〕

第六表 「厚生新編」所載の「寶石」中、キリストルレン（水晶）の類として挙げられた石名（音訳）。蘭名は M. N. Chomel の辞書による。（註37）

③ チアマン・ト・ロベイン・サヒール・トパーズ・エメラウト・ケレイソリト・アメチスト・ヘイアシント・ペンドット・ガラナート（柘榴石）・ベリルリユスの十（一）品はすべてキリストルレン（水晶・石英類）の一種である。

④ 坩堝中で強熱すればチアマンは十二時（二十四時間）の中に消散するが、ロベインは少しも変化しない。

と述べられている。当時の蘭学者は④の相違が本質的なものであるにも拘らず、ロベイン（ルビー）とダイヤモンドを同種のものとして推定している。これはキリストルレンを結晶と訳さず、水晶・石英と訳したことから③の諸石（第六表参照）すべてが同種と考えられたためにおこった誤謬であった。しかしもとをただせば、このような宝石類についての知識の欠如によるものであった。そして更にはシヨメルの辞書が編纂された十八世紀後半頃の西欧において、未だ宝石を科学的に識別する方法が発達しておらず、また宝石の性質を科学的に正確に記載する方法が確立されていなかったことに起因するものであった。

宇田川榕（榕庵）の『舎密開宗』（天保八年（一八三七）刊）の「炭素」の条には炭素およびチアマンについて以下のように述べられている。<sup>38)</sup>

① 植物を焼いて得た炭は炭素である。

② 鑽石はダイヤモンドである。

③ 鑽石は純粋な炭素である。

④ 鑽石についてはこれを酸素ガスで容易に焼いて試みる法がある。

『含密開宗』は江戸時代の代表的化学書であり、したがってダイヤモンドの化学的性質については正しく表現されているものの、ダイヤモンドが植物を焼いて得られる炭と同類であるなどと述べられていても、これは当時の常識と恐らく相いれず、一方物理的性質については何ら触れられていないので、この程度の叙述では当時の人々が、ダイヤモンドがどのような石であるかを推測する手掛りになり得なかったのではないかと思われる。

『本草綱目釈義』において山本世孺（亡羊）も金剛砂（コンゴウセウ）を金剛石と別物としていたことについては既に触れたが、以下にギヤマンに関する亡羊の所説を記しておく。<sup>(39)</sup>

① 金剛石はギヤマン石といい、外国語ではデヤマン・ギヤマンデなどという。ギヤマン石はこれより転じた語である。

② 和産はない。オランダ人が将来したものであり、非常に大切にし指輪などの飾りにしている。

③ 白いものは水晶のようで、水晶よりも光沢がある。

④ オランダ人はガラスで偽物を作るが、これには気泡がある。

⑤ 真物はその角で玉なども切ることができる。

⑥ オランダ人がフラスコに毛彫をする際はこのギヤマン石で行う。そのためこのフラスコをギヤマンという。ギヤマン石で彫ったという理由からである。

即ち亡羊は金剛石とデヤマンを同物とし、⑥にいうギヤマンと区別するため特にこれをギヤマン石と称している。また③にはデヤマンの特徴として水晶より光沢があることを挙げており、これはダイヤモンドの性質として首肯できる事柄である。なお⑧はギヤマン石で毛彫りを施したフラスコ、即ちギヤマンほりのあるフラスコをギヤマンというようになったとする説で、『雲根志』の⑤、『倭訓栞』の⑤の表現を更に明確にしたものといえよう。但しこのフラスコの毛彫りがダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングによるものであったのか、グラヴィールによるものであったのかは疑問の残るところであり、遺品の多少より推してむしろ後者の可能性の方が大きいと思われる。

さて以上述べた諸説を含め、ギヤマンに対する諸石の関係を第七表に纏めておく。なおこれを要約すると凡そ次のようになるであろう。慶長頃ギヤマンはデヤマンテと音訳されて、至硬の石であることが示されるにとどまっていた。元禄・宝永から正徳頃、ギヤマンは時として金剛石の類と考えられ、その金剛石は石榴石に代表される硬くて研磨・穿孔などに使用され得る石と考えられていた。それが宝曆以降、蘭学者およびその周辺の者によってギヤマンの性質として硬いこと以外に水晶のように透明で、それ以上に光沢があることが大きく取り上げられるようになった。その後、享和から文化に至って漸くこの条件に適さぬ石榴石（金剛しやう・合玉石）をギヤマンの和語としての金剛石（砂）と区別し、両者は別物と考える人々が現れた。

ところでこのようにギヤマンについての性格がかなり限定され、明らかになってきたにも拘らず、一般の人々のギヤマンについての認識は低かったようで、この語に対応する石を具体的に考える段になると、ギヤマンは当時の人々の思考を是るかを超えた存在でしかなかったと思われる。それは例えば現在においても、もし我々がダイヤモンドをみたことがないならば、硬く、透明で水晶より光沢のある石といわれても、多くの人々はどのような具体的な石をもほとんど思い画く

ことができなものと軌を一にするものといえよう。

第七表 諸書にみられるギヤマン・金剛石等の関係一覧。

出典	成・刊・著者歿年	諸石名の関係	註
『きやとへかとの』	慶長四年刊	ちやまんて	
『羅西日辞典』	一六三二年刊	Adamas, nris, diamante, aru tama mono	
『増補華夷通商考』	宝永五年刊	ギヤマンテ  デヤマン  金剛石  菩薩石の類	
『和漢三才図会』	正徳二年序	伽曼 <sup>キヤマン</sup> 玉  金剛石の類(「  柘榴石カ」)	
『実学究理土性弁』	享保九年序	ギヤマン石  合玉石  那玉砂  金剛砂(「  柘榴石」)	
『昆陽漫録』	宝暦十三年成	デヤマン  ギヤマン  矢根石(「  黒耀石・燧石・チャート」)	
『物類品隲』	宝暦十三年刊	デヤマン  金剛石(「  ダイヤモンド」)	
『紅毛談』	明和二年刊	ぎやまん(「  ダイヤモンドカ」)	
『雲根志』前編	安永二年刊	ギヤマン  かたき物をほるの石カ(「  不定」)	
『倭訓栞』後編	安永五年歿	ぎやまん  でやまん  金剛石  削玉石(「  ダイヤモンドカ」)	
『本草正譌』	安永五年刊	ギヤマン  金剛石  金剛鑽(「  ダイヤモンドカ」)	
『蘭説弁惑』	天明八年序	ぎやまん  ちあまんと(「  ダイヤモンドカ」)	
『本草綱目啓蒙』	享和三年	デヤマン  ギヤマンデ  ギヤマンセキ  金剛石(「  ダイヤモンドカ」)	
『蘭語訳撰』	文化七年刊	Diamant <sup>キヤマン</sup>   金剛石(「  ダイヤモンド」)	
『厚生新編』	文化四年	テアマント  キアマント  金剛石(「  ダイヤモンド」)	
同	文政七年刊	ロペイン  金剛石の紅なる者(「  ルビー」)	
『和蘭字彙』	同	Diamant <sup>キヤマン</sup>   「ギヤマン」石(「  ダイヤモンド」)	
『含密開宗』	天保四年成	鐵石(「  ダイヤモンド」)	(41)
『本草綱目釈義』	天保八年刊	ギヤマン石  デヤマン  ギヤマン  金剛石(「  ダイヤモンドカ」)	
『含密局心携』	安政六年歿	金剛石(「  ダイヤモンド」)	
	文久二年刊		(42)

- (1) ツンベルグ「ツンベルグ日本紀行」山田珠樹訳註〔異国叢書〕雄松堂書店、昭和四十一年、改訂復刻版)、二七九頁、外来語の条。
- (2) 大槻文彦「言海」(吉川半七、明治二十九年、第十版)、六八四頁。「デアマン」の項。  
落合直文「ことばの泉」きよりしまて(大倉書店、明治三十一年)、四三二頁。大阪府立中之島図書館朝日新聞文庫蔵〔書目276-2〕。  
金沢庄三郎「辞林」(三省堂書店、明治四十四年、四版)、三七〇頁。国立国会図書館蔵〔31-319-4〕。  
上田万年・松井慎治「大日本国語辞典」第一卷(富山房・金港堂書籍、大正四年)、一一六頁。神戸市立中央図書館蔵〔813-61〕。  
新村出「辞苑」(博文館、昭和十年)、四八五頁。国立国会図書館蔵〔617-264〕。
- (3) 「日本社会事彙」上卷(経済雑誌社、明治三十四年、再版)、八五六頁。大阪府立中之島図書館蔵〔021-110〕。この説は同書、初版(明治二十三年)には未だみられない。
- (4) 前田太郎「外来語の研究」(岩波書店、大正十一年)、一三四頁。
- (5) 新村出「日本辞書の現実と理想」〔新村出全集〕第二卷、浜田敦編、筑摩書房、昭和四十七年)、二九六頁。
- (6) 新村出「外来語の本源と経路」〔前掲「新村出全集」第三卷、阪倉篤義編、昭和四十七年)、一九五頁。
- (7) 新村出「外来語の話」〔前掲「新村出全集」第三卷)、一〇九頁。
- (8) 日本大辞典刊行会「日本国語大辞典」第六卷(小学館、昭和四十八年)、七一頁。
- (9) 天理図書館編「ぎやどべかどる」上巻、きりしたん版集成3、影印版(天理大学出版部、昭和五十一年)、十九ウ。以下原文。  
如何程かたき物なれ共それくの道ありて和らはずといふ事なし金銀銅鉄の類ひハ火を以て和らげちやまんとといふ玉に勝りてかたき物なしといへども或獣の血を以て和らげて磨く者なり
- (10) コリヤード「羅西日辞典」影印版、大塚光信解題・索引(臨川書店、昭和四十一年)、一六八頁。
- (11) ヴァリニアノ「日本巡察記」松田毅一・他、東洋文庫、二二九(平凡社、昭和四十八年)、二五頁。
- (12) 「一五八五年八月二十日」〔割註〕天正十三年七月二十五日」付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスより耶蘇会総長に送りたるもの」〔耶蘇会の日本年報〕第二輯、村上直次郎訳、拓文堂、昭和十九年)、九頁。

- (13) 西川正休「増補華夷通商考」巻之四（滝本誠一「日本経済大典」第四巻、明治文献、昭和四十一年）、三四三頁。以下原文。  
 ギヤマント「以下割註」デヤマントモ云、其色紫赤多シ、鉄植ニテ打テモ碎ケズ、金剛石、菩薩石ノ類ナリト云
- (14) E. S. Dana: The System of Mineralogy of James Dwight Dana, 6th Ed., John Wiley & Sons, Inc., 1920, p. 4.
- (15) 李時珍「新註校定国訳本草綱目」木村康一新註校定代表、第三冊（春陽堂書店、昭和四十九年、新註増補版）、二九三―二九四頁。  
 寺島良安「和漢三才図会」版本、正徳二年序、巻第六十一、二十七ウ。びいどろ史料庫蔵。以下原文。  
 一「種有<sup>ニ</sup>伽<sup>ハ</sup>曼<sup>ハ</sup>玉<sup>ハ</sup>正<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>詳<sup>キ</sup>黒<sup>シ</sup>色<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>形<sup>似</sup>石<sup>ニ</sup>而<sup>有</sup>稜<sup>甚</sup>堅<sup>剛</sup>用<sup>之</sup>彫<sup>ニ</sup>鑿<sup>ニ</sup>玉<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>磁<sup>器</sup>皆<sup>如</sup>泥<sup>任</sup>意<sup>自</sup>阿<sup>蘭</sup>陀<sup>一</sup>來<sup>疑</sup>彼<sup>國</sup>金<sup>剛</sup>石<sup>ノ</sup>之<sup>類</sup>矣
- (16) E. S. Dana: op. cit., p. 4 and p. 212.
- (17) 佐藤信景（不昧軒）「素学究理土性弁」佐藤信淵増補、織田完之撰、版本、紀元二千五百三十四年（明治七年）刊、巻五、十七オ。大阪府立中之島図書館蔵〔836-2〕。以下原文。
- (18) 合玉砂一名那玉砂俗ニ金剛砂ト云フ玉石類ヲ磨砺スル沙ナリ稜角アリテ極テ堅硬ナル沙ナリ黄赤色ト赭黒色ナルモ有テ大ナル者ニテ玉器及ヒ硝子等ヲ彫画スルニ宜キヲ以テ或ハ「ギヤマン」石ト呼ブ今河内ノ金剛山及和州伊駒山丹波丹後伊予土佐其他諸国ヨリ出ツ讚岐ノ香川郡ニハ頗ル大塊ニシテ五六分以上ナル者ヲ生ヌ
- (19) 青木政書（昆陽）「昆陽漫録」巻之二（日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』第十回、吉川弘文館、昭和三年）、四八四頁。以下原文。
- 羽州佐州ノ海浜ニテ拾ヒ得ル矢根石ニテ、硝子オヨビ今里茶碗彫ムレバ、阿蘭陀ノデヤマンノ類トミユ。イマノ人、ギヤマント云ハ誤ナリ。
- (20) ヘルマン・バンク「宝石の世界」川田功訳（日貿出版社、一九七四年）、一八〇―一八一頁。
- (21) 志賀忍（理斎）「理斎随筆」巻之一（日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』第三期第一巻、日本随筆大成刊行会、昭和四年）、二一九頁。
- (22) 平賀国倫（源内）「物類品鑑」巻之二（入田整三『平賀源内全集』上巻、荻原星文館、昭和十年）、三五―三六頁。以下原文。

○蜜産デヤマン壬午主品中田村先生具之、ソノ大サニ分許是ヲ指<sup>さ</sup>、強<sup>まさ</sup>ニ着ク其質水精白石、英ノゴドシ至テ明<sup>あ</sup>徹ナリ照<sup>あ</sup>レ、  
之<sup>ま</sup>遠<sup>ま</sup>近左<sup>ま</sup>右悉クウツル然ドモ近世偽造スル物多シ試<sup>し</sup>之<sup>し</sup>法鉄<sup>てつ</sup>椎ヲ以テ撃テ傷ザルヲ真トシ或ハ焼<sup>や</sup>赤シ醋<sup>す</sup>中ニ淬シテ如<sup>ごと</sup>  
故<sup>ごと</sup>、碎<sup>くだ</sup>セザル等ノ法アリトイヘドモ此物世人甚<sup>た</sup>珍トス其<sup>その</sup>価数<sup>か</sup>十<sup>じゆ</sup>金ヨリ百<sup>ひやく</sup>金ニ至ル故ニ容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>ニ試ガタシ

②久米武夫「新寶石辞典」(風聞書房、昭和三十九年)、附録五〇頁所載の「ダイヤモンド及真珠目方早見表(石の直径寸法による)」に  
拠る。

④桂川国瑞(甫周)「北樺聞略」寛政六年成、亀井高孝編(三秀舎、昭和十二年)、二九四頁にはロシアの状況について、

ピリヤン 金剛石なり。此物はなはた得難きものなるよしにて、彼邦もつとも貴重し、国玉の冠、ヨルデ、<sup>〔割註〕</sup>服色の部に詳  
なり<sup>なり</sup>」戒指等、皆これをもつて飾る。……(中略)……麦粒計の大きなもの其価銀千枚におよふとそ。

と記されている。「物類品彙」の場合と直接比較はし難いが、価を考える上で参考にはなるであらう。

⑤後藤梨春「紅毛談」巻之下(早川純三郎「文明源流叢書」第一、国書刊行会、大正二年)、四四七頁。以下原文。

○ぎやまん、此石水晶に似て甚かたく、水晶の印章、びいどろ器物等に画様を彫るに、此石ならでは彫ことあたはず、此石甚堅し  
といへども、人乳に一夜つけおくときは、少しやわらかになるとき、六角あるひは八角に、兜巾がしらに磨、指くわんにきりは  
め、蕃人常に旅行にもちあるく、此石山川の風景、人目のおよばざる処を、うつす妙ありといへり、

⑥日本歴史大辞典編集委員会「日本歴史大辞典」第四巻(河出書房新社、昭和五十年、増補改訂版第十一刷)、五八四頁。

⑦水晶の硬度が七であり、この水晶に彫刻することから硬度七・二五以上の石を選んだ。梨春の記述はこれらの石からダイヤモンドを区別し得る程充分なものとはいえないであらう。

⑧黄玉は尊賢古石コレクション七組の内、「栖霞」と銘のある五段一組の上より二段目左下角の枠内と、五段目(最下段)の中央とに  
整理されている。但し後者は淡青・淡紅を帯びる。

浅山哲二・益富寿之助「石山寺尊賢古石コレクション」の雲根志的並に科学的調査予報(江戸時代弄石の研究、其三)、稿本、昭和四  
十二年成、益富寿之助氏蔵。図版一九、図版二〇。

⑨浅山哲二・益富寿之助、前掲書、四三頁(E-II-20)、五一頁(E-V-5)。

80) 木内重暎(石亭)「雲根志」後編、版本、安永九年刊、卷之一、十一ウ―十二オ。十九「頰黎」。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-107〕。

81) 木内重暎(石亭)、前掲書、後編、卷之一、二十一オ―二十一ウ。三十六「放光石」。

82) 木内重暎(石亭)「潮上石話雲根志」前編、版本、安永二年刊、卷之二、二十六ウ―二十七オ。六十七「キヤマン」。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-107〕。以下原文。

産物なり和産共に産所をきかず伝云キヤマンを持って石鉄焼物等に彫物をするに泥のごとくやハラかなりと是までキヤマンといふ物數百見たりいまだ真物を見ず明和三年戊五月十八日会に出たり予真偽をしらず或人云阿蘭陀に八方目鏡といふものありゆびがねに付て我うしろをうつす鏡なり是と取違へ覺たる人有別のもの也と又或説にキヤマンハ石の名にあらずかたき鉄石やき物等にはそきことをほりたるをキヤマンほりといふと此説尤ならんかかたき物をほるの石あらばすなハちキヤマンならんか

83) 谷川士清「倭訓栞後編」影印版(すみや書房、昭和四十四年)、三〇一頁(卷之六、七オ)。以下原文。

近世渡り来の寶石の名也水品に似て甚堅く玉石金鉄をきるに至妙也といへり色紫赤阿蘭陀より持来る近世の物ハ多く白金剛石一名割玉石なるもの是也といへり又でやまんともいへり一説に至堅の金玉陶器に細密の彫刻あるをぎやまんほりといふなり物の名にして石にあらずといへり一説に阿蘭陀人の説に人乳に一夜つけ置ば少し柔らかなるを六角又八角或ハ兜「巾頭に磨て大指ノ頭に指て後へを看るの鏡にする物也といへり……(中略)……又此石山川の風景眼の及ばざる所を写すの妙ありともいへり

84) 李時珍「校正本草綱目」貝原益軒校訂、版本、寛文十二年刊、第十卷、三十ウ―三十一オ。

85) 大槻茂質(玄沢)「蘭説弁惑」卷之上(大槻茂雄「磐水存響」乾卷、大槻茂雄刊、大正元年度、三四頁。以下原文。

「ぎやまん」は「ちあまんと」なり硝子類を彫鑿するなど此石を用ゆ一体玲瓏たる玉石なり別に訳説あり摘考の中に出す

86) 杉本つとむ『小野蘭山本草綱目啓蒙―木文・研究・索引―』影印版(早稲田大学出版部、昭和四十九年)、七三頁(卷之六、十四オ)。以下原文。

金剛石 デヤマン 聚名 キヤマンデ同上

……(中略)……

蛮人持来ル指環ユシロウチノ飾トス俗ニ誤テギヤマンセキト云状チ水晶ノ如クニシテ明徹ナリ硝子ニテ偽ルモノ多シ故ニスカシ見ルニ内ニ氣眼ツクアルモノハ真ニアラズ真ナルモノハ玉ヲ切ルニ泥ノ如シト云

37) ショメル「厚生新編」馬場貞由・大槻茂質(玄沢)・他、影印版、2(恒和出版、昭和五十三年)、六八五頁。六八八頁。「寶石」の条のみられる第三十五巻には上呈の年が記されていないが、第二十四巻が文政四年、第三十七巻が文政十年の上呈故この間の成立といえよう。以下原文。

「ワール・エイデルゲステーンテ」正真寶石と稱する者は「チアマント」金剛石なり俗呼「キアマント」なり「ロベイン」金剛石の紅なる者「サヒール・トパス・エメラウト・ケレイソリト・アメチスト・ヘイアシント・ベンドツト・ガラナート」石榴子・俗呼石榴子「ペリルリュス」右の諸品共に十品皆「キリストテルレン・水精石英庶類の一種にして土中より発掘し或は地上に散在し或は河川中に有りて其石の外面自然の琢磨にて清潔瑩徹を成して現れ出るもの是なり

……(中略)……

「チアマント」の類「ロベイチン・其他」エイデルゲステーチ・を先ッ甘鍋ツツに入れて蓋を掩ひ烈火に上せ種々に試ミたりしに「チアマント」は十二時の中に尽く消散せり「ロベイン」ハ少しも変化することなかりきと「チアマント」は始めに先ッ其光沢を失へり  
M. Noel Chomel: Algemeen Huishoudelijk, Natuur, Zedekundig, en Konst- Woordenboek, Tweede Druk geheel verbeterd, en meer als de helfte vermeerderd door J. A. de Chalmot, enz., Leyden en Leeuwarden, 1778, 2de Deel, blad. 581. 国立国会図書館蔵〔蘭・66〕。以下右の原文。

De waare Edele-gesteentens zijn: De *Diamant*, de *Robijn*, de *Saphir*, de *Topaas*, de *Emeraud*, de *Chrysolit*, de *Ametnist*, de *Hijacinth*, de *Pendat*, de *Graanaat*, de *Berillus*; alle deeze streenen zijn soorten van *Cristallen*, welke in de aarde verschoolen leggen, of wel los geraaken en door de rivieren van de *matrix* of moedersteenen gezuivert te voorschijn koomen.

……(中略)……

De voormaals regeerende Keizer FRANCISCUS DE I. heeft te Weenen tot het voortzetten deezzer wetenschap, verscheidene proeven laten doen met *Diamanten*, *Robijnen*, en andere *Edele Gesteentens* in Kroezen, die wel geslooten waren, in hevig vuur te zetten; men bevond na 24 uren, dat de *Diamant* geheel verfloogen, en de *Robijn* onverandert was; de *Diamant* verloor eerst zijn glans, bladderde en verfloog;

(38) 田中美「宇田川榕庵舎密開宗——復刻と現代語訳・注——」影印版（講談社、昭和五十年）、七〇—七二頁（卷三、十三—一十三ウ）。以下原文。

植物ヲ焼タル黒炭。即炭素ナリト雖モ亦雜物ト十分、亜爾加、里、硫酸、磷酸、水素、鉄、滿他等無キ事ヲ得ズ此雜物、炭ノ燒後ニ、殘テ乃チ灰ヲ  
為ス

○按ニ広義ニ贛致・模爾歇<sup>ゴイシ</sup>云鑽石五車韻府ニ出、海島逸註ニ所謂鑽石、即金剛鑽ハ純粹ノ炭素ナリ

……（中略）……

鑽石モ酸素瓦斯ヲ以テ容易ク熱ス試法アリ

(39) 「古事類苑」50「植物部二・金石部」（吉川弘文館、昭和四十六年）、金石部、三三三頁。以下原文。

ギヤマンセキト云、番名ヲデヤマントモ、ギヤマンデトモ云、コノ転ナリ、和産ナシ、紅毛人來ドモ、甚太切ニスルモノナリ、指ガ子ノ飾ナドニシテアリ、白キハ水精ノ如クシテ、水精ヨリハ光リアリ、又紅毛人硝子ニテ偽ルアリ、コレハスカシテ見レバ氣眼アリ、真物ハワリタル角ニテ、玉ナドモ切レルモノナリ、紅毛人フラスコニ毛ボリヲスルハ、コノギヤマンセキニテスルナリ、故ニコノフラスコヲ、ギヤマント云、ギヤマン石ニテ、ホリタルト云心也、

山本世孺（亡羊）『本草綱目釈義』については前節の註(36)参照。

(40) 奥平昌高「蘭語訳撰」鈴木博解題・索引、影印版（臨川書店、昭和四十三年）、四五二頁（五ノ十三オ）。

(41) F. Halma「和蘭字彙」Henrik Doeff 訳・桂川甫周・他校、杉本つとむ解説、影印版、第一分冊（早稲田大学出版部、昭和四十九年）、五三九頁（D十六オ）。

(42) 上野彦馬「舎密局必携」大森実・小沢健志解説、影印版（産業能率短期大学出版部、昭和五十一年）、前篇、卷一、二十四ウ。

#### 四 ギヤマン彫り

—— グラヴィール・切子との関係 ——

ギヤマンが極めて堅硬な石であり、その程度を示す事柄として鉄鎚で叩いて砕けぬこと（『増補華夷通商考』「物類品隨」）、赤熱後酸に浸して酥砕せぬこと（『物類品隨』の他、玉石・磁器を泥ででもあるかのように彫り鑿つことのできる」と『和漢三才図会』「雲根志」）が指摘されている。しかし、これらの特性は恐らく西欧の知識に基いて記されたものでなく、ギヤマンが金剛石（金剛しよう・柘榴石）に当てられたことから、『本草綱目』所載の金剛石の性質（第三表参照）の一部がそのままギヤマンの特性として記されたものと思われる。従ってギヤマンによる彫刻といっても、主に柘榴石による彫刻ということになるであろう。一方、十八世紀頃の西欧においてもガラスの研磨・彫刻（線彫りを除く）・穿孔などにダイヤモンドが使用されていたとは考え難く、ポイスの書にみられるように粗砂 *Grof Zand*・細末砂 *fiijnder soort van Zand*・「ブランドヘルウ按ニ細末ノ磨子末ノ類ヲ云フ」*Poeder van Brandverw*が、またシヨメル（2）の書にみられるように金剛砂 *amaril*・浮石 *puijsteen*・錫灰 *gebrande tin*が用いられていたようである。さて線彫り用としてのダイヤモンドの利用法については明和頃から蘭学者およびその周辺の者によって次第に明らかにされ始めたように思われる。即ち『紅毛談』にはギヤマンで水晶の印章、びいどろの器物に画模様を彫ることができる（3）とあり、それは西欧においてダイヤモンドの尖端を用いて行われる所謂ダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィング *diamond-point engraving* に相当するものと推定され、それ故、切子ガラス *cut-glass* のための研磨や、その他穿孔などの加工とは全く無関係のものと思われる。なお『博物筌』（明和五年（一七六八）序）には（4）

ヒイドロニホリモノシテ来ルコレヲギヤマンホリトイフ

と記されているし、『雲根志』には鉄・石・焼物などに細く彫るのをギヤマン彫りという（5）と述べられ、『倭訓栞』にも硬い（6）

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第四図 ギヤマン彫り鴛鴦草花文杯。高さ5.1cm。比重4.0。びいどろ史料庫蔵〔No. 1958.12〕。横山写真光芸社撮影。

第三図 雛飾り切子六角段重。段重のみ高さ約3.5cm。びいどろ史料庫蔵〔No. 1974.5〕。横山英俊氏撮影。

などと称される細かいピラミッド状突起の連続文 (fine diamond) 第三図、雛飾り切子六角段重の左右両側面の文様(相当)である可能性もあり得ようが、金属・陶磁をも対象として考えるときは極めて考え難くなるからである。さらに「江戸買物独案内」には御鼻紙袋・御烟草入所・山城屋安兵衛の取扱品の一部として

硝子キヤマン彫水晶出切子物類々々

が挙げられており、ギヤマン彫りと切子は区別して記されている。以上のような理由から筆者は一部の古美術商により従

金・玉・陶器に細かい彫刻があるものをギヤマン彫りというところある。『雲根志』「倭訓栞」に材料として硝子でなく金属・玉石・陶磁器が挙げられているのは「本草綱目」などの影響であろう。『倭訓栞』にいう細かい彫刻は「紅毛談」『雲根志』所載のものに近いと考えるのが妥当と思われる。なぜならば、もしガラスだけを対象として考えるならば細かい彫刻が霞文・魚子文

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第五図 現在のガラス彫刻用ダイヤモンド・ペンシル。長さ16.8cm（蓋を除いて）。富士ダイヤモンド工業製。

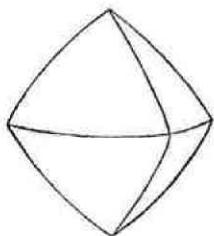
Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第六図 第五図のダイヤモンド・ペンシルの先端。図は長さで約5倍に拡大したもの。したがってダイヤモンド（無色透明だが、やや黒く見える）の部分の実長は約0.35mm。角度約107度。横山英俊氏撮影。

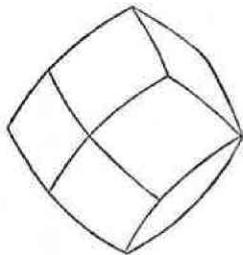
性については一、二度述べたことがあるが、ここではやや詳細にこの問題を扱っておきたい。当時将来され、わが国人の目に触れたダイヤモンドは、上記の各書にもみられるように多くは指輪に嵌められたものであり、それも質のよい、即ち無色透明な高価なものであった。このような例えば一個が数十金乃至百金といわれた<sup>(10)</sup>ダイヤモンドを、ただガラス器に絵を彫り込むだけのための工具として職人が買ったかどうか、またかなり強い力で縦横にこすりつけることによってガラス面を削り取るといった技法のため、おしげもなく高価なダイヤモンドを使用した

来「鑿彫り」と呼ばれていた第四図にみられるような彫りのものこそギヤマン彫り、即ち「ダイヤモンド・ポイント」と思しきもの」によって彫られたものと推定し、これを「ギヤマン彫り」と称することにした。<sup>(9)</sup>その後この考えは大方の支持を得て今日に至っているが、当初用いた「ダイヤモンド・ポイント」と思しきもの」という表現は加工用具に関して断定をさけた表現のつもりであったが、一部の読者はこれを「ダイヤモンド・ポイント」もしくは「ダイヤモンド・ペンシル」（第五一六図参照）と簡略化して解釈されたようであり、近年の諸書にはそうした表現が目立つ。加工用具がダイヤモンドでない可能性については一、二度述べたことがあるが、こ

圖十八第



圖一十八第



第七圖 弯曲した八面体(上)  
および菱形十二面体(下)。  
鈴木敏『宝石誌』所載<sup>(18)</sup>。

では上記の角よりいずれもやや大きくなるであろう。ところでこのようなダイヤモンド工具が仮りに蘭館で用いられていたとして、わが国のガラス職人が特にそれを入手し得た場合、本来の意味でのダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングは可能となるであろう。

かどうか極めて疑わしいし、更に十七世紀末以降一般化したというブリリアント・カット Brilliant cut の場合、指輪から外側に凸出しているクラウン Crown の各面が作りだす隅角(立体角)はギヤマン彫りを行うに適する程鋭いものとはいえないであろう(第六圖、ダイヤモンド・ペンシルの尖端の角度、約一〇七度との比較において)。但し久米武夫氏によると<sup>(13)</sup>「第十六、七世紀の頃にダイヤモンドの結晶の角を上にして指環に嵌入式酒瓶其の他鏡等の上に文字等を書き付けた事があつて、当時上流の人々の間に窓硝子等に詩を書き付ける事が流行し」ということであり、「玄中記」に述べられている指環に付けて玉を刻むという「金剛」<sup>(14)</sup>、また『和漢三才図会』に記されている黒く燧石に似て稜があるという「ギヤマンノ玉」<sup>(15)</sup>、「譚海」にみられる「無名指に、かねのわをかけてはさみ持て、刀剣の代りに用る」という「ギヤマン」<sup>(16)</sup>は、ことによると指輪に装着されたダイヤモンドの結晶であつたかも知れない。こうした目的のためには弯曲した菱形十二面体の結晶または八面体の結晶尖端を用いるという<sup>(17)</sup>(第七圖参照)。因に菱形十二面体には鋭・鈍二種の隅角があり、鋭い方は理想形において二面間の最小角が九〇度、二稜間の角が約一〇九度二八分一六秒である。また正八面体の隅角はすべて同じで理想形において二面間の最小角は約七〇度三分四四秒、二稜間の角が九〇度である<sup>(18)</sup>。したがって弯曲した結晶

尤もダイヤモンド・ポイントによらなければギヤマン彫りに類するものができないのかというと、決してそうではなく、ダイヤモンド以外ののものであっても、例えば佐藤信景（不昧軒）によって硝子などに彫画（ほりもの）の繪（え）を行うに適していることから「ギヤマン石」と記され、また石亭によって金剛石と考えられた柘榴石にしても、昆陽によって「デヤマン」の類と考えられた矢根石（燧石・チャート）にしても、ガラスに刻線をつけることは充分に可能であろう。それ故ギヤマン彫りがダイヤモンド・ポイントによってなされたとい切ることは正しいとはいえないであろう。また外国においてもダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングと称されるものが、すべてダイヤモンド・ポイントを用いて行われたものとは限らず、他の硬い物質 other hard material、特殊硬化金属の尖端 a point of specially hardened metal などが用いられている場合があるという。因に第一図に示した二上山の柘榴石は偏菱形二十四面体に結晶しており、理想形においては鋭・鈍二種の隅角の内、鋭い方は二面間の最小角が約一〇九度二八分一六秒、二稜間の角が約一二六度五二分一二秒である。<sup>(23)</sup>

さてギヤマン彫りと称されるものが作られるようになった経過としては様々な場合が想定されるであろうが、要するに工具に重点をおいて次の①のように考えるか、でき上った製品に重きをおいて②のように考えるかに大別されよう。

① 舶載の器のダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングがギヤマンによるものだと知り、

(a) ギヤマン、即ちダイヤモンドを使用して類品を作り、これをギヤマン彫りと称した。但し装身用ほどではないにしても、ある程度高価な、しかも当時としては希少であったはずのダイヤモンド工具の入手の問題が残る。

(b) ギヤマン石と呼ばれ、あるいはギヤマン（石）の同類とも考えられた金剛石（＝柘榴石）の結晶の隅角、もしくは矢根石（燧石・チャート）の鋭い角などを用いて類品を作り、これをギヤマン彫りと称した。この場合更に金剛しゃ

う(柘榴石)の細末を水にとき、回転する鉄輪につけてガラス面に画線などを彫込むグラヴィール *Gravier*,  
Wheel engraving もギヤマンの類(即ち金剛砂)を利用したことに変わりはなく、これも含めて差支えないであらう。それならば更に一歩進めて研磨材に同じく金剛砂を利用して加工する、切子 Cut, Cutting の場合もギヤマン彫りと称されて然るべきだと考える向があるかも知れぬが、ギヤマン彫りはあくまでも草花など細かい画模様を彫ったものであり(第四・第八図参照)、これと一見して異質の印象を与える切子(第三図)までギヤマン彫りと呼ばれたとは到底考え難いであろう。ただ蘭人が身に着けたダイヤモンドを見る機会があったと思われる長崎では、柘榴石・矢根石などまでをギヤマン(≡ダイヤモンド)と取り違えることはなかったのではなからうか。その上ギヤマン彫りという語の出自が長崎であったとすると、この(b)の仮定に対しては、少なくとも長崎に関してやや消極的にならざるを得ない。

②使用した工具が何であれ(ダイヤモンドまたはギヤマンの類と無関係のもの、例えば水晶・黄玉の結晶の尖端、燧石の角、鋭く研いだ鑿など)、ともかくダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングと類似のものを作り、これをギヤマン彫りと称した。したがって一見したところギヤマン彫りに類似して見えるグラヴィールも、やはりギヤマン彫りと考えられていたとしてよいであらう。

さて、上記②の文末に記したギヤマン彫りとグラヴィールの関係について、以下にやや詳細に私見を述べておきたい。「本草綱目釈義」にはオランダ人がフラスコに毛彫りをするのにギヤマン石を用いるので、ギヤマン石で彫ったということからこのフラスコをギヤマンという<sup>(26)</sup>と述べられている。この場合も切子ではなく毛彫りに類するものであることに留意する必要がある。但し当時舶載されたフラスコにグラヴィールの施されたものは多々みられるが、ダイヤモンド・ポイ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

ント・エングレイヴィングのあるものは極めて少なく、恐らく亡羊のいうフランスコの毛彫りもグラヴィールである可能性の方が大きいと推測される。また『長崎名勝図絵』（文政初年成）の「ギヤマン」の条には、櫛・弁・コップなどびいどろの諸器に草花を彫物していると述べられているが、現存するガラスの櫛・弁・コップなどに通常みられる草花などの文様はほとんどがグラヴィールによるものであり（第八図参照）、ダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングによるものは、仮りにあったとしても例外的なものであろう。したがって、この櫛・弁・コップなどびいどろの諸器にみられるという彫物は、そのほとんどがグラヴィールではなかったかと思われるのである。

第八図 グラヴィール花文板ガラス入鼈甲櫛。長さ12.4cm。びいどろ史料庫蔵〔No.1959.65〕。横山英俊氏撮影。

ダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングとグラヴィールとは、どちらも繊細な毛彫りに類する文様となし得るため、当時の人々がこの両者による製品をどこまで区別していたのか、またその加工法の相違を製品の名称にまで反映させる必要が果してあったのか甚だ疑問である。特にグラヴィールに相当する語がなかった関係上、両者ともギヤマン彫りと称された可能性は極めて大きいと思われる。なおこの両者の区別は陰刻された部分に注意して観察すれば、特に拡大鏡を用いれば容易につけられる。即ちダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングおよびそれに準ずるもの場合は第九図に示すように刻線の両側・内部に貝殻状破面が無数にみられるのに対し、グラヴィールの場合は第十図に示すようにこのような特徴がみられないからである。因に切りガラス

（カットグラス）は第三図の雛飾り切子六角段重にみられるように、拡大鏡を用いるまでもなく外見からして全く異質のものである。

以上述べた事柄を次に要約しておく。ギヤマン彫りは必ずしもダイヤモンド・ポイントによってなされたとは限らな

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第九図 ギヤマン彫り梅枝文高脚杯（部分）。高さ11.2cm。図は長さで約4.7倍、面積で約22.1倍に拡大したもの。びいどろ史料庫蔵〔No.1967.51〕。横山英俊氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十図 グラヴィール水辺風景文板ガラス入籠甲櫛（部分）。長さ13.9cm。図は長さで約5.6倍、面積で約31.4倍に拡大したもの。びいどろ史料庫蔵〔No.1972.14〕。横山英俊氏撮影。

い。またギヤマン彫りに切子を表す用例がなく、むしろグラヴィールを表す用例が多いように思われる。従ってギヤマン彫りは狭義でダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングもしくはダイヤモンドに次ぐ硬度の石、堊などによる陰刻を、広義でグラヴィールをも含めた陰刻を表す語と考えた方がよいと思われる。

註

- (1) 馬場貞由「硝子製法集説」稿本、文化七年凡例、卷之上、三十二オ。静嘉堂文庫蔵〔28633.2/97 35〕。  
E. Buys: *Nieuw en Volkomen Woordenboek van Kunsten en Wetenschappen*, Amsterdam, 1772, *Vierde Deel*, Bladz. 545. 井伊美術館蔵。
- (2) 馬場貞由、前掲書、卷之下、四十一ウ。  
M. Noel Chomet: *Algemeen Huishoudelijk, Natuur, Zedkundig, en konst. Woordenboek*, Tweede Druk geheel verbeterd, en meer als de helfte vermeerderd door J. A. de Chalmot, enz., Leyden en Leeuwarden, 1778, *2de Deel*, Bladz. 891. 国立国会図書館蔵〔蘭・66〕。
- (3) 後藤梨春「紅毛談」卷之下（早川純三郎「文明源流叢書」第一、国書刊行会、大正二年）、四四七頁。
- (4) 山崎右門（蘭齋）『博物塗』版本、明和七年刊、二百七十二ウ。国立国会図書館蔵〔ナ331-18〕。
- (5) 木内重暁（石亭）『湖上石話雲根志』前編、版本、安永二年刊、卷之二、二十七オ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-10〕。
- (6) 谷川士清『倭訓栞後編』影印版（すみや書房、昭和四十四年）、三〇二頁（卷之六、七オ）。
- (7) 棚橋淳二「手提切子六角段重」〔セラミックス』第九卷第六号、窯業協会、昭和四十九年六月）、三九七頁。
- (8) 中川五郎左衛門「江戸買物独案内」版本、文政七年序、下卷、三百二十九ウ。国立国会図書館蔵〔123-229〕。
- (9) 棚橋淳二「近世日本におけるガラス製造法の発展とその限界」〔一〕『研究紀要』松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会、昭和四十年、二二三—二三四頁（縦組）。
- (10) 平賀国倫（源内）『物類品隣』卷之二（入田整三『平賀源内全集』上卷、荻原屋文館、昭和十年）、三六頁。
- (11) 砂川一郎『ダイヤモンドの話』岩波新書、五一六（岩波書店、一九六四年）、八三頁。

(12) 富士ダイヤモンド工業株式会社次長・藤田輝男氏の談によれば、ダイヤモンド・ペンシルの尖端角は用途により異なり、ガラス彫刻用には九五度乃至一二〇度が適しているという。

(13) 久米武夫『新寶石学』(風間書房、昭和四十一年)、一九二頁。

(14) 李時珍『校正本草綱目』貝原益軒校訂、版本、寛文十二年刊、第十卷、三五ウー三六オ。

(15) 寺島良安『和漢三才図会』版本、正徳二年序、卷第六十一、二十七ウ。びいどろ史料庫蔵。

(16) 津村正恭(深庵)『譚海』十一、斎藤松太郎・古賀彦次郎校、早川純三郎編(国書刊行会、大正六年)、三七三頁。

(17) 久米武夫、前掲書、一九三頁。

篠原玄『ダイヤモンド工具』改訂版(工業調査会、一九六二年)、六七頁。

(18) 鈴木敏『宝石誌』大正五年(国文閣、昭和四十九年、復刻版)、一三九頁。

(19) 須藤俊男『結晶学概論』(北隆館、昭和23年)、163-165頁所載のシュワエの公式によれば、等軸晶系の場合、二つの面  $(h\ k\ l)$  と  $(p\ q\ r)$  のなす面角  $V$  は

$$\cos V = \frac{hp + ka + lr}{\sqrt{(h^2 + k^2 + l^2)(p^2 + q^2 + r^2)}} \dots \dots \dots [1]$$

によって与えられるという。但し面角は結晶学的には通常外角で表されているので、内角(実際の角)は面角の補角、即ち  $180^\circ - V$  となる。

菱形十二面体 Rhombic dodecahedron の二つの面  $(110)$   $(1\bar{1}0)$  の面角は(1)式により

$$\cos V = 0, \therefore V = 90^\circ$$

ゆえ、内角も  $90^\circ$  となる。また二面  $(110)$   $(101)$  が作る稜と二面  $(1\bar{1}0)$   $(10\bar{1})$  が作る稜とのなす外角は偏菱形二十四面体 Icositrahedron の二つの面  $(211)$   $(2\bar{1}\bar{1})$  の面角  $V$  におきかえて考えられるゆえ、(1)式により

$$\cos V = \frac{1}{2} \dots \dots \dots [2]$$

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十一図 菱形十二面体(上)と偏菱形二十四面体(下)。E. S. Dana

& W. E. Ford: A Text-book of Mineralogy, John Wiley & Sons, Inc., 1922, p. 54 & p. 59, 所載。面  $(211)$  の下および左下の面指数は  $(2\bar{1}\bar{1})$  および  $(2\bar{1}1)$  の誤り。

したがって二稜間の内角はVの補角約 $109^{\circ}28'16''$ となる。

次に八面体の二つの面 (111) (111) の面角は(1式により

$$\cos V = \frac{-1}{3}, \therefore V = 109^{\circ}28'16''$$

ゆえ、内角はVの補角約 $70^{\circ}31'44''$ となる。また二面 (111) (111) が作る稜と二面 (111) (111) が作る稜とのなす外角は、菱形十  
二面体の二つの面 (110) (110) の面角におきかえて考えられるゆえ、既に算出したように $90^{\circ}$ となり、内角も $90^{\circ}$ となる。

㉒ 佐藤信亮(大正五年)『東京義塾十住井』佐藤信亮編輯、鎌田宗之編輯、版本、昭和二十五年三月十四日(明治三十七年)刊、巻五、十七オ。大  
阪府立中央図書館蔵 [826-2]。

㉓ 木内重晴(石亭)『諸国石造書根志』三編、版本、享和元年刊、巻之四、九ウー十オ。松蔭女子学院大学図書館蔵 [459-10]。

㉔ 青木教書(昆陽)『昆陽漫録』巻之二(日本随筆大成編輯部「日本随筆大成」第十回、吉川弘文館、昭和三年)、四八四頁。

㉕ E. M. Elville: The Collector's Dictionary of Glass, Country Life, 1969, p. 91. りんぷく史学館蔵。

㉖ L. M. Angus-Butterworth: British Table and Ornamental Glass, Leonard Hill [Books] Ltd., 1956, p. 112. りんぷく史学館蔵。

㉗ 偏菱形二十四面体 Icositetrahedron の二つの面 (211) (211) の面角は註19で求めたよう  
に約 $70^{\circ}31'44''$ 、したがって内角はその補角約 $109^{\circ}28'16''$ となる。また二面 (211) (211) が  
作る稜と二面 (211) (211) が作る稜とのなす外角は、四六面体 Tetrahexahedron の二つの  
面 (210) (210) の面角Vにおきかえて考えられるゆえ、註19の(1式により

$$\cos V = \frac{3}{5}, \therefore V = 53^{\circ}7'48''$$

したがって二稜間の内角はVの補角約 $126^{\circ}52'12''$ となる。

㉘ 山本中鑑(七半)『本草綱目採義』(「古事類苑」) 9 「博物類」・金石部「古川弘文館」昭和  
四十六年)、『金石部』三十三頁。

㉙ 饒田翁義『長崎名勝図絵』首巻(長崎史談会、昭和六年)、三三頁。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十二圖 四六面体。E. S. Dana & W. E. Ford: A Text-book of Mineralogy, John Wiley & Sons, Inc., 1922, p. 57. 所載。

五 ギヤマンの語義変化に関する近代以降の諸説

江戸時以にギヤマンが金剛石の類と考えられ、その金剛石についての認識の変化につれて、ギヤマンに対応する石も柘榴石からダイヤモンドへと移行したことは既に述べた。ここではギヤマンが更にガラスを表す語に変化した経緯について近代以降に国語学者、ガラス史に関心をもつ人々が立てた諸説を列挙し（第八表）、これを分類し、ついで各説、特に支持者の多い説に対する私見を述べてみることにする。

第八表 ギヤマンの語義変化に関する近代以降の諸説一覧。

著者・編者	成立年・刊行年	所	説	註
大槻文彦	明治二十二年	誤テ、びいどろ。(金剛石、能ク硝子ヲ切ルヨリシテ、誤リ呼ベルナリ) (二)金剛石ヲ以テ、硝子ニ彫刻シタルモノ。ぎやまん彫。(三)転ジテ、硝子ヲ、ぎやまんト云フ。 デアマンは、和蘭語 Diamant. で、英語の Diamond. と語源の同じい金剛石——硝子截の名なのを、いつか硝子に奪はれて仕舞ったのださうだが、 蘭語のデアマンは金剛石の義なれば、硝子の光沢ありてか、やくより、かくは命せたる名にはあらぬか、よく考ふべし、 金剛石の、がらす。を能く切るより誤りいふと。 ギヤマンは元和の頃長崎に兩蛮人來りて製法を伝へたる時葡萄牙語より起りしものか。 硝子が自由で鑽れるのは嘘でない。承れば金剛石は其の關係からギヤマン石といつたらしい。さうならば金剛石自身の名ではなく、硝子切り石の略であつて、効用から本体の称呼になつたのである。是は蘭語のギヤマンは、仏語の Diamant の訛だと、主張する語学先生の御説なのだ。……(中略)……。ギヤマン彫のあるビイドロ物が珍重されるにつけて、彫のない只だのビイドロが喜ばれなくなつた際に、生地であるビイドロも加工されたギヤマン彫の方で称呼されるやうになつたのであらう。即ちギヤマン彫のあるビイドロは優等品、彫のないのは劣等品といふ心持から、ギヤマン彫とだけで優等のビイドロの意味に聞かれたのである。	(1)	
石井氏司 (研堂)	昭和九年		(2)	
横井時冬	明治三十五年		(3)	
上田万年・他	明治三十七年		(4)	
大日本鑛業協会 三田村玄竜(鳶魚)	大正四年 大正六年 大正十四年		(5) (6) (7)	

朝倉龜三(無声)	昭和三年	あらう、云ふまでもなくギヤマン彫は金剛砂を利用しての細工である。一体ビイドロとギヤマンとの区別は、後のものながら「博物筌」に拠ると、ビイドロに彫物したのをギヤマンと云ふとあるが、それは天保後のお話で、文政度の江戸人は、ガラスの事をビイドロとも又ギヤマンとも、思ひくゝに呼んでゐた。
新村出	昭和八年④	ギヤマンと云ふのは、初めはガラスを切る道具の事であり、そして其の切つたもので細工したものをギヤマン細工と呼んだのであるが、それを更に、ギヤマン其の物をガラスであると誤解して仕舞つたのである。
	昭和八年⑧	ギヤマンは元來金剛石すなはち英語のダイヤモンドであつたものが、幕府晩期に至ると、それが硝子細工の一種いはゆる切子のガラスを意味し遂には更に訛つてガラスと同物だと考へるやうになつてしまつた。
	昭和十九年	ギヤマンの場合は、ガラスを切る器械の一端たるダイヤモンドが、ガラスそのものに転じてしまつたといふ面白い内容変化を遂げてゐる。
	昭和三十年	ガラスを切るに金剛石を用いたことから、切つて細工したものを、ギヤマン細工と呼び、さらにガラスそのものをいうようになった。
林源吉	昭和八年	本文に引用した諸文献には曹達硝子をビイドロ、切子硝子をギヤマンと解してゐるやうであるが
渡辺庫輔	昭和八年	ギヤマンは金剛石の義である。それから転じてやがて金剛石に似た角面を持つ硝子器の義となつた。……(中略)……。ギヤマンはまた切子といはれてゐる。
岡村千曳	昭和九年	ギヤマンは徳川末期に至りダイヤモンドで彫刻した硝子又はカットグラスの意に用ゐらるゝやうになり、更に転じて一般の硝子を指すやうになつたのである。
	昭和十二年	斯様な研究の結果であらうか文化の末年には舶來品と同様のギヤマン諸器物を江戸でも製し始むるに至つた。こゝにギヤマンといふのはカットグラスの事と解せらるゝ。
下中弥三郎	昭和十年	本来は硝子切の金剛石の意といはる。我国にて誤用してガラス及びガラス製品をいふた。
和田健次	昭和十一年	徳川の初期にギヤマンと云つたのは矢張りガラスのことで、この語は明治初年まで続いた。この言葉の変化を辿つてみると、デヤマン、デヤマンド、英語のダイヤモンド又はオランダ語のデアママンテに該当するもので、金剛石のやうに光り輝いたと云ふ譬へに用ひたものであらう。

(18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9)

昭和十六年

「ギヤマン彫り」が単にギヤマンとなり、そのギヤマンが更にガラスを意味する言葉に変化したものと考へられるのである。従つてガラスを意味するギヤマンは、オランダ語のディヤマンから直接転訛したものと考へるよりは、「ビードロのギヤマン彫り」からビードロに代る名称に變つて来たものであると解釈する方が穩当であらうと思ふ。

昭和十七年

而して当時はガラスに彫刻を施すのに、専らダイヤモンドを用ひ、これで彫つたガラスを特に「ギヤマン彫りのビードロ」と称し、その特殊の加工をギヤマンの文字で表現してゐたことが、当時のいろ／＼の書物に散見するのである。それは丁度今のカットグラスと云ふ言葉に該当し、カットと云ふ文字が、ガラスに彫刻類似の加工を施した事を意味するのと全く同じ訳である。而して現今のこのカットグラスが、どうかすると単にカットと呼んでも意味がよく通ずるやうに、当時ギヤマン彫りが普及して来た頃になつて、「ギヤマン彫りのビードロ」が単に「ギヤマン彫り」となり、更に短縮して「ギヤマン」となり、加工を意味するその「ギヤマン」が今一層転じて高級なガラス製品を意味する言葉にまで變化し、いつともなくそれが流通普及していつたものと思はれる。

昭和二十四年

ギヤマンとは本来彫刻を施したビードロを意味する言葉であつたと考へられるが、次第に變転して彫刻の有無に拘らず、高級優良なビードロを特にギヤマンと呼び、然らざる普通品を単にビードロと称してゐたものと思ふ。それが年代の経過と共に混用され、ガラスはすべてこの二つの名称を持つ様になつて、遂に明治時代に入つたものと考へるのが、最も常識的であり穩当な推定だらうと思ふ。

昭和二十五年

また純良無色のガラスの外観がダイヤモンドに似ているので、このすぐれた相似点を強調した意味からギヤマンの語が用いられたとする説もあるが、或はそうかも知れない。

昭和十六年

丁「特殊化と云へば、ギヤマンが切子硝子の専称となつたのも、その例ちやらう。」

丙「これは如何にも素朴な誤です。元來ダイヤモンドのことだが、その形がよく似てるものだから、切子硝子の名にしてしまつたのでせう。ところが僕等は子供の頃それから更にそれ

れて、美しい色硝子の細工物をギヤマンのビードロと呼びましたよ。……(略)……」

昭和四十九年

ギヤマンでカットグラスを作つたのが、カットグラスそのものの名と誤解され、更に一般にガラス器の称となる。

昭和十八年

はじめわガラスをきる道具ダイヤモンドのことで、それできつたものでさいくしたものをギ

(19)

(20)

(21)

(22)

(23)

(24)

(25)

金田一京助

榎垣実

西尾実・他

角川書店

棚橋淳二

昭和二十七年

昭和三十八年

昭和四十一年

昭和三十八年

昭和三十九年

昭和四十一年

昭和四十二年

昭和四十七年

ヤマン細工とよんだのであるが、そのうちに、ガラスそのものをギヤマンと誤解したのにも  
とづく。

オランダ語 *diamant* のなまりで、元来はダイヤモンドのついたガラス切りの道具の称であ  
ったという。

カット・グラスを「ギヤマン細工」と呼んだことから、その略語「ギヤマン」がガラスと誤  
解された。

ギヤマン細工は今のカットグラスのことで、ギヤマンでビードロを切り、色々の細工をしたか  
ら言う。それが、細工された物の名と誤解されて、ガラス器をもギヤマンと呼ぶことになった。

原語は金剛石の意。それをガラス細工でガラス切りに使った事から。  
ダイヤモンドのついたガラス切りの道具を称したが、それを誤用したものとされる。

第二四の杯(高さ五・〇浬、口径四・九一五・〇浬)には水引「*Tovara filiformis*」と思われ  
る草花(葉脈が異なるが)と鴛鴦の図が、ダイヤモンド・ポイントと思しきものによって引  
っ掻くようにして線刻されている。ギヤマン彫りのビードロとはこれをいうのであろう。

「ぎやまん」は周知の如くオランダ語 *diamant* を訛った語であるが、このぎやまんの尖端、  
即ちダイヤモンド・ポイントを用いて点を、細い線を、更に細線を重複させて太い線を、ま  
た細線を縦横に交錯させて面を陰刻して画様を表わすのが「ぎやまん彫り」の技法である。

……(中略)……。図柄は周囲を極く浅く陰刻して蛟龍を表わしたものである。この平たく陰  
刻された部分には縦横に交錯した細線が走り、この部分が所謂グラビール技法 *Gravierkunst*

によったものではなく、ダイヤモンド・ポイントと思しきものにより丹念に疵付けられたこと  
を示している。……(中略)……。しかしながら「ギヤマンはり」という語は、カットを施

した謂所切子ガラスではなくて、やはり「鉄石やき物(びいどろ)——棚橋註」等にはほきこと  
をほりたる」もの、即ち毛彫の如きものを意味する語として当時使用されていたと考えてよ  
いであらう。

欧米においては、ダイヤモンドにより陰刻された器物は古くから高く評価されてきたが、わ  
が国では、それに類するものが、かつて自国で作られていたことさえ近年にいたるまで公表  
されることがなかった。類するものと称したのは、これらの陰刻がダイヤモンドによるもの  
か、鋼玉・黄玉などの玉石類、もしくは鑿によるものか断定し難いためである。……(中略)

(32)

(32)

(31)

(30)

(29)

(28)

(27)

(26)

昭和五十年

昭和五十一年

昭和五十二年

昭和四十三年

昭和四十七年

昭和四十七年

……。したがって工具として用いられたものが真のダイヤモンドであったか、またどのようなダイヤモンドが使用されたか（原石か加工品か）、あるいは職人がダイヤモンドを入手しえたかなど、いまだ不明な点が多い。……（中略）……。オランダはダイヤモンド彫刻の盛んな国であり、わが国にもその製品が舶載されたと思われる。ぎやまん彫りは、その技術なし製品に対し与えられた訳名であろう。ただわが国では工具の材質に関係なく類似の効果を上げた場合、これをぎやまん彫りと称したのではないかと推測される。

(34)

⑦が挙げられている。  
附第一「色消硝子の事」の条には「本編」の第十二「色消硝子の法」の解説を補足する形で、当時の無色ガラス（クリスタルガラス）の製造の状況が述べられている。

(36)

当時ぎやまん彫りを施す工具にダイヤモンドが用いられていたのか、或いはこれに次ぐ硬度の石もしくは鑿が用いられていたのかは明らかでない。  
diamond（蘭）金剛石のなまりで、江戸時代よりガラス、石、焼物の彫刻用に使われたが、その後ポルトガル人によって伝来したビードロ（vitro）と混同され、またガラス（glass）とも同義語となり、すべてガラスの意味に用いられた。近來は珪石を意味し、再びガラスの意を失った。

(37)

はじめは「ダイヤモンド」という原義の通り使用されていたが、ギヤマンでガラスを細工することからギヤマン細工ということばができ、やがてギヤマンと略されてガラス自身をさすことになった。このことは、現在ではすでに定説になっている。

(38)

当時、ガラスに彫刻を施すのにダイヤモンド・ポイントを用い、これで細い毛彫りの文様を彫ったガラスを「ギヤマン彫り」と呼んだ。そして、ギヤマン彫りが、つづまってギヤマンとなったのである。つまり、「ギヤマン彫りのあるビードロ」を省略してギヤマンと呼ぶようになったもので、はじめは、おそらくギヤマン彫りを施したものをだけをギヤマンと呼びならわしたのだろう。それが、いつの間にかガラス器のすべてについてギヤマンと称するようになり、ビードロと区別することなく同義語として用いるようになったものと思われる。ギヤマンは、ギヤマン彫りの流行した十八世紀後半ごろから流布した言葉であろう。したがって、しばしば誤解されるように、いわゆる切子（カットグラス）を総称した言葉ではない。

(39)

時枝誠記・他  
日本大辞典刊行会

沢野久雄

寺本界雄

昭和五十一年

昭和四十八年  
昭和四十八年

昭和四十九年

昭和五十二年

昭和四十九年

切子はダイヤモンド・ポイントのように毛彫りを主とした技法ではなく、円盤や金剛砂を用いてすり削る別のテクニクである。

ビードロというと、とかく、薄い味わいのある吹きものの器のことだと考え、ギヤマンというのと、なにやら、キラキラした直線的なカットのあるガラス器を連想しがちだが、これはたぶん、語感からくる誤りである。

ガラス切りにダイヤモンドを使ったのを誤ったもの  
ギヤマン……(中略)……②(彫刻をほどこしたガラス製品を「ギヤマン彫り」と呼んだところから)ガラス製品一般をさす。  
ギヤマン……(中略)……ガラス製品などに精密な彫刻を施すこと。また、そのもの。今のカットグラスにあたる。

ぎやまんは、ガラスに彫刻するのにダイヤモンドを用いたことからますぎやまん彫りと呼ばれ、その後ガラスそのものを呼ぶようになったのであろう。

長崎の人に訊ねても、びいどろときやまんの区別さえ、今ではさだかではないのである。それならそれでいい。「原文は改行」「長崎市制六十五年史」(昭和三十四年刊)の、「長崎地方の方言」のうち、「長崎で使われている外来語」の項には、ポルトガル語として「ビードロ」「硝子」、オランダ語として「ギヤマン」「きりこガラス」とある。どうも語感から言って、びいどろは丸いもの、なめらかなもののようにであり、ぎやまんは鋭いもの、稜のあるものというような気がしないでもないが、これはどこまでも私の主観である。……(中略)……。そういえば「ぎやまん」は、オランダ語のダイヤモンドの訛りだということになっている。(正確には、当ときやまんはダイヤモンドで細工を施した、つまり「ぎやまん細工」の「細工」だけが、脱落した言葉だという。)

「ぎやまん」はダイヤモンドの略で、つまりダイヤモンドの粉で磨き上げた硝子ということになっている。すると、それはとかく鋭く光るもののように、びいどろは逆にそういう鋭角的な要素の少ないもの、素朴な吹き硝子のようなものの気がするが、私は自分のこういう考え方に確信を持っているわけではない。

このギヤマンは、硝子に切子風の細工を施したものを指すのだが、本来の語はチャマンテで、意味も、金剛石とか菩薩石といわれるものである。

(40)

(42) (41)

(43)

(44)

(45)

岩淵悦太郎

昭和五十年

元来は金剛石(ダイヤモンド)のことであるが、ガラスを切るのに金剛石を使ったので、転じてガラスそのものを称するようになった。江戸時代に使われた言葉であるが、明治になっても、一部ではガラスをギヤマンと言っていたようである。

(46)

由水常雄

昭和五十年

ギヤマンは、オランダ人のいうダイヤモンド・カットの訛ったもので、もともと菱形のカットを施したガラスの器を指していた。

(47)

昭和五十二年

オランダ語のダイヤモンドとポイントつまりダイヤモンド・ポイント彫りのガラス器という語がつかまって、ダイヤモンドギヤマンとなったもの。当時のオランダ(十七世紀)では、ダイヤモンド・ポイントを使って、ガラスに風景や人物、あるいは模様などを彫りこんだものが大流行していた。おそらく、そうしたガラス器がわが国にもたらされて、そのままギヤマン彫りのビードロと呼ばれていたのであろう。したがって、その意味するところは、カット(切子)とは異なっていたと思われる。

(48)

佐藤潤四郎

昭和五十一年

これはオランダ語の(tubband)で今日のダイヤモンドの事である。「原文は改行」このダイヤで線彫りにしたり点線の描写で文様を彫りつけていた。「原文は改行」それは丁度今のカットグラスと言う言葉に当り、カットと言う文字がガラスに彫刻類の加工を施した事を意味するのと全く同じ訳である。現在カットグラスが、単にカットと呼んで意味がよく通じるように、当時ギヤマン彫りが普及して「ギヤマン彫りのビードロ」が単に「ギヤマン彫り」となり、更に短縮して「ギヤマン」となった。本来は加工法の名であったものが、今一層転じて高級なクリスタルガラス(又は類似の)製品を意味する言葉にまで変化し、いっつもな

(49)

くそれが流通普及していったものであろう。ガラスをダイヤモンドで彫ることが転じて、徳川期ではもっぱらギヤマン彫り(義山彫り)といわれて珍しがられていた。……(中略)……。明治期の小説では、むしろギヤマンは、かなり手のこんだカット・グラスの意味につかわれている。

昭和五十二年

②「ガラス細工をするとき切るのに用いられたので、誤解・転用されて」ガラス。

(50)

三省堂編修所

昭和五十一年

このギヤマンという言葉については、佐藤潤四郎氏は、「ギヤマンはダイヤモンドのことで、ガラスのことではない。ガラスに文様を表現する方法をダイヤモンド・エングレービングといい、これを「ギヤマン彫り」と江戸時代には言っていた。ギヤマン彫りの後半が消えて、

(51)

久松潜一・他

昭和五十一年

いい、これを「ギヤマン彫り」と江戸時代には言っていた。ギヤマン彫りの後半が消えて、

(52)

藪崎昭

昭和五十一年

いい、これを「ギヤマン彫り」と江戸時代には言っていた。ギヤマン彫りの後半が消えて、

(53)

川添利男	昭和五十二年	いつかガラスを表す言葉として今日まで続いている」と。 言語考現学研究者、神原末一郎氏は新村出博士の「ギヤマン」の言葉を「ギヤマンは初めはガラスを切る道具のことで、その切ったものに細工したものをギヤマン細工と呼んだが、ギヤマンそのものが、ガラスだと誤解したことに初まる。ギヤマンは金剛石、ダイヤモンドである」とし、「原文は改行」ギヤマンとビイドロとの区別を、朝倉亀三氏（見世物研究著者の「博物筈」によると、ビイドロに彫刻したものをギヤマンと云うとある。	(54)
日本放送協会	昭和五十二年	ギヤマンというのは、もちろんディアマントゥつまりダイヤモンドでしょうか、つまりガラスもダイヤモンドも同じように、こう光り輝く透明な感じのものを、同じようにみていたのかも知れません。それだけガラスを高くみていたのかも知れません（文責↑棚橋）。	(55)
遠藤美智子	昭和五十三年	それが一九世紀前期頃よりやっと「ぎやまん」と称される青味のない完全な無色がもてはやされるようになっていったのではないかと考えられる。	(56)
岡美千雄	昭和五十三年	江戸時代、ガラスやガラス細工の渡来とともにオランダ語からはいったことばで酒盃、とくに切子細工をギヤマンの盃という。	(57)
金田一春彦・他	昭和五十三年	原語は「ダイヤモンド」の意味。それでガラスを切って細工したものを「ギヤマン細工」といったことから。	(58)
関忠夫	昭和五十三年	一方、ギヤマンというのはダイヤモンドを意味するオランダ語が転訛したものである。それはオランダ渡りの彫刻ガラスの文様をダイヤモンドの小粒を先につけたペンシル状のもので刻んだことからおこった呼び方が普及したものとと思われる。東京国立博物館保管の花文様の彫刻をみるオランダ渡りのワイングラスの外箱には「天保辛卯年（一八三二）ギヤマンコップ」とあり、ガラス問屋の加賀屋が発行した幕末のころの引札（広告の刷物）にもギヤマン問屋とみえる。このように、幕末になって、ギヤマンということばがひろくガラスを指すようになってきたことがわかる。	(59)
林京子	昭和五十三年	「十六番館」は、長崎港を見おろす丘の上にある。……（中略）……。白いパネルに〔原文は改行〕「ガラス器類はギヤマン ビイドロ、日本はガラス製品はなく、当時オランダ船から運ばれるガラス類を日本では貴重品として扱って、カットグラスの方をギヤマン、吹きガラスの方をビイドロと言って珍重した」〔原文は改行〕と展示品の説明がしてあった。	(60)

\*諸説の配列は発表年次の古い著者順とし、同年次の場合は五十音順とした。また同一著者による説は年代順に一処にまとめた。但しこの著者の順序はかなり便宜的かつ不徹底のもので、その著者の早期の説を逸した場合、また初出の時期が明らかでないため単行本・全集の刊年に拠った場合、増改訂に伴ない改題された辞書の刊年に拠った場合などのため、その順序は必ずしも当を得たものでないことを断っておきたい。

\*刊行年は当該版の初刷の刊年を記したが、版を刷の義に使用していると思われる書籍については初版の刊年を示した。  
\*刊年に十印を付した説は以下の分類から除いてある。

第八表に示した諸説は同じような説にみえても細部で解釈・表現が異っていて、強いてこれを纏め分類しようとする、無理も生じたまた主観もはいる。諸説の内容はできるだけ正確に汲みとるようにつとめたつもりであるが、中には判断に迷うものもあり、分類位置が多少ずれている場合があるかも知れぬことを予め断っておきたい。なお\*印を付した説は語義変化を目的としたものではない。

①ギヤマン(石)の名がガラスの名に転訛したとする説

- (1)ギヤマン(石)のガラスを切り得る性質から。大槻(明22)。上田・他(大4)。
- (2)ギヤマン(石)の無色透明性と類似から。杉江(昭25)。棚橋(昭50・51)。遠藤(昭53)。<sup>\*</sup>
- (3)ギヤマン(石)の光沢・光輝との類似から。横井(明37)。和田(昭11)。日本放送協会(昭52)。
- (4)研磨されたギヤマン(石)の形態との類似から。渡辺(昭8)。前田(昭16)。

②加工用具の名としてのギヤマンがガラスの名に転訛したとする説

- (1)ガラス切りの名から。石井(明35)。下中『大辞典』(昭10)。新村(昭19)。金田一京(昭27)。西尾・他(昭38)。
- 角川書店『國語俳句大歳時記』(昭39)。時枝・他(昭48)。岩淵(昭50)。久松・他(昭51)。

(2) 切子加工用具の名から。前田(昭49)。三省堂編修所(昭51)。

(3) 研磨材の名から。沢野(昭52)。

(4) 特に区別せずに。新外来語研究会(昭43)。

③ 加工方法乃至加工製品の名が省略されたとする説

(1) 「ギヤマン細工」から

(a) 切ったもので細工したものとするもの。新村(昭8④・30)。荒川(昭18)。川添(昭52)。金田一春・他(昭53)。

(b) 特に切子とするもの。新村(昭8⑩)。榎垣(昭37・41)。

(c) 細工の内容に触れていないもの。石綿(昭47)。

(2) 「ギヤマン彫り」から

(a) 特に切子とするもの。日本大辞典刊行会(昭48)。

(b) 特にダイヤモンド・ポイント・エングレィヴィングとするもの。棚橋(昭41・42)。加藤(昭47)。佐藤(昭51)。

52)。由水(昭52)。関(昭53)。

(c) 彫りの内容に触れていないもの。三田村(大14)。大槻(昭9)。杉江(昭16・17)。沢野(昭49)。藪崎(昭51)。

④ 由来には触れずギヤマンは切子ガラスであるとする説

林源(昭8)。岡村(昭9・11)。沢野(昭49)所引の『長崎市制六十五年史』(昭34)。寺本(昭49)。岡(昭53)。林京

(昭53)所引の十六番館内解説。

⑤ 切子の文様名(ディアマント・カット、即ち菱形のカット)からとする説

由水（昭50）。

①の(1)はギヤマン（石）が能くガラスを切ることから、誤ってガラスのことをギヤマンと称したとすることで、大槻文彦氏が「言海」で示した説である。玉石を表すギヤマンがガラスを意味する語となった経緯についての具体的な説明がなく、充分なものとはいえない。後年刊行の『大言海』では「倭訓栞」を引いて第八表に記したように説明全体を多少補訂している。なお『大言海』において「言海」の「誤テ」が「転ジテ」と改められたのは、『倭訓栞』に「ぎやまん」の一義として「ぎやまんぼり」が含まれているように記されていることを重くみためではないかと思われる。但し旧説を意識してか、明解な解釈は示されていない。

①の(2)―(3)はギヤマン（石）が無色透明であり、強い光沢・光輝があることから、無色透明なガラスをギヤマンというようになったとする説で注目に値するが、これだけでは説明しきれない資料（例えば『本草綱目釈義』所載のギヤマンの説）<sup>(61)</sup>がある。

①の(4)は装飾用に研磨されたギヤマン（石）の形とガラス器の形が似ていることからとする説であるが、多分デカンター・蓋物などの蓋のつまみの形を念頭において提唱されたものと思われる。したがってこの説に従えば当初ギヤマンと称されることになったのは切子ガラスということになるであろう。しかしこれを証するに足る資料は未見である（次節の「第七段階について」を参照）。

②の(1)はガラス切りの名であるギヤマンがガラスの名に転じたとの説で、古くは石井研堂氏によって唱えられ、さきの分類にもみられるように国語学者の支持が多い。しかしながら江戸時代に果してダイヤモンドのガラス切りが用いられていたのか疑問であるし、ガラス切りの名がガラスの名になった経緯についての説明もなされていない。

江戸時代、板ガラスを切ることについては、かなり関心が持たれていたようで『退閑雜記』（寛政五年（一七九三）—九年（一七九七）成）<sup>(62)</sup>には、

○びいどろ板を切るには、かねのまがりかねのごときものを火中へ入れ、赤く成らんとするとき取り出し、切べきところへおしあて、そのあてぬるあとへ、少し水をそそぎ待れば、忽ち切るゝなり。

と記され、『理斎隨筆』（文政六年（一八二三）序）には、<sup>(63)</sup>

硝子を切るには火打石の角にて摺り切るべし

と述べられている。もしギヤマンがガラスを切る道具として用いられていたのならば、当然そのことに言及された記録もあってよい筈であり、<sup>(64)</sup>まずそうした事例を示す必要がある。恐らく明治以降急速に板ガラスの需用が増加し、日常的にみられるようになったダイヤモンドのガラス切りが、江戸時代にも同様に使用されていた筈だという推測からでた説のように思われてならない。

②の(2)は切子ガラスを作るのにダイヤモンドの道具を用いたことからという説であるが、切子加工にはダイヤモンドを使用しないので、この説はなりたないであろう。

②の(3)はダイヤモンドの粉を用いて磨き上げたガラスをギヤマンと称したことからという説であるが、江戸時代には研磨材として金剛砂が用いられており、ガラス研磨の場合はそれで十分であったはずで、特にダイヤモンド末を輸入して使用していたとは考え難いように思われる。

③の(1)は「ギヤマン細工」という語の細工が省略されてギヤマンとなったとする説で、新村出氏によって唱えられたものである。新村氏が外来語の研究においても多くの業績を残しておられることは周知のことであろう。同氏は昭和八年七

月に信濃教育会東筑摩部会国語講習会における講話「日本辞書の現実と理想」において、ギヤマンの語義変化について第八表④に記したように述べておられる。一読してギヤマンの語義変化についての年代的な明確さがなく、加えて資料の提示もないので、多分に当推量による説であるかのような印象を受ける。以下同氏の説を

①ギヤマンは初めはガラスを切る道具の事であった。

②ギヤマンで切ったもので細工したものをギヤマン細工と呼んだ。

③それだけでなく更にギヤマンをガラスであると誤解した。

の三つの部分に別けて考えてみたい。①について。既に②の(1)で所見を述べた。②について。一般に「ギヤマン細工」という場合、④ギヤマンを材料として細工した物、⑤ギヤマンを工具として細工した物の二通りの義が考えられる。前者のように材料の名を付けた例は多くあって鉛・糸・貝・紙・鯨・珊瑚・竹・粘土・針金・硝子・蠶甲・豆・麦藁などの各細工がこれに相当するが、後者のように工具の名を付けた例は少なく、例えば小刀細工などがこれに該当する。用例からみると④の用法が一般的であるが、ただ一般的であるというだけの理由で⑤の用法の可能性まで否定することはできないであろう。「鳶魚随筆」の内、「びいどろ昔譚」によると「後見草安永九年の条に、硝子細工物流行、ギヤマン彫りといふ、また水晶などに印を彫」とある由にて、硝子にギヤマンと振仮名が付けられている点が注目される。このような例は特に庶民を対象とした見世物の引札、例えば文政二年(一八一九)両国広小路において興行されたギヤマン細工の大燈籠の引札(第十三図)<sup>66)</sup>、文政三年(一八二〇)に難波新地において興行された硝子細工(浪波姿黄金之庭咲)<sup>67)</sup>の引札の口上などにみられるものである。長崎では一般に知られていたギヤマンも三都では知る人も少なく、ともかくギヤマンが硝子製品であることを示すために、このギヤマンに当時びいどろと読まれていた上記の真名(硝子)を当てたものと思われる。その結

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十三図 「硝子廣大燈籠」の引札。東洋文庫蔵。写真・東洋文庫。

果、例えば「硝子細工」という語を振仮名に従って読むとギヤマンを工具として細工した物を意味し、真名に従って読むと硝子を材料として細工した物を表すというかなり複雑な用法になっている。それは、適切な譬えとはいえぬが一位（櫛）の材を用いて小刀で細

工した物を仮に「一位細工」と記すようなものであろう。しかしながら同じ「ギヤマン細工」という語でも、文政以降に買物案内、商店の引札・貼札などに散見されるようになる「ギヤマン細工」(第十一表)の場合は、ギヤマンを材料として細工した物を意味する語として用いられているといえよう。したがって「ギヤマン細工」には二通りの義があることを常に念頭においておく必要があるであらう。そこで仮に新村氏のいわれるように⑥の用法であるとして、新村氏はギヤマン(同氏の場合、ダイヤモンド)で「切ったもので細工したもの」というギヤマン細工を一体どのようなものと考えておられたのであろうか。想定される三つの場合について考えてみたい。

(1)ギヤマン(ガラスを切る道具、所謂ガラス切りのこと)で切ったものという場合の「切る」が『広辞苑』に記されているように切断の意とすると、「切ったもの」は恐らく大小の板ガラスのようなものではないかと思われるし、「切ったもので細工したもの」とはこれらの板ガラスを組み立てたものということになるのではなからうか。ところで、仮にこのような細工物が作られていたとして、それが果してギヤマン細工と呼ばれていた事例があるのであろうか。小刀細工のように終始小刀を用いて製作する場合は別として、ただ最初にギヤマンで板ガラスを切るだけで、組立てられた製品がギヤマン細工と称されたであらうか。甚だ疑問に思われるところである。

(2)ギヤマンで「切ったもので細工したもの」を、仮に『広辞苑』の表現「切って細工したもの」(第八表)と同義であるとし、切るを「切り込む」「彫り込む」「傷つける」と解すると、この細工は既に述べた「ギヤマン彫り」と同じ物を表すことになるのではなからうか。先に引いた『鳶魚随筆』の内「びいどろ昔譚」所載の、「後見草安永九年の条に、硝子細工物流行、ギヤマン彫りといふ、また水晶などに印を彫」なる記述は、この仮定を裏付けるように思われる。ただ新村氏の考えは恐らくこの(2)ではなかつたように推測される。

(3)新村氏は同じ年の十一月に執筆された「外来語の本源と経路」においてギヤマンの語義変化について再度触れられ(第八表⑩)、幕府晩期にはギヤマンが硝子細工の一種、いわゆる切子のガラスを意味したと述べておられる。したがって「切って細工した」というギヤマン細工は切子のガラスである可能性が最も高いように思われる。『広辞苑』では切子ガラスはカット・グラスと同義とされ、そのカット・グラスは「彫琢または切込細工を施した鉛ガラス」と記されていること(69)から、新村氏はギヤマン(ガラスを切る道具)でガラス器にカットもしくは切込細工を施すことができると考えられているのではないだろうか。また『広辞苑』に切子は「四角な物の、かどかどを切落した形」とあることから、ことによると切子ガラスの場合も鋸で木片のかどかどを切り落すようにギヤマン(ガラスを切る道具)でガラス器のかどかどを切り落すことができるように錯覚しておられたのではないだろうか(現在のダイヤモンド砥石ならばそれも可能であろう)。蛇足ながら切込細工にせよ、ガラス器のかどかどを落すにせよダイヤモンドで切り込み、切り落すのではなく、金剛砂(柘榴石)でその部分を磨り減らすのである。⑩について。新村氏に従えばまずギヤマン細工という語ができ、その後この語からガラスを意味するギヤマンという語が現れたという。この説を証するには、まずガラスを意味する「ギヤマン」という語よりも前に「ギヤマン細工」という語が用いられていたことを示すか、あるいは「ギヤマン」が「ギヤマン細工」という語の省略形であることを示しているような資料を提示する必要がある。ところで寛政元年(一七八九)初演の『韓人漢文手管始』にはギヤマン彫りの省略形と見做され得るギヤマンの用例がみいだされるから、これより以前にギヤマン細工という語が用いられていなければならないことになる。「びいどろ細工」という語は例えば延享四年(一七四七)凡例の「増補改正難波丸綱目」にもみられるが、ギヤマン細工という語はそう簡単に見出せないのではなからうか。因に筆者は現在のところ先に挙げた文政二年(一八一九)の用例(「硝子贗大燈籠」)まで確認し得ている。以上⑩⑪⑫の各部分

ともに、換言すれば新村氏の説全体に不確かな点が多く、容意に賛意を表し難いように思われる。

③の(2)は「ギヤマン彫り」という語の彫りが省略されてギヤマンとなったとする説で、杉江重誠氏によって再三主張されたものであり、ガラス史に関心をもつ人々によって支持されている。杉江氏が昭和十七年刊行の『びいどろ』に記しておられるところによると(第八表)、江戸時代にダイヤモンドで彫ったガラスを特に「ギヤマン彫りのビードロ」と称していたとのことであるが、この「ギヤマン彫りのビードロ」という用語の出所などについては言及されておらず、しかも前年刊行の『ガラスと生活』では「ビードロのギヤマン彫り」(第八表)と記されていることから推して、こうした用例が果してあったのか疑わしい。また「カットグラス」が「カット」になったこととの類比において、「ギヤマン彫りのビードロ」が「ギヤマン彫り」になり、更に「ギヤマン」となったと述べておられるが、この点について特に資料によって証しようとはされていない。そして更にこのギヤマンが「今一層転じて」『ガラスの研究』では「次第に変転して彫刻の有無に拘らず」高級優良なビードロを意味するようになったということであるが、その時期・経緯などについては全く触れられていない。特に「        」内の表現では彫刻のある硝子としてのギヤマンが、そのない硝子としてのギヤマンへ除々に移行したように受けとれるが、そのことを示す資料の提示もなく、果してそうであったのか検討を要する問題である。また「高級優良のビードロ」とは常識的に考えれば、無色透明で細工にもすぐれたガラス器のことであろうが、文化初年以前にわが国で製造されていたガラス器はギヤマン彫りが施されたものであっても黄緑色・黄色を帯びていて、決して無色透明なものではなかったことも心に留めておく必要がある。なお杉江氏のギヤマン彫りについての説明は曖昧で、これは恐らく杉江氏がギヤマン彫りを見る機会に恵まれなかったためであろうかと思われる。

④は江戸時代に切子ガラスがギヤマンと称されたが、何時とはなしに切子ガラス以外のガラスもギヤマンと呼ばれるよ

うになったとの説である。しかしながら、この説の最初の前提、切子ガラスがギヤマンと称されていたという点が先ず第一に疑わしい(次節の「第七段階について」を参照)。

⑤はギヤマンがディアマント・カット(菱形のカット)を施したガラス器を指したことからの説であるが、寛政頃から文政頃については「長崎名勝図絵」その他にみられる用例との関係から肯定し難であろう。しかし幕末の長崎で、もし切子ガラスのことをギヤマンと称するようになったとすると、その契機を説明し得る説の一つとして検討に値するものといえよう。

新村出氏は「語源の研究は、得て推察に流れ易い。是は外来語の研究に於ては、殊に心しなければならぬ」と述べておられるが、<sup>(74)</sup>語義変化についても同様のことが指摘されるであろう。しかしながら従来<sup>(74)</sup>の諸説は一部のものを除いていずれも資料によって自説を裏付けようとするところに欠けているように見受けられるのである。

#### 註

- (1) 大槻文彦『言海』(吉川半七、明治二十九年、第十版)、二六一頁。
- (2) 大槻文彦『大言海』第三卷(富山房、昭和十五年、第九十三版)、四四七頁。
- (3) 石井民司(研究室)『少年工芸文庫』第六編『硝子の巻』(博文館、明治三十九年、第三版)、一四頁。びいどろ史料庫蔵。
- (4) 横井時冬『芸窓襍載』(明治書院、明治三十七年)、三六一頁、国立国会図書館蔵〔45-334〕。
- (5) 上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』第一卷(富山房・金港堂書籍、大正四年)、一一六六頁。神戸市立中央図書館蔵〔813-6〕。
- (6) 大日本窯業協会『日本近世窯業史』第四編『硝子工業』(大日本窯業協会、大正六年)、四頁。
- (7) 三田村玄竜(鳶魚)「びいどろ昔譚」(『鳶魚隨筆』、春陽堂、大正十四年)、四三五頁・四四二頁。国立国会図書館蔵〔536-84〕。
- (8) 朝倉亀三(無声)「見世物研究」(春陽堂、昭和三年)、二四三―二四四頁。

- (9) 新村出「日本辞書の現実と理想」(『新村出全集』第二卷、浜田敦編、筑摩書房、昭和四十七年)、二九六頁。
- (10) 新村出「外来語の本源と経路」(前掲『新村出全集』第三卷、阪倉篤義編、昭和四十七年)、一九五頁。
- (11) 新村出「外来語の話」(前掲『新村出全集』第三卷)、一〇九頁。
- (12) 新村出「広辞苑」(岩波書店、昭和四十二年、第一版第二十五刷)、五三二頁。
- (13) 林源吉「ビイドロ細工と長崎」(『長崎談叢』第十三輯、昭和八年)、八三頁。
- (14) 渡辺庫輔「昭和版長崎みやげ」(昭和版長崎土産刊行会、昭和八年)、二六六頁。
- (15) 岡村千曳「硝子雑攷」(『中央公論』第四十九年第九号、通卷五百六十一号、中央公論社、昭和九年八月)、二五六―二五七頁。大阪府立中之島図書館蔵〔審316〕。
- (16) 岡村千曳「日本硝子考」(『茶わん』第七卷第八号、宝雲舎、昭和十二年八月)、二〇頁。びいどろ史料庫蔵。
- (17) 下中弥三郎「大辞典」第七・八卷(平凡社、昭和二十八年、縮刷第一刷)、第八卷、一六頁。
- (18) 和田健次「事物起源辞典」(京文社書店、昭和十一年)、一七三―一七四頁。
- (19) 杉江重誠「ガラスと生活」科学新書6(河出書房、昭和十六年)、二〇頁。
- (20) 杉江重誠「びいどろ」(甲鳥書林、昭和十七年)、五八―五九頁。
- (21) 杉江重誠「ガラスの研究」(甲文社、昭和二十四年)、三三頁。
- (22) 杉江重誠「日本ガラス工業史」(日本ガラス工業史編集委員会、昭和二十五年)、一〇五頁。
- (23) 前田勇「続硝子談義」(前田勇「国語思想併諸腰弁当」錦城出版社、昭和十八年)、二一八頁。
- (24) 前田勇「江戸語大辞典」(講談社、昭和四十九年)、三一―五頁。
- (25) 荒川惣兵衛「外来語概説」(三省堂、昭和十八年)、一八六頁。
- (26) 金田一京助「辞海」(三省堂、昭和四十九年、新装版)、四五―八頁。
- (27) 榎垣実「日本外来語の研究」(研究社出版、昭和四十八年、再版)、六三頁。
- (28) 榎垣実「外来語辞典」(東京堂出版、昭和四十一年、再版)、一二五頁。

- (29) 西尾実・岩淵悦太郎『岩波国語辞典』(岩波書店、一九六三年)、二二八頁。
- (30) 角川書店『國語俳句大歳時記』夏(角川書店、昭和四十二年、再版)、一九七頁。
- (31) 棚橋淳二「近世日本におけるガラス製造法の発展とその限界」(一)『研究紀要』第八号、松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会、昭和四十一年、二二三頁(縦組)。
- (32) 棚橋淳二、前掲論文(二)〔前掲「研究紀要」第九号、昭和四十二年〕、二八六―二八七頁(縦組)。
- (33) 棚橋淳二「日本のガラス―ぎやまん形り―」(『セラミックス』第七巻第十号、窯業協会、昭和四十七年十月)、八〇二頁。
- (34) 棚橋淳二「『和硝子製作編并附録』について」I (Glass, 1. ガラス工芸研究会、昭和五十年)、六頁。
- (35) 棚橋淳二、前掲論文Ⅱ〔前掲 Glass, 2. 昭和五十一年〕、四頁。
- (36) 棚橋淳二「江戸時代のガラス」(由水常雄・棚橋淳二「東洋のガラス―中国・朝鮮・日本」三彩社、昭和五十二年)、一七三頁。
- (37) 新外来語研究会(二階堂哲雄)『改訂増補外来語辞典』(日東書院、昭和五十二年)、一〇四頁。「緒論」の註(四)参照。
- (38) 石綿敏雄「ぎやまんとびいどろ」△「語源をたずねて―外来語(1)」▽(日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』附録、「ことばのまど」1、小学館、昭和四十七年十二月)、四頁。
- (39) 加藤孝次『江戸期のガラス』(徳間書店、昭和四十七年)、二二九頁。
- (40) 加藤孝次『明治大正のガラス』(光芸出版、昭和五十一年)、一六七頁。
- (41) 時枝誠記・吉田精一『角川国語中辞典』(角川書店、昭和四十八年)、五二二頁。
- (42) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第六卷(小学館、昭和四十八年)、七一―七二頁。
- (43) 沢野久雄「びいどろ・ぎやまん」平凡社ギャラリー16(平凡社、昭和四十九年)、表紙裏、二頁・五頁。
- (44) 沢野久雄「九州路に古い硝子を求めて」(今井建一郎「ぎやまん・クリスタル・美の世界」学習研究社、昭和五十二年)、二九頁。
- (45) 寺本界雄「長崎本・南蛮紅毛事典」(形象社、昭和四十九年)、五七頁。
- (46) 岩淵悦太郎「語源のたのしみ」(一)(毎日新聞社、昭和五十年)、一四頁。
- (47) 由水常雄「ガラス用語解説」I〔前掲 Glass, 1.〕、三三頁。

(48) 由水常雄「ガラス用語事典」(前掲「きやまん・クリスタル・美の世界」)、一七二頁。

(49) 佐藤潤四郎「ガラスの旅」(芸艸堂、一九七六年)、二六四—二六五頁。

(50) 佐藤潤四郎「ガラス百華事典」(「JPO」ガラス)読売新聞社、昭和五十二年)、七八頁。

(51) 三省堂編修所「コンサイス外来語辞典」(三省堂、昭和五十一年、第二版第三刷)、一七五頁。

(52) 久松潜一・佐藤謙三「角川古語辞典」(角川書店、昭和五十一年)、三五六頁。

(53) 藪崎昭「明治大正ガラス百八十三器」(矢来書院、昭和五十一年)、一七一頁。

(54) 川添利男「長崎びいどろ——南蛮ガラス製法伝来四〇〇年記念——」(昭和堂印刷出版事業部、昭和五十二年)、二七—二八頁。

(55) 日本放送協会「文化シリーズ・歴史と文明・ガラスの文化史4・きやまん郷愁」(昭和五十二年三月十日放映)。

(56) 遠藤美智子「日本における「近世吹きガラス」の研究——その発生をめぐって——」稿本、昭和五十三年成、二四頁。遠藤美智子氏蔵。

(57) 岡美千雄「常用外来語新辞典」(梧桐書院、昭和五十三年)、一〇五頁。

(58) 金田一春彦・池田弥三郎「学研国語大辞典」(学習研究社、昭和五十三年)、四六五頁。

(59) 関忠夫・吉田丈夫・前田泰次・栄久庵憲司・吉村元雄「玉・ガラス」カラー日本の工芸9(淡交社、昭和五十三年)、五二—五三頁。

(60) 林京子「ギヤマン ビードロ」(講談社、昭和五十三年)、六〇頁。

(61) 山本世霽(亡羊)「本草綱目釈義」(「古事類苑」50「植物部2・金石部」)吉川弘文館、昭和四十六年)、三三三頁。

(62) 松平定信「退閑雜記」卷之一(国民図書「日本隨筆全集」第十四卷、国民図書、昭和三年)、一六一頁。

(63) 志賀忍(理齋)「理齋隨筆」卷之一(前掲「日本隨筆全集」第十二卷、昭和四年)、一七九頁。

(64) 異国での見聞については以下の記録がある。大槻茂質(玄沢)・志村弘強「環海異聞」石井研堂校訂・宮崎栄一編(叢文社、昭和五十一年)、一八九—一九〇頁。

板硝子<sup>いたがらす</sup>を切るには、水晶の如き玉石にて筋を位置たちきるなり、名は不覚、

按に、我国にていふ「ギヤマン」か正名は「シヤマント」なり大光曰、オロシヤにて「ギヤマン」を「ピリアシン」と云よし、桂川国瑞(甫周)「北極聞略」寛政六年成、亀井高孝編(三秀舎、昭和十二年)、二四八—二四九頁。

さて両頭をきりはなし竹筒の如くなりたるに、山塩にて正中に堅に条をひき、小き窯に条を上にしてならべ、しばらく火を焚、やゝあたまりたる頃窯の内にいり、初の条の通りに再び塩をぬり、窯の口をふさぎ、火をつよく焚は、条の所より破れて左右にひらき、のびて版となるなり。

- (65) 三田村玄竜(鳶魚)、前掲書、四四二頁。「国書総目録」第六卷(岩波書店、昭和四十四年)、五〇八頁には、「後見草」について亀岡宗山(上巻)・杉田玄白(中・下巻)によるものだけが記載されており、他の著者による同名の書は見あたらない。上記の「後見草」は「燕石十種」第一(国書刊行会、明治四十年)および「改定史籍集覽」第十七冊(近藤出版部、明治四十五年、三版)に収録されており、問題の安永九年の条はそれぞれ四三〇頁、六八五―六八六頁にみられるが、いずれも三田村氏所引の記事は見当たらない。なお振仮名について写本、駒井乗郵編『篤宿雜記』卷七十八(国立国会図書館蔵〔Z389.1〕)所収の「後見草」(但し中・下巻は天明四年末以降の記事抜萃)を一覧したが、全般に振仮名は付けられていなかった。したがって、上記の引用文、特に硝子に付されたキヤマンという振仮名については確認し得ない状態であるが、ここでは一応三田村氏の引用に従って論を進めておく。他日修正が必要になるかも知れぬことを予め断っておきたい。

- (66) 「硝子贖大燈籠」の引札。「鶴物画譜」一、十ウー十一オ。縦四七・一(櫃部四〇・五(櫃)、横三五・四(櫃)(櫃部三一・〇(櫃))。朝倉龜三(無声)旧蔵。東洋文庫蔵〔華三、Ha. 316〕。

芸能史研究会『日本庶民文化史料集成』第八卷、「寄席・見世物」(三一書房、一九七六年)、五五四頁。

小野武雄「見世物風俗図誌」(展望社、昭和五十二年)、三四〇頁。

- (67) 棚橋淳二「日本のガラス―見世物―」(前掲「セラミックス」第七巻第五号、昭和四十七年五月)、三五二頁、V2図。引札の口上には

然ルニ御当地御繁栄ニ付去ル御虫鼠且那樣方ニ被仰下候ハ硝子細工花物奉入御覽候ハ御意ニ相叶候哉与任御仰ニ色々工夫仕折柄幸長寄表ヨリ名人之者罷越候ニ付……(後略)……

と記されている。

- (68) 新村出、前掲「広辞苑」五七一頁。

(69) 新村出、前掲『広辞苑』五六七頁。

(70) 新村出、前掲『広辞苑』四一六頁。

(71) 新村出、前掲『広辞苑』五六七頁。

(72) 初世並木五瓶『韓人漢文手管始』浦山政雄・松崎仁校注（『日本古典文学大系』53「歌舞伎脚本集」上、岩波書店、昭和三十五年）、四二五頁。

(73) 志田垣与助『増補改正難波丸綱目』版本、延享四年凡例、下之二、七十八オ。京都大学附属図書館蔵〔5-83、ナ、6；No30835〕。

(74) 新村出、前掲『日本辞書の現実と理想』二九四頁。

## 六 ギヤマンの語義変化についての私見

初めてギヤマンという語がわが国に伝えられた年代、その時の状況などについてはすべて推測の域をでないのここでは扱わない。したがってギヤマンという語が文献に初出の時期以降を対象に、以下の七段階に分けてギヤマンの語義変化を扱っていきたい。なお便宜上、諸書にみられるジアマン(テ)・デヤマン・ギヤマン(テ)などの語は引用文中を除き、すべてギヤマンと記すことにする。

第一段階 音訳されているだけで、時として金剛石の類と考えられることはあっても、金剛石についての知識が必ずしも明確でなかったためか、実際には極めて堅硬な石に当てられた。『ぎやどんかどる』<sup>(1)</sup>〔慶長四年（一五九九）刊〕以降『昆陽漫録』<sup>(2)</sup>〔宝暦十三年（一七六三）成〕

第二段階 金剛石もしくは金剛石の類と考えられてはいるものの、金剛石と金剛しよう（金剛砂）とが混同され、実際には柘榴石に当てられ、あるいは当てられる結果となった。『和漢三才図会』<sup>(3)</sup>〔正徳二年（一七二二）序〕以降『諸国石話』

雲根志<sup>(4)</sup>三編〔享和元年（一八〇一）刊〕

第三段階 ダイヤモンドに当てられた。『物類品隲』<sup>(5)</sup>〔宝暦十三年（一七六三）刊〕以降幕末

第四段階 ギヤマン彫りの省略形として、ダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングおよびクラヴィールのある硝

子に当てられた。『潮上右話雲根志』<sup>(6)</sup>前編〔安永二年（一七七三）刊〕以降『長崎名勝図絵』<sup>(7)</sup>〔文政初年（一八一八）成〕

第五段階 長崎はともかくとして大坂・江戸などの地において舶載のガラスに代表される透明・潔白かつ堅硬な硝子に

当てられた。『武江年表』<sup>(8)</sup>〔文化年間（一八〇四—一八一八）記事〕以降

第六段階 硝子という語と同様、ガラスに当てられた。箱書〔文政十三年（一八三〇）書〕以降

第七段階 切子のガラスに当てられた。『外来語の本源と経路』<sup>(9)</sup>〔昭和八年（一九三三）成〕以降

第一・第二・第三段階に相当する部分については既に述べたので、ここでは第四段階以降について論じてみたい。

第四段階について

ギヤマン彫りという語の古い用例としては宝暦五年（一七五五）開版の『地獄楽日記』にみられる

ぎやまん彫のこつぶは水晶ちやと見る者もあらうが、

を挙げる<sup>(10)</sup>ことができよう。但し当時の和産のガラスは無色といっても黄緑色・黄色などを帯びていたので、<sup>(11)</sup>このギヤマン

彫りのコップは舶載の品であることが明らかであろう。

さて既に述べたように『潮上右話雲根志』前編の「ギヤマン」の条には、<sup>(12)</sup>ギヤマンは石の名ではなく、硬い物にほそく彫

ったものをギヤマン彫りというとの説があると述べられているので、やゝ不明確さはあるものの、「ギヤマン」が「ギヤ

マン彫り」という語の省略形として用いられていたと推測してよいであろう。また寛政元年（一七八九）初演の歌舞伎脚本

「かんじんかんちたてのはじまり韓人漢文手管始」には、<sup>(13)</sup>

大字「模様は五三の桐流し、ぎやまん彫の此筭。」

……(中略)……

大字「五三の桐は今木が定紋。それを殿が拝領せしぎやまんの此筭。……(略)……。」

とあって「ぎやまん彫の此筭」が後の台詞では「ぎやまんの此筭」と省略された形で示されており、かなり確かな例証といえるであろう。なお『本草綱目釈義』にはオランダ人がフラスコに毛彫りをするのにギヤマン石で彫ったという理由で、毛彫りのあるフラスコをギヤマンという<sup>(14)</sup>と記されており、ギヤマン石で彫ったという毛彫りのある器物とギヤマンという語との関係が更に明らかにされている。このような彫りのある硝子を特にギヤマンと称していたことを示す資料としてはこの他に『長崎名勝図絵』(「文政初年(一八一八)成」)があり、同書には「硝子」とは別に「ギヤマン」の条があつて、そこに

櫛笄コップの類硝子の諸器に草花を彫ものす蛮国の伝へなり

と記されている。<sup>(15)</sup>ギヤマンの説明として「硝子の諸器に草花を彫ものす」と記されていることは、とりもなほさずこうした彫りもののあるガラス器がギヤマンと称されていたことを示すものであろう。

ところで文政二年(一八一九)七月東両国広小路において行われた見世物興行について、『遊歴雜記』には<sup>(16)</sup>

只よく両国にて流行しは硝子の紅毛舟の水からくりと、ギヤマン細工の大燈籠なりけり

と記されている。『遊歴雜記』において硝子・ギヤマンとその呼び方が長崎流に区別され、この大燈籠の方が特にギヤマンと称されたのは、この見世物のために配られた引札のうち、硝子の紅毛舟の方には「びいどろ細工おらんだ船」<sup>(17)</sup>ギヤ

マン細工の大燈籠の方には「硝子質大燈籠」(第十三図)と記されたことによると思われるが、もとはといえは大燈籠の下方周囲に取り付けられ、また最下部に吊り下げられた飾り玉にギヤマン彫りらしいものが施されていたためではなからうか。<sup>(18)</sup>

ただ、ここでや、疑問に思われるのは「硝子質大燈籠」と質の字がギヤマンに付けられている点である。上述のようにギヤマンがギヤマン彫りのこととすると、「ギヤマンまがい」は「ギヤマン彫りのまがい」ということになるであろう。もしそうだとすると、ギヤマンまがいは何らかの方法によって、例えば砥石・鑪などによってガラスの表面を磨って部分的に不透明にするといった方法で、ギヤマン彫りに似せた効果をだしたものをいったのではなからうか。このようにギヤマンに「まがい」が付けられた例は他にもみられ、例えば『学通三客』<sup>(19)</sup>〔寛政二年(一七九〇)刊〕には

何か匂ひのいひひかるくすりを、唐木やでかつたぎやまんまがひの肉入にいれ、浅黄羽二重で包み桐の箱へいれ、と記されている。但しこの場合ギヤマンがギヤマン彫りを意味しているのか、第五段階の舶載品に代表されるようなガラスを意味しているのか明らかでなく、したがって、「ぎやまんまがひ」が大燈籠の場合と同じくギヤマン彫りのまがいと考えてよいかどうかも定かではない。いずれにしてもこれらの「ギヤマンまがい」についてはなお追考を要するであろう。

#### 第五段階について

ギヤマンがギヤマン彫りを意味する語としてではなく、舶載品に代表されるような無色透明で堅硬な硝子を意味する語として用いられたことを示すには、ギヤマンが加飾技術または加飾された品を表す語ではなく、材料に関する語であり、しかも並の硝子とは質的に異なるものを表す語であることを明らかにせねばならぬであろう。

文化初年前に、わが国で製造されていたガラスは水晶のように無色透明ではなく、多少とも黄緑色・黄色などを帯びたものであったことは、例えば文化三年（一八〇六）に刊行された『嗚乎矣草』<sup>(20)</sup>に

日本製の目鏡は自然に青み有てよろし

と記されていることによっても窺い知ることができよう。したがって当時オランダ船によりもたらされた水晶のよ

うに無色透明な硝子は大いに賞揚された模様で、文化二年（一八〇五）に歿した橘南谿の著『北窓瑣談』には<sup>(21)</sup>

硝子玉の潔白にて、真の水精のごとくなるは、此四五十年許此かた、おらんだく紅毛国にて新に造り初たる物にて、日本にて器物

にもてはやすも、沢山なるは近年の事なり。唐土<sup>たうど</sup>にても日本にても、いまだ白色の硝子玉は造ること能はず。

と記されている。こうした状況のもとで、わが国でも水晶のように無色透明な硝子を製造しようとする動きが現れたとしても蓋し当然のことと思われる。

さて『武江年表』の宝曆（一七五一—一七六四）年間記事の条には硝子について<sup>(22)</sup>

近頃東都に其職人多く出来て、万の器を製し、活業とする者あまたあり、

と述べられており、それより四、五十年を経た文化（一八〇四—一八一八）年間記事の条には<sup>(23)</sup>

ギヤマンの諸器物を製し始む、其製舶来のものにかはず、

と記されている。宝曆以降江戸において硝子の「万の器」が作られているのに、改めてギヤマンの「諸器物」を製し始めたと記すには、当然それなりの理由がある筈であり、硝子とギヤマンとは明らかに異なる物であることが知られよう。

ところで大槻茂質（玄沢）の『蘭訳梯航』〔文化十三年（一八一六）成〕には次の記述がみられる。<sup>(24)</sup>

硝子ノ造法ハ旧伝アリトイヘドモ皆假法ナリ近時其真法ヲ彼書ニ得テ城西官園ニ於テ始テ新製アリ硝子モト玲瓏光徹ナ

リトイヘドモ徒ニ玩弄ノ具トナスベキモノニアラズ壺餅ニ作り物ヲ貯ヘ固封スルトキハ久キニ耐ヘテ其本性ヲ存シ諸薬品ノ風化スベキ香気アルモノニテモ能ク久遠ニ伝フベシ是レ硝子ノ本徳ナリト彼書ニ説ケリ從來和製ニ成ル所ノモノハ其用ニ当ラズ今眞法ヲ以テ造レル物ハ実ニ舶来ノ物ヲ欺ク然レバ右ノ諸鏡ノ如キモ新製硝子ノ其用ニ充ツベキ者巧ミ出セル事アルベシ

文化七年（一八一〇）馬場貞由は「西洋硝子製造法ヲ彼書中ニ索メテ訳呈スベキノ命」を奉じ、ボイスの『術芸全書』、ケレルクの『物産書』、シヨメルの辞書の各書所載のガラスの項を訳出し『硝子製法集説』（一名『琉璃宝鑑』）を著した。この書の稿本が曾て大槻家にあつたことは明らかで、「近時其眞法ヲ彼書ニ得テ」と記しているのは、玄沢がこの辺の事情をよく知っていたからであろう。さて、上記の如く『蘭訳梯航』においては、ガラスの特性として

① 玲瓏光徹なること

② 器としたとき薬品等を久しく貯え得ること

が挙げられ、特に②に重点がおかれ話が進められているが、この時製造された新製硝子は②の特性を充分に備えた「舶来ノ物ヲ欺ク」ようなものであつたという。しかもその製法が従来の「旧伝」によるものではなく、「眞法」、即ち恐らく上記『硝子製法集説』所載の製法によるものと推定されることから、新製硝子は薬品に対する耐久性をもっていたというだけでなく無色透明のものであつたと推測されるのである。この新製硝子と「武江年表」にいうギヤマンとを直ちに結びつけることはできないかも知れぬが、年代的に一致している点は大いに注目される。因に『硝子製法集説』には通常の硝子の他に原料に硼砂を加えて製する水晶のように潔白な、或いは硬質な硝子の製法が記されている（第九表参照）。

花井一好の著『和硝子製作編』（文政十二年（一八二九）序）・『和硝子製作編附録』（文政十三年（一八三〇）附言）・『金

	ポイス (E. Buys)	シヨメル (M. N. Chomel)			
	「堅硬ナル」硝子 <sup>(26)</sup>	「製水晶硝子法」 <sup>(27)</sup>		「潔白ノ水晶硝子」	
		第一法	第三法	簡法 <sup>(28)</sup>	「上品ナル」硝子の法 <sup>(29)</sup>
ヘネシア産ノ硝子 白砂・火石 硼砂 草石 礬石	8 錢 32	3 分 1	3 分 ½ 2 ½ ¼	4 分 1 ½	3 分 ¼ 2
硝子 SiO <sub>2</sub> B <sub>2</sub> O <sub>3</sub> As <sub>2</sub> O <sub>3</sub> Na <sub>2</sub> O K <sub>2</sub> O	20.0% 55.4 24.6	65.4% 15.1 19.5	62.7% 7.2 1.3 9.3 19.4	76.4% 13.2 5.9 4.5	71.8% 4.1 1.8 22.2

第九表 「硝子製法集説」所載の硼砂を用いたガラスの調合・組成。硼砂は Na<sub>2</sub>B<sub>4</sub>O<sub>7</sub>、草塩は Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> (30)、礬石は As<sub>4</sub>O<sub>6</sub> (31)と仮定して計算した。

- 「硝子製造法」(天保三年(一八三三)附言)は江戸時代のガラス製造の実体を知る上で極めて重要な書である。いまこれらの書から、ギヤマンに関する部分を要約し以下に示すことにする。なお当時一般に行われていた硝子の製法は、まず鉛を熔かし、これに石粉を混ぜて粉状のものとし、更に硝石を混ぜてから強熱して融解するというもので、多少青味(青竹色)・黄緑色・黄色を帯びており、ギヤマンの製法とは原料・融解手順とも大いに異なる点に留意すべきであろう。
- 「和硝子製作編」の内、第十二「色消硝子の法」<sup>(32)</sup>
- ① 色消硝子の法とは近頃俗にいうギヤマンの法である。
  - ② 色消には椿・榎の灰、又は(紫)呉斯を用いる。
  - ③ 簪・筭などを作る。
  - ④ 原料および調合は第十表①②の通り。
- 同書の内、第十三「和製義屋満の法」<sup>(34)</sup>
- ① 今流行している偽製のギヤマンは和製ギヤマンの法で造る。
  - ② 酒辺の器、簪・筭を作る。

	色消硝子(義屋満)の法		和製義屋満の法		色消硝子ノ法	義屋満ノ法	
	① ⑬	⑭ ⑮	① ⑩	② ⑪	⑮	⑲	⑳
白硝子		70銭				1000目**	
石粉	1000銭	1000	1000銭	1000銭	1000目		1200目
金公					1000		
鉛粉	350						
金膠	300	160	600	800		200	300
消石	450	800	350	350	1000	100	150
白礬						10	30
蕨灰						10	
灰汁塩							200
画焼青	0.15				少量*		
紫呉須		5					
白硝子		4.4%				79.7%	
SiO <sub>2</sub>	55.2%	62.2	56.7%	50.9%	39.3%		70.1%
B <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	11.5	6.9	23.6	28.2		11.0	12.1
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>						0.1	0.2
MnO		0.3					
CoO	0.008						
PbO	16.7				42.4		
Na <sub>2</sub> O	5.1	3.1	10.5	12.6		4.9	5.4
K <sub>2</sub> O	11.6	23.2	9.2	8.3	18.3	4.3	12.2

第十表 「和硝子製作編」所載(丸中片仮名の分),「金剛硝子製造法」所載(丸中数字の分)の無色透明なクリスタル・ガラス(色消硝子・ギヤマン・和製ギヤマン)の調合・組成。金公は鉛。鉛粉(鉛白)は $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$ , 金膠(硼砂)は $\text{Na}_2\text{B}_4\text{O}_7$ , 白礬(明礬)は $\text{KAl}(\text{SO}_4)_2 \cdot 12\text{H}_2\text{O}$ (40), 蕨灰・灰汁塩は $\text{K}_2\text{CO}_3$ と仮定して計算した。MnO, CoOの百分率は紫呉須・画焼青の含有する水分に応じて,表に示した値の約75~97%の値となり,CoOについては更にその減少値の1.5~1.7%程度の値となる(41)。\*樗灰・椿灰・蕨灰でもよい。\*\*鉛を多く含まぬもの。

- ③ 色は白いが、破れ易い。
- ④ 原料および調合は第十表①の通り。
- ⑤ 三原料をすべて混合してから融解する。
- 「和硝子製作編附録」の内、附第一「色消硝子の事」<sup>(65)</sup>
- ① 近頃は和製ギヤマンの簪・筭が流行している。
- ② 悪い商人が普通の和硝子(石粉・鉛・硝石を原料とする)に手を加えて偽製し、ギヤマンと称して売っている。
- ③ これを求める側は偽のギヤマンを青味があるとか、更に細かい点では鉛がはいっ

ているため重いと称して、これを見分けている。

④また軽くて潔白のものが良いギヤマンであるという。

⑤西洋では色消の硝子を造るのに鉛をすこしも用いないため、軽くて潔白である。

⑥我国にも色消の上好・純白・透明な硝子を作るにたる種葉を産する。

「金剛硝子製造法」の内、第四「和硝子ノ分量 十一方」<sup>(96)</sup>

①和製義屋満の二方の原料および調合は第十表<sup>(97)</sup>⑩⑪の通り。

同書の内、第五「色消硝子 三方」<sup>(97)</sup>

①色消硝子の三方の内、始めの二方の原料および調合は第十表<sup>(98)</sup>⑬⑭の通り。

②後の一方は、普通の和硝子と同じ主原料であるが、これに消色剤を加えている。その原料および調合は第十表<sup>(98)</sup>⑮の通り。

同書の内、第十一「義屋満ノ方」<sup>(99)</sup>

①原料および調合は第十表<sup>(99)</sup>⑳㉑の通り。

同書の内、第十五「義屋満ノ創製ノ支」<sup>(99)</sup>

①わが国で始めて硼砂を原料として上品な硝子を作つたのは嶋田杏寿惟親である。

②現在硼砂を原料として硝子を製造している者は皆、杏寿の法に倣っている。

③江戸芝神明宮前の小山弥兵衛は上好の硝子を造ることでも有名である。

④小山の造る硝子は白色透明で美しいが、高価であり、また薬物の精煉に耐えられないとのことである。

以上の諸点から和製のギヤマンの特徴として

①無色透明であること。

②手にして重くないこと。

③多くの場合、原料として鉛の代りに硼砂が用いられていること。

④多くの場合、消色剤が添加されていること。

⑤薬品に対する耐久性、強度が低く、酒辺の器、簪・笄などの玩弄物しか作られていないこと。

が挙げられよう。ただ一般の人にとっては①に大きな関心があったに相違なく、水晶と見まがう簪・笄でなければ髪に差すに値いしないものとの風潮があったと思われる。

当時オランダ船によって、もたらされたガラス器は、西欧において一般的であったアルカリ石灰ガラスであれ、原料に鉛丹を用いた所謂鉛クリスタルガラスであれ、着色ガラス以外はほとんどすべて消色剤が用いられていて、その製品は無色透明であった。したがって、これらのものは当然ギヤマンと呼ばれるはずのものであり、それ故にこそわが国で製造されたギヤマンに対しては和製ギヤマン・偽製のギヤマンなどの用語も用いられたのであろう。かつて舶載されたガラス器の箱に、寅吹き・型吹き・切子の別なくギヤマンの文字が屢々みられるのはこのためであろう。

文政(一八一八—一八三〇)頃、江戸日本橋通塩町でガラスの製造販売の業を興した加賀屋久兵衛の引札を兼ねた包紙(第十四図)には「私義此度硝子ギヤマン類細工物相始」と口上が述べられ、多種多様なガラス製品の図とそれぞれの品名が示されている。いま硝子・ギヤマンの別という観点からこれを検討すると次のことが明らかになる。

①ほとんどの製品の図については硝子・ギヤマンの別が記してない。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十四図 江戸・加賀屋久兵衛の引札。杉江重誠『ガラス』共立社刊所載。[42]

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十五図 江戸・加賀屋久兵衛販売のギヤマン簾とその箱。びいどろ史料庫蔵  
〔No.1957.10〕。横山英俊氏撮影。

②製品の図に付された品名で、ギヤマンの文字が冠せられているのは「ギヤマン簾」だけである。

③左端中央枠内には「硝子髪差」と「ギヤマン髪差」と区別して記されている。

④カットを施した鉢・皿・計算はそれぞれ「切子鉢」「切子皿」「切子計算」と記されている。

以下これらの点について述べてみたい。

②について。第十五図は上記加賀屋で販売されていた「ギヤマン簾」とその箱で、箱に貼られた紅色の紙には「 <sup>き</sup>ま  <sup>や</sup>まん御すたれ」と書かれている。簾は水晶のように無色透明な鉛ガラスの捻り棒六十本および両端のやゝ扁平な棒を糸で編み列ねただけのもので、これらの棒には勿論ギヤマン石で彫刻した痕跡などは全くみられない。

③について。図の髪差四本のうち上の花形の飾りのついた一本および下の（本来の意味の）切子の飾りのついた一本に関しては、遺品として残るものに鼈甲色

のものが多くみられ、中二本に関しては、無色透明のものが多くように思われる。「硝子髪差」と「ギヤマン髪差」とが使い分けられているのは、例えばこうした理由によるのではなからうか。尤も加賀屋が販売していたことが確実な器物の遺品は極めて少なく、無色透明なガラスに「硝子云々」、着色ガラスに「ギヤマン云々」と箱書された遺品が今後発見されるやも知れず、現在のところ有力な証となし得ないのが遺憾である。

④について。この図でみる限りカットを施した器物は切子と称されていたようであり、この時代にこれをギヤマンとはいわなかったものと思われる。

信州松代藩の藩士佐久間象山は江戸神田お玉ヶ池に住んでいた弘化元年（一八四四）に黒川良庵に蘭字を学び、以後蘭書より諸技術に関する知識を摂取することに努め、かつ実際に試みるなどしていたようで、そのことは象山の書簡から窺い知ることができよう。

高田幾太宛、弘化二年（一八四五）三月二十日付書簡<sup>(44)</sup>

①例の硝子も近日煉立てて御覧に入れたい。

②江戸で普通ギヤマンなどと称しているものとは格別の相違があり、その質は堅剛である。

③したがって細工もし難い。

高田幾太宛、弘化二年五月四日付書簡<sup>(45)</sup>

①この度スランガという製薬用の器を試作したところ、小さい窯で火力が弱く泡は十分に切れなかったが、その質の美しいことは西洋でも最上の品に相当する。

藤岡甚右衛門宛、弘化二年五月二十八日付書簡<sup>(46)</sup>

① オランダの調合によるギヤマンを製した。

② 即ち蘭書に数十種の調合があり、その最良のものを数品を製した。

③ 硝酸・硫酸を貯えるには堅剛の質のものでないと、やがてひびわれて損じてしまう。蘭製のものはこちらを何年貯えておいても損じないが、その損じない方を製した。

④ 硝酸等をとるためのスランガを（このギヤマンで）作って試みたが別状なかった。普通の品ならば忽ち破れてしまうし、和製の処方ではたとえ堅種でも持たないことも試みてみた。

⑤ 国許の河原の黒い火打石はラテン語でクワルトスというもので、最上堅剛のギヤマンになるということが蘭書に記されている。

⑥ なおギヤマンの碎片四種を御覧に入れるので、焼いて試みられたい。火に当って早く丸くなるものは質が柔らかい証拠である。

象山は書簡中、単にガラスを意味する場合は「硝子」「ビードロ」の語を用い、堅硬な無色透明なガラスを意味する場合は「ギヤマン」の語を使用しているように筆者には思われる。

なおここで、当時の三都における買物案内・引札・貼札などから硝子およびギヤマンの文字を拾いだし第十一表に示した。買物案内・引札・貼札などにはガラス製品を製造乃至販売していた人々の意志が直接反映するはずであり、こうした人々が硝子およびギヤマンという語をどのように用いていたかをみれば、両者が別義の語であったことをある程度推測できるのではないだろうか。

第十一表 三都のガラス業者によるガラスの呼称一覧。

屋号・名	ガラスの呼称	出典
① 西村屋 久治郎	ひいどろ	大坂文藝二七九ウ
② 大和屋 新七	硝子細工品々	同 二〇一ウ
③ 楠木屋 新蔵	硝子細工色々	同 二〇一ウ
④ 明石屋 十兵衛	硝子細工所	同 二一四ウ
⑤ 玉屋 平三郎	硝子細工所	同 二〇一ウ
⑥ 阿波屋 弥七	硝子細工処	同 二一四ウ
⑦ 播磨屋 由兵衛	諸びいどろ細工	同 二一四ウ
⑧ 加賀屋 直七	ぎやまん	同 二一四ウ
⑨ ギ山 平七	ギヤマンるい	大坂天保三 七〇オ
⑩ 小野屋 弥兵衛	ギヤマンるい	大坂慶応三 二三オ
⑪ 阿波屋 弥七	ギヤマン物諸品仕入所	同 五六オ
⑫ 丹波屋 藤兵衛	ギヤマン細工所	同 五六ウ
⑬ 駒谷 新七	びいどろ卸 硝子類品々	同 五六ウ
⑭ 帝屋 仁兵衛	硝子卸所	引札(第十六図)
⑮ 玉屋 弥兵衛	ひいどろ色々卸	京都天保二 三〇ウ
⑯ 玉屋 勘兵衛	硝子類	同 二二四オ
⑰ 玉屋 清兵衛 <small>四条柳馬場西へ入町</small>	硝子(細工)	同 二二四ウ
⑱ 大坂屋 与兵衛	硝子細工所	同 二二四ウ
⑲ 清水屋 九文堂	ひいどろ鏡間屋	同 二二四ウ
⑳ 玉屋 清兵衛 <small>六角寺町角</small>	びいどろ色々おろし	同 二二五オ
㉑ 玉屋 吉兵衛	びいどろ	同 二二五オ
	ギヤマン細工	
	ギヤマン	
	ぎやまんさいく	

40	41	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	
柳屋 弥三郎	小山 清兵衛	玉屋 清兵衛	白木屋 定吉	大隅 源助	田中屋 平右衛門	田中屋 平右衛門	田川 吉兵衛	加賀屋 安太郎	加賀屋 久兵衛	加賀屋 久兵衛	伊勢屋 儀作	籬屋 弥助	大坂屋 方右衛門	千切屋 藤内	小山 弥兵衛	美濃屋 吉兵衛	山城屋 安兵衛	百千陸奥 大掾	
		硝子(細工品々)	硝子(細工品々)	硝子	硝子	硝子	硝子	硝子(問屋)・硝子玉盤・硝子玉類	硝子(問屋)・硝子髪差	硝子(問屋)・硝子髪差	硝子(問屋)・硝子髪差	硝子細工所	硝子細工所	硝子細工所	硝子細工所	硝子	硝子	硝子細工品々	
		ひいところ細工所・ひいところ絵入柱かけ	ひいところ細工所・ひいところ絵入柱かけ		硝子笄花かんざしるい品々						硝子細工・硝子板しなく・びいところかんざし品々・硝子玉しなく・硝子猪口品々・硝子文具品々								
ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所	ギヤマン御細工所
貼札(第二十一圖)	貼札(第二十一圖)	貼札(第十九圖)	貼札(第十九圖)	引札(第十八圖)	引札兼包紙(第十八圖)	引札兼包紙(第十八圖)	引札(十八)	引札兼包紙(明治初期) <sup>(47)</sup>	引札兼包紙(天保中期—嘉永頃) <sup>(47)</sup>	引札兼包紙(文政頃) <sup>(第十四圖)</sup>	引札(第十七圖)	同	同	同	同	同	同	同	同

\* 「出典」の欄の略号はそれぞれ下記の資料に対応する。

大坂文政二 土橋可教「商人買物独案内」文政二年序、文政三年刊、西尾市立図書館岩瀬文庫蔵〔34-21〕。

大坂天保三 「商人買物独案内」後編、天保三年刊、西尾市立図書館岩瀬文庫蔵〔34-22〕。

大坂慶応三 「商人買物独案内」慶応三年序、刊年不詳、大阪府立中之島図書館蔵〔大坂蔵、378-168；No.36789〕。

京都天保二 「京都買物独案内」天保二年刊、京都府総合資料館蔵〔990-23〕。

江戸文政七 中川五郎左衛門「江戸買物独案内」文政七年序、国立国会図書館蔵〔123-229〕。

\*資料中に例えば「硝子ギヤマン細工」もしくは「<sup>硝子</sup>ギヤマン細工」と記されている場合は、「ガラスの呼称」の欄でこれを「硝子（細工）」、「ギヤマン細工」と分けて記した。

\*大坂のガラス製造・販売業者についての詳細は棚橋淳二・井上暁子「住吉大社の「玉栄講」石燈籠」(Glass, 5, ガラス工芸研究会、昭和五十三年)、一六一―二四頁を参照。

第十一表より明らかのように、文政二年頃の大坂においては、ほとんどのガラス業者が「硝子」と記し、「ギヤマン」のみを記している者は一名に過ぎないが、慶応頃には大概両者を記している。また京都においては「硝子」が大勢を占め、江戸においては「硝子」がやや多いが、京都・江戸ともに両者を併記している者が数例ある。もしも「硝子」と「ギヤマン」とが全く同質のものならば、これら両者を併記することはあまり意味のないことであろう。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十六図 大坂・駒谷新七の引札。佐賀市・野中烏犀円本舗・野中萬太郎氏蔵。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.



第十七図 江戸・伊勢屋儀作の引札。浜松市立美術館蔵。菊地正氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第十八圖 江戸・田中屋平右エ門の引札。恵那郡岩村町・浅見専一郎氏蔵。西久保光成写真場撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.



第十九図 江戸・玉屋清兵衛の引札。横浜市・森田好學氏より恵与された電子式複写による印画。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十圖 江戸・柳屋弥三郎の貼札。  
奈良市・舛元和夫氏蔵。片野守正氏  
撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十一圖 江戸・小山清兵衛の貼  
札。米子市・中村陽介氏蔵。菊地  
正氏撮影。

さて、第十一表<sup>㉔</sup>には山城屋安兵衛の取扱品として「ギヤマン彫」「ギヤマン細工」がみられるが、この場合も両者が類似の加工品とは考え難く、従ってこのギヤマン細工の「ギヤマン」は工具ではなく、やはり材料を表す語と思われる。また<sup>㉕</sup>江戸下谷池之端仲町のギヤマン・びいどろ細工所玉屋清兵衛の引札（第十九図）には、「ギヤマン振出つば」「びいどろ絵入柱かけ」など取扱品目が二十ほど書き出されている中に、

ギヤマン切子物品々

と記されており、このことはギヤマンが材料を表す語であって、少なくとも切子即ちカットなどの加飾を表す語ではないことを物語っている。

更に箱の蓋表に墨書の紅い貼札のみられることから、あるいは加賀屋販売の品ではないかと推測される無色透明で花文のグラヴィールが施された徳利（第二十二図）に対して、この貼札には

きやまん  
彫模様御とくり

と記されている(第二十三図)。本来ならば「きやまん 模様御とくり」で意味が通じた筈のところ、わざわざ「彫」という字が加えられており、これはギヤマンという語から「ギヤマン彫り」という意味が既に全く欠落してしまっていたことを示す好例といえよう。

以上述べたところより、ギヤマンが長崎は一応別として、大坂・江戸などにおいて舶載品に代表されるような堅硬で無色透明、水晶のような硝子に対して特に用いられる語であったことがほぼ明らかになったであろう。ただ何時頃から舶載

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十二図 グラヴィール花文徳利。高さ 左 (A)27.9cm, 右(B)27.6cm。比重 左右共3.9。びいどろ史料庫蔵 [No.1972, 27A-B]。横山英俊氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十三図 同上の箱の蓋表の貼札。横山英俊氏撮影。

の無色透明な硝子をギヤマンと称するようになったかについては未だ明らかにし得ないが、以下の第二の用例から寛政頃ではないかと思われる。

#### 例一

秋収冬蔵(しゅうしゅうとうそう)(内新好(ないしんこう)の匿名カ——無声むせいの例言による)<sup>(50)</sup>が江戸本所一ッ目土堤側即ち弁天の遊女の手管を描いたという「学通三客」(寛政二年刊)にみられる「ぎやまんまがひの肉入」<sup>(51)</sup>のギヤマンまがいは地域性を考慮してギヤマン彫りのまがいではなく、和製の硝子による舶載ガラスのまがいと解することができぬであろうか。因に内新好は江戸帆綱屋の主人で、後に本所に住み俳諧宗匠となった人という。<sup>(52)</sup>但しこの場合ガラスの質に関して、まがい物を作るだけの技術があったか疑問が残る。

#### 例二

「寛政拾二年正月吉日仕入方直段扣帳」には時計屋治兵衛から仕入れた物品及びその代金が以下のように記されている。<sup>(53)</sup>

一 雪見障子

老奴四分かへ

繪代 百五十文かへ

一同絵入キヤマン。シカエ

式刃式分かへ

ここにいうギヤマンは雪見障子に嵌める板ガラスで、それも恐らく舶載のほとんど青味のないものであったと思われる。尤もこの繪代・絵入の繪は密陀繪と考えられるが、ギヤマン彫りによる繪である可能性が絶無というわけでもないで

あろう。したがって多少とも疑問の残るこの第二の用例だけから、舶載の無色透明のガラスをギヤマンと称するようになった時期を寛政頃まで引上げるとは、いささか無理であるかも知れず、より確実な証拠となりうる用例の発見が俟たれるのである。

#### 第六段階について

ギヤマンという語が無色透明なガラスの義だけでなく、硝子と同じ意味に用いられるようになったことを証するには、ギヤマン彫りが施されていない、しかも着色ガラス器にギヤマンの語が当てられている例を探すのが捷徑であろう。したがって例えば「青色ギヤマン簾」などの用例があれば、簾などにギヤマン彫りが行われることは先ずないから極めて好都合といえるが、現在のところまだ適切な例を見出し得ていない。

例一 文政六年（一八二三）五月下旬より東両国において、大坂の玉井武楽齋が太夫元となって興行したギヤマン船「大湊宝入船」の引札には「ギヤマン極彩色細工」と記されている。<sup>64)</sup> 恐らく数種の着色ガラスを用いた細工とは思われるものの、彩色の可能性がないわけではなく、確実性の高い例とはいえない。

例二 塚田泰三郎氏はその著「和時計」に「松浦竹四郎日記」より安政元年（一八五四）十一月魯艦から阿部伊勢守への献上物十件を引用しておられ、<sup>65)</sup> その中に「紫ギヤマン花生 鍍金也 一對」がみられる。

例三 「金城秘鑑」の補遺一卷は大槻文彦氏によるもので、この書中に次のように記されている。<sup>66)</sup>

後裔、明治二十七年、遠田郡小牛田山ノ神ノ祠官タリ、令史ガ、南蛮ニテ秘蔵セシ径七寸許ナル瑠璃色「ギヤマン」皿一枚ト、

この二つの例は無色でない硝子をもギヤマンと称したことまでは示し得るが、ギヤマン彫りが施されていたためにギヤ

マンと呼ばれたのか、ギヤマン彫りがないにも拘らずギヤマンと呼ばれたのかまでは明らかにし得ない。しかしながら当時のガラス器を納めた容器に記された箱書には、やや適切な例を見出すことができる。

例四 第二十四図

文政十三寅年五月

瑠理きやまん徳利

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十四図 「瑠理色きやまん徳利」の箱。高さ27.8cm。びいどろ史料庫蔵〔No.1966.5〕。横山英俊氏撮影。

既に中の徳利は失われているが、箱の内法(8.5cm×8.7cm×24.6cm)、年代より当時多く作られた宙吹きの色無文長頸爛徳利がはいっていたものと思われる。

例五 第二十五図

六番御長持入

五番

黄色キヤマン 祝御猪口

式拾人前

本田 洵姓

式箱之内

明治廿五年

辰八月買來

なお「キヤマン爛徳利」と記された貼紙のある箱に錫鉛と漆によって加飾した着色ガラスの爛徳利が納められている例は多数みられるが、この種の爛徳利には無色のものもあり、中身が入れ替っている恐れが皆無とはいえぬため例を挙げることは差控えた。

型吹き黄色竹文角形筒向(視)十箇が納められている。竹の文様は吹型によるもので、冷却後の加飾によるものではない。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十六図 同上の蓋裏。  
横山英俊氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十五図 「黄色キヤマン  
視御猪口」の箱。びいどろ  
史料庫蔵〔No.1970.9〕。  
横山英俊氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十七図 黄色竹文角形筒向(視)。高さ9.4cm。比重3.5。  
びいどろ史料庫蔵〔No.1970.9A〕。横山英俊氏撮影。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十八図 「蘭説弁惑」所載の「びいる・がらす」の図。『磐水存響』所載。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二十九図 「蘭説弁惑」所載の「そうとばつと」の図。『磐水存響』所載。

以上にあげた諸例を総合的にみて、ギヤマンが単にガラスを意味する語として用いられていたことは明らかであり、硝子とギヤマンの区別は遅くとも文政頃から一部で曖昧になり始めたものと思われる。

第七段階について。ギヤマンが切子を意味する語であることを実証することは極めて困難と思われる。なぜならば、厳密にいえば同じ質のガラスで作られた切子の器と、切子でない器について、同一人が切子の器をギヤマン、そうでない器をびいどろと使い分けている例を探しださなければならぬからである。しかしながらこのような事例はそう簡単に見出すことができないのではなからうか。それよりもむしろカットを施された器物が江戸時代にギヤマンではなく、切子と呼ばれていたことを示す方が容易であるように思われる。例えば「蘭説弁惑」〔天明八年（一七八八）序〕の「硝子諸器」に

は様々なガラス器の図が示され、簡単な説明が付けられているが、カットを施された「びいる・がらす」Bierglas の図(第二十八図)には、<sup>67)</sup>

形猪口のことし俗にきりこ手・金ふちなどよふものあり

と記され、同じくカットが施されたようにみえる「そうとばつと」Zout vat(ie) の図(第二十九図)には、<sup>68)</sup>

食盤の上におく硝子きりこ様<sup>で</sup>のしほ入なり

と説明されている。したがって当時このようなカット・グラスを表すのに、特にギヤマンという語が用いられたわけではなく、切子手(様)と称されていたことが知られるのである。

下って文政頃の加賀屋熊崎久兵衛の引札の場合は、カットが施された器の名に切子と付され、カットのない器の名にギヤマンの語が付けられているし(本節の「第五段階について」を参照)、上に述べた「硝子きりこ様のしほ入」、玉屋清兵衛の江戸時代後期頃と思われる引札にみられる「ギヤマン切子物品々」(本節の「第五段階について」を参照)の用例は、硝子の方はいうまでもないとして、ギヤマンも亦明らかに材料を表す語として用いられていたことを示すものといえよう。なお歌舞伎に脚色され、明治十三年に上演されたという『有松染相撲浴衣』<sup>ありまつぞめすもうゆかた</sup>四幕には

切子のふらそこを持ち出来り

とある由にて、<sup>69)</sup>「切子のふらそこ」はカットのあるフラスコ(酒瓶など)を意味するのであろうが、「この場合もギヤマンという語は用いられていない。以上述べたことを要約すると

①天明頃。カットの有無に拘らず硝子と称し、カットのあるものは切子手(様)という語で区別し、ギヤマンという語で区別していない。

②文政頃（江戸）。カットの有無に拘らず、恐らくガラスの質に依じて硝子又はギヤマンと称し、カットのあるものは硝子という語で区別している。

③文政頃（江戸）以降明治初期。カットの有無に拘らず硝子又はギヤマンと称し、カットのあるものは硝子という語で区別している。但しガラスの質に関心をもつ者の間では硝子とギヤマンの両語は使い分けられていたと思われる。

ただ上記のような事例をどれほど列挙したところで、カットのあるガラス器を硝子と称したことを示し得ても、カットのあるガラス器を特にギヤマンと呼ぶことが江戸時代を通じてなかったことを示す証とはなり得ないように思われる向きもあるかも知れない。しかしながら少なくとも現在までのところギヤマンが特に硝子を意味しているという用例は見出し得ていないし、またこの条の最初にも記したようにそう簡単には見出すことができないように思われるので、ここ暫らくはギヤマンが硝子であるとする説を無視しておいても差支えないのではなからうか。但し近代になってから江戸時代の実情を遡って説明するために硝子ガラス（カット・グラス）をギヤマン、そうでないガラスを硝子と使い分けている例があるし、<sup>(60)</sup>既述のようにギヤマンを硝子に当てて考えている人々がいることも事実であって（前節の④参照）、こうした意味でこの第七段階を設定することは当を得たことであると考える。

次に第四段階から第五段階への語義の変化、即ちギヤマン彫りの省略形としてのギヤマンが、舶載品に代表されるような硝子を表す語と考えられるに至った経緯について、一つの仮説を述べてみたい。この問題を考えていく場合、時間的な面だけでなく、空間的な面、即ち地域的な関係を考慮しなければ、正しい結論は得られないように思われる点をまず最初に指摘しておきたい。少なくとも長崎と三都を中心とする他の地域とに分けて考察する必要があるのではなからうか。但し三都においても長崎の事情に明るい者の所見は例外とすべきであらう。

さて『地獄楽日記』に「ぎやまん彫りのこつぶは水晶ぢやと見る者もあらうが」と記されているように、<sup>61</sup>宝暦頃わが国に舶載されていたギヤマン彫り（グラヴィールを含む）が施されているようなやや高級な西欧のガラス器は一般に無色透明であった。ところが当時わが国で製造されていたガラス器は、たとえギヤマン彫りのみられるものであっても黄緑色・黄色などを帯びていた。以上のことは当時の遺品について調べても、また先に引用した『北窓瑣談』の記述によっても確認されるであろう。

ギヤマン彫りのある器物が安永頃にギヤマンと略称されていたことは『潮上語雲根志』<sup>63</sup>にみられる通りであるが、長崎においてはギヤマンという語が文政頃も引き続きギヤマン彫りの意味で用いられていたことが『長崎名勝図絵』から知られるのである。<sup>64</sup>こうした状況のもとではギヤマン彫りという語が用いられることは少なかつたと思われるが、寛政頃までは併用されていたようである（『長崎歳時記』<sup>65</sup>）。なお文政以後の長崎においてギヤマンの語義がどのように変化したかについては未だ明らかになし得ていない。

ところが大坂においては寛政頃、舶載と思われる板ガラスに恐らく密陀絵によって絵付されたものを絵入ギヤマンと呼んでおり、また江戸においては文政頃ギヤマン彫りと何の関係もない水晶のように無色透明なガラスをギヤマンと称している。ギヤマンがこのように別の義に用いられたためか、江戸においては文政頃にもギヤマン彫りという語が依然として用いられており（『江戸買物独案内』<sup>66</sup>）、さらにやや年代は下るかも知れぬが、ギヤマンにギヤマン彫りの義が全く含まれぬことを示す用例まで見出すことができるのである（第二三三図）。

長崎において硝子と区別して用いられていたギヤマンという語が、ギヤマン（石）とは別のものを意味する語として三都を中心とする他の地域へ伝えられた寛政頃、これらの地域では混乱していたギヤマン（石）についての知識が漸く整理

されて、ギヤマン（石）は堅硬であることはいままでもないとして、金剛砂のような赤褐色不透明なものではなく、水晶のように無色透明で光沢があり、光輝くものとの認識が確立したばかりだったのではなからうか。そしてギヤマン（石）についてのこのような性質が念頭にあったために、ギヤマン彫りのある舶載のガラス器を手にした人々は、恐らくギヤマンがギヤマン彫りのある硝子のことであると気付かず、従来わが国で製造されていた比較的軟弱な、黄緑色・黄色を帯びた硝子とは異質の、即ち舶載の硝子に代表される堅硬な無色透明な硝子を比喩的に意味する語と解して、これを受け入れたのではないかと思われる。即ちこれらの地域では、ギヤマンはギヤマン（石）のような硝子と解されていたように思われる。なおここにいう堅硬とは単に硬度が高いということだけでなく、薬品に侵されないということも意味していたように、このことは佐久間象山の藤岡甚右衛門宛、弘化二年五月二十八日付書簡から察知されるし、また花井一好がこの種の舶載の硝子を金剛硝子と称していたことからも推知されよう。<sup>(68)</sup>

なお第四段階、または第五段階から第六段階への語義の変化というより、むしろギヤマンと硝子との語義の混乱が生じ、両者が同じ材料を表すようになった一因は、文政初年頃に三都を中心とする地域において配られた見世物の引札で、硝子にギヤマンと振仮名が付けられていたことにあるのではなからうか。

さて次に第四または第五段階から第七段階への語義の変化、即ちギヤマン彫りの省略形または舶載品に代表されるような硝子を意味するギヤマンが少くとも近代以降切子ガラスを表す語と考えられるに至った経緯について一つの仮説を提示しておきたい。

一般的にみて幕末頃舶載されたギヤマンの名にふさわしい無色透明な皿・鉢の類には、ほとんど切子が施されていて、しかもその容器に「ギヤマン云々」との箱書がなされている例が多い。したがって後年ギヤマンの意味が極めて曖昧にな

ってから、こうした切子のある皿・鉢こそ箱書にいうギヤマンなのであろうと錯誤したのではなからうか。こうした傾向は特に昭和になってからギヤマンの語源を考えようとした人々〔新村（昭和8）・渡辺（昭8）・岡村（昭9）・林源（昭11）〕を中心に強まったようにも思われる。

補 なお幕末の長崎において切子ガラスを特にギヤマンと称していた例が仮りにあるとすれば、長崎においてギヤマンがギヤマン彫り（グラヴィールをふくむ）を表す語として用いられているうちに、幕末頃、同じくガラス器に切り込みをいれていることから切子ガラスまでをも意味するようになったのかもしれない。あるいはその頃に由水氏のいわれるようにダイヤモンド・カットを施したガラス器の名がもとになって、ギヤマンが切子ガラスを意味するようになったとも考えられよう。

以上述べたギヤマンの語義変化の各段階についての考察はまだ十分なものではなく、新しい資料・用例の発見を俟って修正してゆかねばならないし、第四から第五段階への語義の変化、特に第四、また第五段階から第七段階への語義の変化についての仮説は、まだ作業仮説の域を脱せず、むしろ今後の調査・研究によって大いに検討されるべきものと思われる。

#### 註

- (1) 天理図書館編『きやどべかどる』上巻、きりしたん版集成3、影印版（天理大学出版部、昭和五十一年）、十九ウ。
- (2) 青木敦書（昆陽）『昆陽漫録』巻之二（日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』第十回、吉川弘文館、昭和三年）、四八四頁。
- (3) 寺島良安『和漢三才図会』版本、正徳二年序、巻第六十一、二十七ウ。びいどろ史料庫蔵。
- (4) 木内重暁（石亭）『諸国石話雲根志』三編、版本、享和元年刊、巻之四、九ウー十オ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-10〕。
- (5) 入田整三『平賀源内全集』上巻（荻原星文館、昭和十年）、三五―三六頁。
- (6) 木内重暁（石亭）『湖上石話雲根志』前編、版本、安永二年刊、巻之二、二十七オ。松蔭女子学院大学図書館蔵〔459-10〕。
- (7) 饒田喩義『長崎名勝図絵』首巻（長崎史談会、昭和六年）、二三頁。

(8) 斎藤幸成『武江年表』巻之七（江戸双書刊行会『江戸叢書』巻の十二、名著刊行会、昭和三十九年、二二〇頁）。

(9) 新村出『外来語の本源と経路』（『新村出全集』第三巻、阪倉篤義編、筑摩書房、昭和四十七年）、一九五頁。

(10) 自楽『地獄楽日記』巻五（古谷知新『滑稽文学全集』第七巻、文芸書院、大正七年）、一一五頁。

(11) 棚橋淳二『江戸時代のガラス』（由水常雄・棚橋淳二『東洋のガラス』三彩社、昭和五十二年）、一五九—一六〇頁。

(12) 木内重暁（石亭）、前掲『潮上石話雲根志』前編、巻之二、二十七オ。

(13) 初世並木五瓶『韓人漢文手管始』浦山政雄・松崎仁校注（『日本古典文学大系』53『歌舞伎脚本集』上、岩波書店、昭和三十五年）、四二五頁。

なお定紋を彫り込んだガラスの櫛・笄の遺品には次の例がある。

花柳章太郎『きもの・簪』（和敬書店、昭和二十四年）、一六四頁には

燦りと光る硝子の棟の櫛を爺さんやを一枚とり出して、私に示す。

「殿の御紋、柳河侯の奥方秘蔵の、ぎやまんに打抜き紋を彫んだもの……」

紫の袷紗ちりめんの褪色あせに包まれた黒塗くろぬりり箱の大小の中からである。

次いで取出す……同じ紫ちりめんの塗箱から櫛と対の笄、銀縁の硝子で扇型の中に、これも打抜き、祇園守、足は鼈甲の一本。涼しい優物。

と記されている。ただ加師の方法は明らかでない。

加藤幸次『江戸期のガラス』（徳間書店、昭和四十七年）には松垣元吉氏所蔵の筑後柳河藩主立花家の家紋、中結祇園守紋を彫り込んだガラスの櫛の図が掲載されている（同書、一八八図）。この陰刻がグラヴィールによるものであることは写真からもわかるが、この櫛をみられた加藤氏も解説でグラヴィールである旨を記されているし、松垣氏に問合せた結果も同様であった。

(14) 山本世孺（亡羊）『本草綱目釈義』（『古事類苑』50「植物部二・金石部」吉川弘文館、昭和四十六年）、金石部、三二三頁。

(15) 饒田喩義、前掲書、二二三頁。

(16) 大浄（敬順）『遊歴雜記』文化十一年序、四編、巻之上、四十七（前掲『江戸叢書』巻の六、昭和三十九年）、一〇二頁。

(17) 棚橋淳二「日本のガラス——見世物——」(『セラミックス』第七巻第五号、窯業協会、昭和四十七年五月)、三五—一頁、V1図。

(18) 朝倉亀三(無声)『見世物研究』(春陽堂、昭和三年)、二—三頁において、朝倉氏はこの大燈籠について

長崎の細工人が、燈籠に五ケ年と蘭船に七ケ年苦心を重ねた結晶だけあつて、燈籠の高さ二丈二尺五寸、横渡り一丈三尺、総目方百八十四貫八百目といふ巨大の六角形で、蘭船も亦長さ二丈余の壮麗な細工であつた。大燈籠の各面には、悉く浮上彫で異国の風物を現はしたものであるから、其玲瓏たる雄大の光景は、さながら歴史像を見るやうな美観であつた。

と記しておられる。朝倉氏がこの部分を他の資料によらず、第十三図に示した大燈籠の図によってのみ記されたとなると、同氏の説明は必ずしも正確なものとはいえないであらう。それは第一にこの釣燈籠は八角のように思われるし、第二に燈籠の各面にみられるという異国の風物は浮上彫り relief によるものではないからである。すなわち燈籠の中部にみられるのは五弁の花と葉をつけた老大樹に孔雀をとまらせた細工物で、丸彫りである可能性は絶無でないとしても、浮上彫りである可能性は全くないからである。

(19) 秋收冬蔵『学通三客』(国書刊行会「江戸時代文芸資料」第一、名著刊行会、一九六四年)、四四四—四四五頁。

(20) 田宮悠(仲宜)『嗚乎矣草』版本、文化三年刊、卷之一、四ウ。京都大学附属図書館蔵〔10-05, 4, 5; N30070〕。

(21) 橋春暉(南谿)『北窓瑣談』卷之四(日本随筆大成編輯部「日本随筆大成」第二期第八回、日本随筆大成刊行会、昭和三年)、二四九頁。

(22) 斎藤幸成、前掲書、卷之五(前掲「江戸叢書」卷の十二)、一四四頁。

(23) 斎藤幸成、前掲書、卷之七(前掲「江戸叢書」卷の十二)、二二〇頁。

(24) 大槻茂質(玄沢)『蘭訳棧航』卷之上(大槻茂雄編「磐水存響」乾巻、大槻茂雄発行、大正元年序、一六頁。(京都市・田沢次生氏の御教示による。))

(25) 馬場貞由「硝子製法集説」稿本、文化七年凡例、凡例一ウ。静嘉堂文庫蔵〔28633.2/97.35〕。

(26) 馬場貞由、前掲書、上巻、十三—十三ウ。「製硝子法」の内。

(27) 馬場貞由、前掲書、下巻、九ウ。「製水晶硝子法」の内。

(28) 馬場貞由、前掲書、下巻、二十二—二十二ウ。「用ミラック擬製玉石硝子料製法」の内。

(29) 馬場貞由、前掲書、下巻、二十四—二十四オ。右項目の内。

(30) 棚橋淳二「近世日本におけるガラス製造法の発展とその限界」(四)『研究紀要』第十一号、松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会、昭和四十四年)、四九―五〇頁および五八―六七頁(縦組)。

(31) 棚橋淳二、前掲論文(六)(前掲『研究紀要』第十三号、昭和四十六年)、二〇―二二頁(縦組)。

(32) 棚橋淳二「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス」(一)(前掲『研究紀要』第十六号、昭和四十九年)、四四―七五頁。

棚橋淳二、前掲「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス」(三)(前掲『研究紀要』第十九号、昭和五十二年)、四一―七二頁。

棚橋淳二、前掲「江戸時代のガラス」一五八―一六一頁。

(33) 花井一好「和硝子製作編」稿本、文政十二年序(平井保正編『尊忠叢録』卷三十五)、九〇―一〇(本文)。前田育徳会尊経閣文庫蔵。以下原文。

右に記す処の色消の二方ハ今時通称に言ふ義屋満の法なり或ハ色消に海石榴の灰或ハ檜の灰又ハ呉斯を用ゆるもありて其物の性質に依て紫色を帯るもあれバ試て自得すべきなり則ち「加无左之」「加宇加以」杯に造る物は是なり

(34) 花井一好、前掲書、十〇―十ウ(本文)。以下原文。

今世間に専ら流行なす偽製の義屋満は酒酪の器或ハ笄、掃枝等に造れる物ハ皆此法に依て製するものなり絶て本製の硝子を作る者なし故に其色ハ白しといへども破れ易し実用の器となし難きものなり左に其法を載す

(35) 花井一好「和硝子製作編附録」稿本、文政十三年附言(前掲『尊忠叢録』卷三十五)、一〇―二〇(本文)。以下原文。

近頃ハ和製義屋満の「かんざし」「かうがい」の類世に流行して貴賤となく是を玩弄が故に奸商等尋常の和硝子に種種贗造の方ありて利を得んが為に偽製して義屋満の名称を冒す然れども愚婦女子輩と雖微しく鑑定する処ありて青色を帯たる杯とて是をいやしむ又其細密に至りてハ金公の入りたるが故に目方ありと言ふその目方の軽くして潔白なるを以て良品と言ふ故に玻璃匠ハ復其上を工夫して贗造せんことを計る者ありと茲に論ずるハ唯色消の硝子を言へる而已

○西洋の地方にても色消の硝子を製すに金公を絶て用ひざるが故に其目方を軽くして且つ其色も潔白なり我邦にても色消の上好純白透明なる硝子を煮るべき種葉ハ多く産せり……(下略)……

(36) 花井一好「金剛硝子製造法」写本、天保三年附言(『玻璃精工全書』の内)、六ウ―七オ(本文)。東京大学史料編纂所蔵(Ⅱ12-2)。

(37) 花井一好、前掲「金剛硝子製造法」七〇一八〇（本文）。

(38) 花井一好、前掲「金剛硝子製造法」十二ウー十三オ（本文）。

(39) 花井一好、前掲「金剛硝子製造法」十六オー十六ウ（本文）。以下原文。

我カ皇室ニヲイテ蓬砂ヲ用ヒテ創テ硝子ノ上品ナルモノヲ製造ナスコトヲ工夫セシハ嶋田杏寿惟親ヲ權與トナス今ノ世ノ蓬砂ヲ以テ硝子ノ製造スル者ハ皆コノ嶋田氏ノ法ニ倣テ造ルトナリ蓬砂ヲ用ヒテ江戸ニテ上好ノ硝子ヲ造リテ其名ヲ得シ者ハ芝神明宮ノ前ナル玻璃舖ニテ小山強（弥一棚橋訂）兵衛ナリ江戸ノ硝子屋衆多ノ中ニモ吹物ノ細工ニ勝レテ棟（練カ一棚橋）妙其功工巧最モ精シトイヘリ小山カ造ル処ノ白色透明ニシテ美ナリトイヘトモ其価廉ナラスシテ且ツ藥槽ノ製煉ニ用ヒテ堅硬ニアラサルカ故ニ破裂ノ患アレハ實用ノ器トハナシカタシト或人ノイヘリ酒辺玩弄ノ器ニハ便ナルヘキ歟

(40) 益富寿之助「正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究」（日本薬物趣味の会、昭和三十三年）、一九四頁。

李時珍「新註校定国訳本草綱目」木村康一新註校定代表、第三冊（春陽堂書店、昭和四十九年新註増補版）、七〇一―七〇二頁。益富寿之助氏による新註(5)―(7)による。

(41) 棚橋淳二、前掲「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス」(一)、七五頁、註(5)。

(42) 杉江重誠「ガラス」（共立社、昭和十五年改訂四版）、一六頁―一七頁。

(43) 日本歴史大辞典編集委員会「日本歴史大辞典」第五卷（河出書房新社、昭和五十年、増補改訂版第十一刷）、八五頁。

(44) 信濃教育会「増訂象山全集」第三卷（信濃毎日新聞、昭和九年）、三〇四頁。以下原文。

例の硝子も近日煉立候を序有之御勝手方へも入御覽候其節既に西洋にあまり劣り候はずと自負仕申上候事にて候ひき職人も参り候につき細工にか、らせ見候所此表にて一通りギヤマン称称し候もとは格別の相違にて其質堅剛に御座候故に細工にも至て義剛にて仕にく、と申事に御座候

(45) 信濃教育会、前掲書、第三卷、三一五頁。以下原文。

尚々此程高覧にも入れ候スランガと申製菓の器尤も試みの為め小なる筈にて煉立候故火力弱く候て泡はぬけ切り不申候へども其質の美に至り候ては西洋にても最上之品にて……（後略）……

(46) 信濃教育会、前掲書、第三卷、三二八―三二九頁、三三一―三三二頁。以下原文。

半御内用筋を以阿蘭陀方のギヤマンを製し申候蘭書中數十種其方御座候その尤もよき法を數品製し申候いづれも存じ候まゝに出来仕候硝石精綠礬油の類を貯へ候には至て堅剛の質に無之候てはその納れ候砌何とも無之様にてもやがてひゞわれ損じ申候蘭製のは幾年貯へ置候ても聊か損じ不申候即その方に御座候又硝石精等を取り候スランガに致し候て試み候に何とも無之候常ていの品にては忽ち破れ候てぼろくゝに成り申候和製の仕法の内にて堅き仕掛に致し候ても夫にては持ち不申候是も試み申候

……(中略)……

御内用向にて始め候訳はその表河原に御座候黒き火打石はラテン語にてクワルトスと申ものにて最上堅剛のギヤマンに相成候と申事蘭書中にて見出し候

……(中略)……

尚々御慰にギヤマン破片四種御覧に入候いづれも御焼き御試可被下候火に当り候所早く丸るまり候は其實の柔なる証に御座候以上

(47) 棚橋淳二、前掲「日本のガラス―引札Ⅰ―」(前掲「セラミックス」第七卷第三号、昭和四十七年三月)、一九四―一九六頁。

(48) 棚橋淳二、前掲「日本のガラス―引札Ⅱ―」(前掲「セラミックス」第七卷第四号、昭和四十七年四月)、二六六―二六八頁。

(49) 棚橋淳二「和硝子製作編并附録」について「Ⅱ (Glass. 2. ガラス工芸研究会、昭和五十一年)、一〇頁。

(50) 国書刊行会、前掲「江戸時代文芸資料」第一、七頁(朝倉無声による例言)。

(51) 秋収冬蔵、前掲書、四四四頁。

(52) 下中弥三郎「大辞典」第十九・二十卷(平凡社、昭和二十八年、縮刷第一刷)、第十九卷、三三六頁。

(53) 岩橋善兵衛「寛政拾二年正月吉日仕入方直段扣帳」五ウ、岩橋弥造氏蔵。

(54) 西巻興三郎編「太陽コレクション5」かわら版・新聞「江戸・明治三百事件」第一号(平凡社、一九七八年)、三六頁。

(55) 塚田泰三郎「和時計」(東峰書院、昭和三十五年)、一七九頁。

『国書総目録』第七卷(岩波書店、昭和四十五年)、四七五頁によると「松浦竹四郎日記」と題する書が名古屋市蓬左文庫に存し、活字本は「吉田松陰全集」原典版、第十卷(岩波書店、昭和十一年)に抄録されているという。名古屋市蓬左文庫所蔵の水野正信編

『資治雜笈』〔33〕、第四輯卷之五、五十六オ一六十四ウには確かに同名の書が収録されているものの、その内容は『蝦夷記抄録』で塚田氏引用の部分は見当らない。また「吉田松陰全集」第十巻、三二七―三三六頁所載のものは『癸丑浪合日記』『自叙簡約松浦竹四郎伝』『甲寅のあらまし』『下田巡廻記』などよりの抄録であるが、やはり問題の記事はみられない。不日『世界』（京華日報社刊）等についても出典の確認を試みたい。

⑤6 大槻文彦『金城秘鑑補遺』（大槻茂雄編、前掲書、乾巻）、七二頁。

⑤7 大槻茂質（玄沢）『蘭説弁惑』巻之上（大槻茂雄編、前掲書、乾巻）、一三頁。

⑤8 大槻茂質（玄沢）、前掲『蘭説弁惑』巻之上、一九頁。

⑤9 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第六巻（小学館、昭和四十八年）、二七五頁。

飯塚友一郎『歌舞伎細見』（第一書房、大正十五年）、五八八頁によると「歌舞伎に脚色されたのは明治十三年五月猿若座上演「有松染相撲浴衣」。作者は河竹黙阿弥」とのことである。国立国会図書館には吉村新七著作の「演劇脚本」上巻、「有松染相撲浴衣」扇音

刊、明治二十一年）〔452-600〕があるが、これは引用した部分が見当らない。

⑥0 林源吉「長崎のビイドロとギヤマン」（『茶わん』第七巻第八号、宝雲舎、昭和十二年）、二七頁。

林氏は石崎融思「長崎古今集覧名勝図絵」稿本、天保十二年序、長崎市立博物館蔵の口絵（第三十図）についての説明で、

左方にはギヤマンの銘酒瓶、ギヤマンの蓋物、ビイドロのコップを描き……（後略）……と記しておられる。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第三十図 『長崎古今集覧名勝図絵』所載の扉絵（部分）。銘酒瓶と蓋物には切子が施されているように見える。長崎市立博物館蔵。写真・長崎市立博物館。

(61) 自來、前掲書、一一五頁。

(62) 橋卷陣(南総)、前掲書、二四九頁。

(63) 木内重暁(石亭)、前掲「湖上石誌雲根志」前編、卷之二、二十七オ。

(64) 饒田喻義、前掲書、二三頁。

(65) 野口文竜「長崎歳時記」寛政九年自序、武野安子校訂(長崎県史編纂委員会「長崎県史」史料編、第四、吉川弘文館、昭和四十年、九一六頁。

(66) 中川五郎左衛門「江戸買物独案内」版本、文政七年序、下巻、三百二十九ウ。国立国会図書館蔵〔123-229〕。

(67) 信濃教育会、前掲書、第三巻、三二八―三二九頁。

(68) 花井一好、前掲「和硝子製作編」附言、二ウ―三オ。

## 要約

今、国語辞典に倣いギヤマンの語義・用例を記すと差当り次のようになるであろう。

ギヤマン〔ポルトガル語 *diamante*・オランダ語 *diamant* から〕①至硬の玉石(具体的な石名は挙げられていない)。

\*ギヤやどべんかどる「ぢやまんでといふ玉に勝りてかたき物なしといへども」\*コリヤード羅西日辞典「*diamante, aru*

*tama mono*」②彫画用の石。石榴石(≡金剛石・金剛砂・金剛しよう・合玉石)。\*土性弁「俗ニ金剛砂……大ナル者

ニテ玉器及ヒ硝子等ヲ彫画スルニ宜キヲ以テ或ハ「ギヤマン石ト呼ブ」矢根石。\*昆陽漫録「矢根石ニテ、硝子オヨ

ビ今里茶碗彫ムレバ、阿蘭陀ノデヤマンノ類トミユ」③ダイヤモンド(≡金剛石)。\*物類品隣「壺産デヤマン壬午

主品、中田村先、生具レ之ヲソノ大サニ分許是ヲ指<sup>ユヒ</sup>驅ニ着ク其質水精白石英ノゴトシ至テ明ノ徹ナリ……其価

数「十」金ヨリ百「金ニ至ル」④ギヤマン彫り(グラヴィールを含む)。ギヤマン彫りのある器物。\*雲根志前編「ギヤマンハ石の名にあらずかたき鉄石やき物等にはほそきことをほりたるをキヤマンほりといふと」\*長崎名勝図絵「ギヤマン 櫛笄コップの類硝子の諸器に草花を彫ものす」⑤クリスタル・ガラス(≡水精玻璃・色消硝子)。\*和硝子製作編「右に記す処の色消の二方ハ今時通称ちかてろに言ふ義屋満ぎやまんの法なり」⑥ガラス。\*箱書「瑠璃きやまん徳利」⑦近世以降、切子ガラス(≡カット・グラス)。\*長崎のビイドロとギヤマン「左方にはギヤマンの銘酒瓶、ギヤマンの蓋物、ビイドロのコップを描き」

また語義変化については次のように纏められるのではなからうか。

①この語の伝来当時は漠然と至硬の石とされていたものが、元禄頃から金剛石即ち柘榴石の類と考えられ始め、次いで宝暦頃には金剛石即ちダイヤモンドに当てられるようになった。

②船載のガラス器にみられるダイヤモンド・ポイント・エングレイヴィングがギヤマン彫り、即ちダイヤモンドによる彫り Graveel であることを教えられ、やがて所謂グラヴィールにもこの語が当てられたと思われるが、ギヤマン彫りおよびギヤマン彫りの施された器物は遅くとも安永頃にはギヤマンと略称されていた。

③長崎においては文政頃でもなお硝子と、硝子にぎやまん彫り(グラヴィールを含む)が施されたギヤマンとが区別されていたが、三都を中心とする他の地域では、遅くとも文化頃には船載のガラスに代表されるような堅硬で無色透明な、即ちギヤマン(石)のようなガラスをギヤマンと称した。しかし間もなく硝子と混用され始め、ギヤマンは硝子と同じくガラスを表す語としても用いられた。近代以降に江戸時代のギヤマンは切子ガラスであったとの考えも現れ、この語が切子ガラスに当てられたこともある。